

山ざくら

第26号 平成7年11月一〇〇周年記念号
関東氷上郷友会

おもわず新しい



“包装文化を創造するネクスタグループ”

ネクスタ株式会社

本 社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京支店	111	東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F	Tel 03-3861-2331
大阪支店	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-939-1281
名古屋営業所	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
九州営業所	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ ラッピイ株式会社

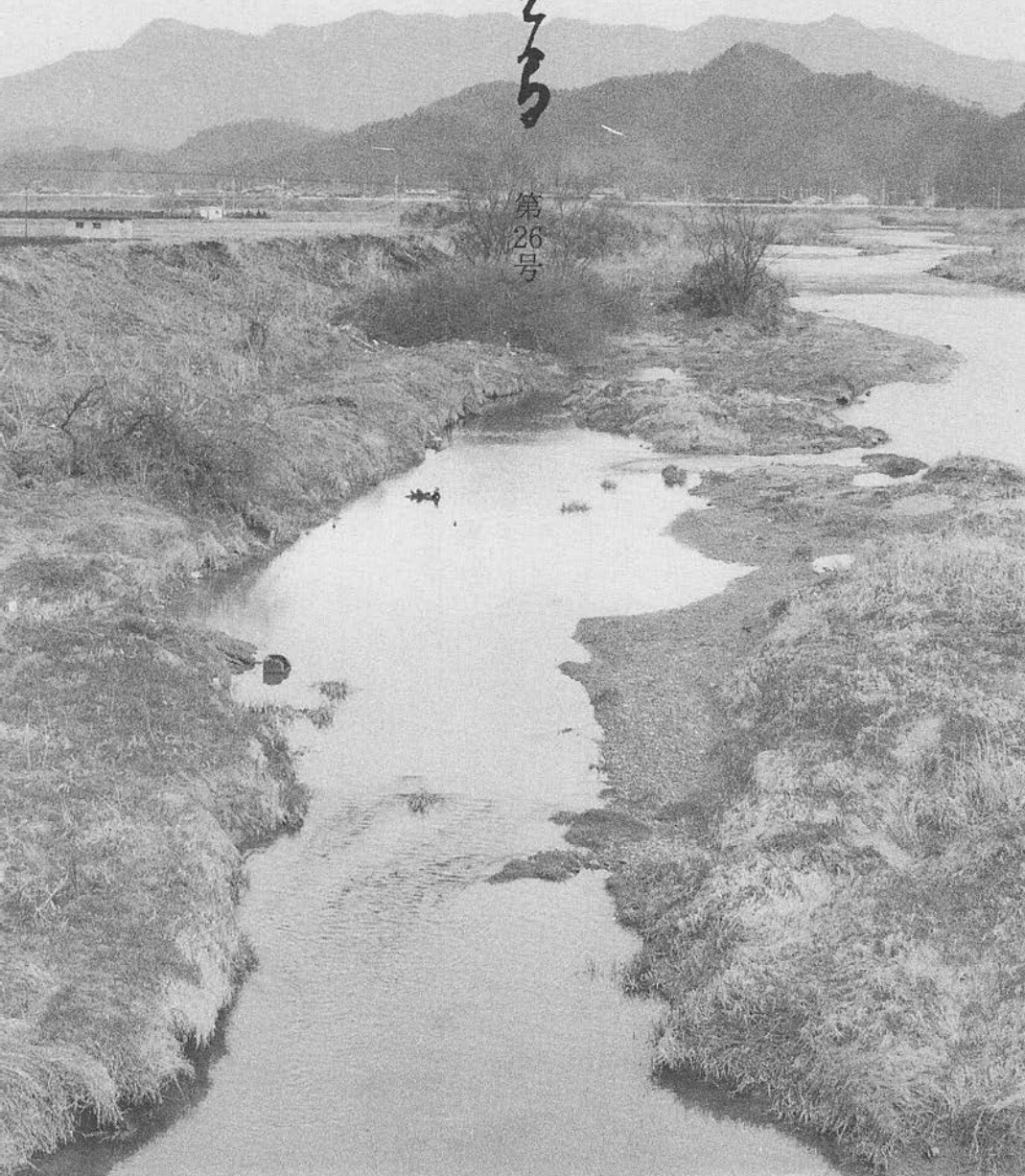
本 社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
東京工場	121	東京都足立区中央本町5-22-12	Tel 03-3849-6611
千葉工場	270-02	千葉県東葛飾郡関宿町台町2192	Tel 0471-96-1721
名古屋工場	451	名古屋市西区又穂町3-13	Tel 052-521-8111
関西工場	669-13	兵庫県三田市テクノパーク2-2	Tel 0795-68-5500
福井工場	919-04	福井県坂井郡春江町江留下相田63-66	Tel 0776-51-5886
福岡工場	811-25	福岡県粕屋郡久山町猪野小柳884-1	Tel 092-976-2211

ネクスタ パッケージ株式会社

本 社	536	大阪市城東区今福西3-2-24	Tel 06-932-7214
栃木工場	349-13	栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938	Tel 0282-62-3321
兵庫工場	675-11	兵庫県加古郡稲美町蛸草1438-1	Tel 0794-95-0257

山 ぎ ら

第
26
号



山ざる 第26号 目次

〈表紙〉常岡幹彦・麗暉（山南町・平成七年）

〈口絵写真〉初冬の丹波……渡邊隆男／嫁入歌……青垣町より 4

後世に贈る一〇〇周年……村上末吉 5

関東氷上郷友会一〇〇周年を迎えて……吉住重造 6

〈年表〉関東氷上郷友会一〇〇年の歩み……10

△関東氷上郷友会創立一〇〇周年記念特集・いろいろまぜこぜ一〇〇年史▽

意気さかん明治の「青春」……大野善三 12／田家の人々……上山 顕 17

昭和十年頃の銀座と田舎娘……木村つた江 22／龍治郎さんの酒と趣味……足立 正 26

戦火の中の青春……近藤 勇 28／国民学校一年生の夏……徳田八郎衛 30

はたちで終戦、今や古稀……永井 勇 34／私の「戦後の丹波」……谷 達雄 38

道義地に堕ち世相狂乱……佐々木盛雄 41／夜行列車は行く……池田 忍 45

△祝 辞▽

更なるご発展を……植田憲雄 47／記念すべき郷友会一〇〇周年……足立三治 48

関東氷上郷友会百周年を祝して……谷垣 尚 49

△ふるさと随想▽

古里賛歌……渡邊隆男 50／はるかなりわが鴨庄村……丸川健三郎 56

母の思い出……梶原矢寸子 61／丹波という言葉……増井 攻 63

柏原中学校時代の思い出……東郷 茂 64／故郷の思い出……須原逸郎 65
我が故郷「新井村北山」……能勢 徹 67／谷間に轟く「しし魯し」……芦田昌保 68
「金剛石も磨かずば……」……池田 忍 70／「数え唄」の由来……木村つた江 72
〈俳句〉ふる里……中野真理子 73

△近況・エッセイ▽

遥かなりカイバル峠……岸本真輔 74／超大作「麗暉」を描いて……常岡幹彦 75
世間は狭い……池田和子 78／五十歳でトライ……細見利明 79
南仏・美の旅……生田清弘 82／命ある限り……高尾久子 88
年齢四つ論とサミュエル・ウルマンの詩……足立和巳 89
季節の移ろい……井田悦子 91／柏原高校の応援歌について……木呂子恵美子 93
私の「旅」人生……田 敏夫 95／私の教育考……上田吉明 96
トルコ・アンカラにて……上野重喜 98／氷上郡と福知山線……梶原 清 99
カルト教団とマインドコントロールについて……池田達人 101
「かわしろ共和国」立国活動……村上 彰 104

△関東氷上郷友会・人名録▽……宮野 近 106／続・氷上政記……宮野 近 出

△インフォメーション▽展覧会／同好会／お祝い／同窓会……120

平成六年度総会報告……114／BOOKS……118

お便り短信……123／丹波の動き……126／会計報告……135

関東氷上郷友会々々則……136／会誌「山ざる」総目次……138

嫁入歌

—青垣町史より—

- めでためでの 若松さまは 枝も栄える 葉も茂る
- 蝶よ 花よと 育てたけれど 今は 他人の手にかける
- 娘 いきやるか あの坂越えて 生れ所在を 他所にみる
- 向うに見えるは お城か 家か あれは殿御の上やかた
- たんす 長持ち なかまで金じや もろたむこさん うれしかろ
- たんす 長持ち ゆたんをかけて 嫁はあとから かごで来る
- お前百まで わしゃ九十九まで とともに白髪の生えるまで
- さいた盃 なか見てのみやれ なかは鶴亀 五葉の松
- さても 美事なお家のかかり 黄金なる木や 銭すだれ
- 天下泰平で 思うことかのた 末は鶴亀 五葉の松



後世に贈る一〇〇周年

会長 村上末吉



会員の皆様、一〇〇周年の記念大会が幕を開けようとしています。皆様の人生における一閃ともなれば幸いです。是非ご参加くださるよう切にお願い申し上げます。そして後生にその栄を伝えようではありませんか。

創立されて今日に至るまで、諸先輩が継承されたご努力に対し、深甚なる敬意を表したいと思います。明治一二八年に当る平成七年に遭遇した幸運は会員にとって何でしょうか、考えさせられるところです。

昭和三十数年頃催された郷友会に参加したことがあります。出席者は総て老人格の方十数名で、会長のお話を聞く会のように、若輩の私には雲の上のように感じられたことを覚えています。昭和三十年代の終り頃、石橋治郎八様が会長になられ、会の活性化を図りたいと決意され、私も参加させて頂き会報が必要であるとの結論によって、昭和四十一年六月『山ざる』第一号が発刊されました。内容は汗顔の至りで、

これを継承することは無理であると思っていました。

しかし昭和四十六年、足立三治氏会長のもと、松山幸逸氏のご熱意により、昭和四十七年一月第三号が発刊されることになって『山ざる』は覚醒の感をもたらし、渡辺隆男氏のご尽力もあって今日に至っております。

会は一人や二人の力で維持できるものではありません。各理事や山ざる編集委員の方々など、お忙しいお勤めの間を利用してボランティア活動をしてくださることを忘れてはなりません。中でも名簿の整理、連絡通信、山ざる発送など、面倒な仕事をこなしてくださる坂上勝朗氏の陰の力があればこそです。ここに名をあげて深く感謝申し上げたいと思います。

今日の会は昔と違って百家争鳴、一見無秩序のように見えますが、そこは丹波人、今回の一〇〇周年の実行委員会の空気が騒然としています。熱気に溢れていて、真剣そのもので頼もしい限りです。実行委員会は七、八回催され、多くの準備すべき事項がありますが、記念大会は必ず成果を期待できると信じております。

どうか皆様、各担当役員の努力に応えるためにも、そしてこの会を後のちまで引継いでくれる方々への贈りものとして一〇〇周年記念大会に多くの参加者を得て、盛大で内容の充実した会にしようではありませんか。是非ご参加くださるよう切にお願い申し上げます。郷友の皆様にはお元氣でご活躍のことと拝察申し上げます。

関東氷上郷友会一〇〇周年を迎えて

一〇〇周年記念大会実行委員長

吉住重造



関東氷上郷友会は、明治二十九年十一月二日、東京神田において創立の発会式を行い、今年一〇〇歳を迎えました。

当時東京帝大の学生で、後の農学博士、安藤広太郎氏や、同学生で後の大蔵次官 田 昌氏らの奔走によって結成されました。

初代会長には旧柏原藩主、織田信親子爵、副会長には元台湾総督、田健次郎男爵が就任されました。

爾来今日まで多くの先輩によって、その精神は受け継がれ、今日に至りました。

丹波の国氷上から、大志を抱いて上京された先人たちによって創設された郷友会が、一〇〇周年を迎えられたのは、日露戦争、第二次世界大戦、終戦等々幾多の苦難に遭遇しながら

も、郷友会を維持し発展させてくださった、先達の努力の賜物であると心から感謝いたします。

田舎の代名詞で呼ばれる氷上ですが、この一〇〇年間に人材雲の如く輩出し、社会に貢献して参りました。氷上は人材が豊かな里としても、つとに有名であります。

山紫水明、風光明媚なふる里と、多くの優れた先輩と仲間をもつ私たちは、ほんとうに幸せであり、誇りに思っています。『ふる里の山に向かい言うことなし、ふる里の山はありがたきかな』自然とこの歌を口ずさみます。

現在の会員は千五百名です。希望に燃えて上京し勉学にいまそむ学生諸君。社会人として第一線で活躍する人たち。功成り名遂げて悠々自適の方々。老若男女、ほんとうにうれしい仲間です。私達は諸先輩の意志を継ぎ、本会を立派に次代に伝えなければなりません。

一〇〇周年は大きな節目の年。この記念すべき一〇〇年を意義あるものにするため、平成六年の総会において、記念大会の開催が決まり、開催日を平成七年十一月十八日、会場が椿山荘と決定しました。同時に大会の実行委員長に不肖私が推挙されました。大変光栄に存じます。微力ですが懸命に努力いたします。

今年に入り、理事全員による実行委員会を結成し、企画、渉外、総務、財務の四部会にそれぞれ理事の方を委嘱し、万

全の体制で成功を期しております。

この大会を立派に成功させるためには、二つのことが肝要です。

第一は、会員の皆様全員に参加していただくことです。私は少なくとも最低三五〇名以上のご参加を願っております。さいわい現在二五〇名以上の方々に発起人を快諾していただき、協力していただくことになりましたので心強く思っております。

第二は、この記念パーティを盛り上ったものにする事です。そのために、アトラクション、福引き、記念品等々、盛

りだくさんの企画を用意してお待ち申しております。

ただ、これら企画を催すためには多額の経費を要します。出費が多端の折から恐縮でございますが、何分のご協力を心からお願い申し上げます。

この大会を立派に成功させることが、郷友会百年の伝統を育んでくださった先達のご苦勞に対する、私たち現会員の責務と存じます。

何とぞご支援、ご協力を切にお願い申し上げます。

三つにて腹よろこびぬ丹波栗 森 澄雄

郷友うち揃って 椿山荘に大集合!

関東氷上郷友会は一〇〇周年。一〇〇年に一度の大集会。

同じふるさともつ、あなたもわたしも老若男女大集合。

楽しく気さくなひとときを。おみやげ積んで待ってます。

知ってる人がいない気がひける。それが郷里の悪いくせ。

知らない人を知る喜びを、あなたはきっと待っている。

年も身分も職業も何もかも無関係、そこが楽しい郷友会。

そのむかし椿山荘で何百人と、孫子に語ろう一〇〇周年

平成七年十一月十八日(土)、十一時開催。於目白・椿山荘。

100周年は一生一度のめぐり合い

平成7年11月18日(土) 椿山荘で

A「なんや、去年あたりから百周年、ヒャクシュウネンゆうて大騒ぎしてからに、百周年がそんなにめでたいんかいね。きょうび百歳こえる人ぎょうさんおるし:」

B「そらーめでたいこととてせ、百年ゆうたら一世紀、世紀の祭典ちゅうぐらいでつさかいに、それに巡り会えたというだけでも、幸せもんや。あんたかてワシかて、あと百年目の記念大会までよう生きとてないで」

〈この頁では、百周年の意義を格調高くアピールし、記念大会を大いに盛り上げようとの趣旨でしたが、他の頁で十分その趣旨は満たされており、「苦しいときの丹波弁」とばかり心やすう切り出したら、元に戻すのが難しくなり、いつそ最後までゆうてこまいちゃろ〉
A「郷友会ゆうても、年に一回同郷のもんが集まって、丹波弁でウジャウジャゆうだけでっしゃろ、そんなもん百年、二百年つづいたって値打ちないわい」

B「あんたも妙にひねくれたという人やな、そらー郷友会でナニしようとする目的もないし、

東京にちよこつと丹波の空気を運んできて、西の空に夕焼け雲を眺めるようなもんでつさかいにな。せやけど、そうセカセカせんと、たまには夕焼け雲を眺めてでんな、来し方进行たり、今日の幸せをかみしめたりするのも人生のユトリちゅうもんとちがいまつか」

A「ほなわかった。それで会費はなんぼじゃえ」

B「ひとり八千円だす」。A「えろー高いな」。

B「高い!?!、天下の椿山荘でつせ、テンカの:」。

A「あんたも田舎もんやな、チンザンソウゆうて、そんなに興奮してからに。ワシかて知つとるわい。ほんまは会費だけじゃ足らんのじゃろ」

B「さすがは苦勞人、ようわかってまんな。なにせ一人一万五、六千円する豪華パーティーでつさかいにな」。

A「そなおミヤゲもつくんかいね」 B「あたりマエダのクラッカー、古いね」 A「マツタケ一貫目はどか」

B「アホ調子にのんなちゅうに。恒例の福引きやら、ぎょうさんありますがな、松茸とゆうたら有名な常岡文龜画伯の「名作は香りたつ」ような色紙が全員にでますねん」

B「ほな、楽しみにしてまっさ」

A「会の用意もとのうて、あとは郷友打ちそろうてな、おこしをマツタケでんねん」(ゆうたったノ)

関東氷上郷友会一〇〇周年記念大会要領

◆日時・平成7年11月18日(土) 午前11時～午後2時

受付開始午前10時30分

◆会場・椿山荘・鳳凰の間(4階)

東京都文京区関口2-10-8(下記参照)

◆行事・第一部

定例総会・祝寿会(花束贈呈)

・第二部 一〇〇周年記念パーティ

*西崎 祥「祝舞」

*福引大会(有志寄贈の豪華賞品ほか多数)

*おみやげ・常岡文亀画伯の色紙を全員に、
福袋も用意しております。

*食事は立食式ですが、椅子も多数準備

◆会費・大人八〇〇〇円、学生五〇〇〇円、子供無料

◆協賛金・有志の方に一口五〇〇〇円以上のご協賛をお願いしております。

※お手数ですが、会費と協賛金は別送のご案内に同封した振替用紙でお振り込みください。



鳳凰の間(4階)

〈交通〉地下鉄：有楽町線江戸川橋駅1a番出口徒歩約10分

バス：JR目白駅から都バス「椿山荘行」

※お帰りの際、JR目白駅まで貸切バスが出ます。

〈年表〉 関東氷上郷友会一〇〇年の歩み

和暦		西暦		事 項		和暦		西暦		事 項	
明治29		一八八六		11・2 東京神田・青柳亭で東京氷上郷友会の発会式。初代会長に織田信親子爵、副会長に田健治郎氏		明治44		一九二二		12・3 田氏・玉川別邸で第二回例会	
30		一九一七		* 4・ 兵庫県立柏原尋常中学校創立		大正10		一九二一		11・27 田氏・玉川別邸で大正3年以来初の例会。第二代会長に田健治郎氏が就任、会則を改正	
34		一九二一		2月、「氷上郷友会」と改称して組織変更、東京を本部とし、大阪郷友会を合併して大阪支部（支部長・田継吉氏）に、新たに京都支部（支部長・津田要氏）、神戸支部（支部長・野添宗三氏）を創設		昭和5		一九二〇		田健治郎氏歿。その後昭和10年代まで会長は空席	
35		一九二二		* 4・ 旧制柏原高等学校発足		6		一九二一		* 松柏会東京支部発足。太平洋戦争中は例会を中断	
40		一九二七		4・20 柏原崇広小学校で氷上郷友会の創立総会。東京本部、大阪・京都・神戸支部のほか地元にも支部（支部長・宍戸秀策氏）を新設		9		一九二四		11・27 神田・学士会館で例会、三四名出席	
36		一九三三		5・17 東京上野公園・無極亭で東京本部第一四回例会。尋常中学校優等卒業者に賞状並びに賞品贈呈		10		一九二五		10・22 九段・軍人会館で氷上郷友会と柏中会の聯合大会（柏中会創設の年度不詳）。三三五名出席	
11		一九三三		5・15 上野・無極亭で第一六回例会。明治37年2月、日露戦争が勃発、この影響により40年まで郷友会の例会も下火に		28		一九三三		近畿の郷友会は東京本部から分離・独立	
11		一九三三		5・5 田健治郎氏の玉川別邸で第一九回例会		30		一九三三		織田信大子爵、第三代会長に就任	
11		一九三三		上野・無極亭で第二〇回例会		40		一九三三		その後、安藤広太郎氏、第四代会長に就任	
						41		一九三六		太平洋戦争中は例会も中断	
						44		一九三九		1・28 戦後初の氷上郷友会総会を新橋駅・日本食堂で開催。来会者一〇〇余名。石橋治郎八氏が第五代会長に就任。以後春秋二回の例会	
						40		一九三九		* 柏陵同窓会東京支部発足。松柏会東京支部再開	
						41		一九三六		11・20 東洋経済クラブ会議室で総会、三六名出席	
						41		一九三六		6・30 『山とる』創刊。題字は石橋会長揮毫	
						44		一九三九		5・11 浜離宮で春の懇親会、四七名出席	

昭和44

一九六

11・9 後楽園・涵徳亭で秋の懇親会、四八名出席

45

一九七

11・1 『山とる』第2号、表紙に常岡文龜画

11・29 秋の総会を兼ね横浜中華街へバス旅行

46

一九七

5・16 浜離宮で春の総会、四一名出席

・水上ゴルフ同好会発足、4月第一回コンペ開催

・水上基会発足、6月赤坂囲碁倶楽部で第一回基会

11・7 王子・名主の滝公園で秋の総会。石橋会長

逝去に伴い第六代会長に足立三治氏、名誉会長に有

田喜一氏を選任

47

一九七

1・31 『山とる』第3号発行、以後毎年発行に

5・21 深川・清澄庭園で春の懇親会、五〇名出席

11・11 東京丸ノ内・山水楼で総会、会費年額千円

(従来五百円)に。総会後、有田名誉会長の国務大

臣企画庁長官就任の祝賀会

48

一九七

11・7 中央区勤労福祉会館で総会、二五五名出席

50

一九七

11・11 原宿・東郷記念館で総会、三〇名出席

51

一九七

11・12 原宿・東郷記念館で総会、八〇歳以上の長

寿者二二名に対し、初めての祝寿。以後毎年八〇歳

の方に祝寿を行う

52

一九七

11・17 原宿・東郷記念館で総会、四〇名出席

54

一九七

11・23 ABCホールで総会、五〇名出席。水上郡

町村会長より足立三治会長に感謝状

55

一九七

11・3 本会顧問・小谷正雄博士に文化勲章

11・16 青山・ダイヤモンドホールで総会、四一名

昭和56

一九七

11・15 市ヶ谷・番町共済会館で総会、足立三治会

長引退により伴仲信次氏が第七代会長に

57

一九七

11・12 浅草・麦とろで総会、足立前会長に感謝状

*10・ 松柏会東京支部を解散して柏陵同窓会東京

支部に合併

58

一九七

11・5 大手町・竹橋会館で総会

59

一九七

11・11 九段会館で関東水上郷友会創立八八周年の

60

一九七

記念総会・祝賀会、来賓・郷友ら二五〇名が出席

61

一九七

11・8 私学会館で総会、七一名出席

62

一九七

11・21 九段会館で総会、七〇名出席。伴仲会長逝

去に伴い村上末吉氏が第七代会長に

63

一九七

11・5 九段会館で総会、八〇名出席

平成元

一九九

11・25 九段会館で総会、九八名出席。名誉会長に

小谷正雄氏

2

一九七

11・17 九段会館で総会、七五五名出席

3

一九七

11・2 九段会館で総会、七二名出席

4

一九七

11・29 九段会館で総会、六三三名出席。平成7年の

一〇〇周年祝賀計画を決める。

5

一九七

11・29 九段会館で総会、六七七名出席

6

一九七

11・5 九段会館で総会、八〇名出席

7

一九七

11・18 椿山荘で一〇〇周年記念大会

いろいろ まぜ こぜ 一〇〇年史

—— 歴史の糸をタテ糸にそれぞれの関わりと思いを綴る脈絡のない年史

意気さかん明治の “青春”

—— 明治二十九年、郷友会発足の頃 ——

大 野 善 三 (柏原町)

一九九五年の一〇〇年前は明治二十八年である。

氷上郷友会が東京で発足したのが明治二十九年十一月。二十八年の秋に第一回が開かれる予定が一年延びたようである。その七年後の明治三十五年、柏原町崇広小学校に於いて、氷上郷友会の創立総会が開催された。郷友会の発想は東京から始まったとみられる。創立総会で、当時、衆議院議員になっていた田健治郎氏が挨拶した。明治二十九年、東京で設立した時、会長は旧柏原藩主織田信親氏、副会長は田健治郎氏で

あったと記録されている。

『山ざる』第16号に編集部が、「氷上郷友会創立のころ」の記事の中で、次のような紹介をしている。「当時東京帝国大学の学生、安藤広太郎（後農学博士）、田昌（後大蔵次官）氏らによって結成『春秋二季郷友一所二相会シ相互ニ親睦ヲ重ネ情意相通スルヲ目的トセシニ過キサリシニ云々』。この前年、明治三十四年二月、会則を改め、組織作りのため、臨時委員を置き、田健治郎氏（衆議院議員）を委員長に推し、中川一郎（農商務省山林局）安藤広太郎（農事試験場技士農学士）足立泰治（東京高等工業学校助教授）田昌（帝大生）五氏を委員とした。同じ年、大阪、京都、神戸、氷上に各支部を作り、「会の目的を親睦のみに止めず、主に育英事業に積極的に向かわんとしたものである」という高邁な目的をもっていたと伺える。

ただ、当時の代表会員の名前を見ると、いわゆるエリート官僚と帝大生が進める会であつたように感じる。近代日本に貢献する俊秀を重宝する時代を反映している。丁稚小僧で商店に勤めていた人が、同郷者を頼つて入会したかどうかは疑わしい。住込み女中で上京した娘さんがいても、この会のあることさえ知らなかったのではないだろうか。学生の会費は不要であるが、普通会员の会費は、一時金が五円、年会費が五〇銭。名誉会員は一時金一五〇円以上、或いは十年間に三〇〇円以上寄贈の者である。大福餅が一個五厘、消防士が一度出勤すると一〇銭貰えた時代である。新橋・神戸間の特急料金が五円し、寝台料金が三円した。中学枝に入る人さえ少ない頃で、上京して青雲の志を実現できる人は極く恵まれた人達であつた。だからこそ、遠い丹波の田舎から上京した若者たちには、郷友会は大変頼りになる存在だったに違いない。設立当時の東京の会員は八三名であつた。

『山ざる』16号によると、「別に基本金規定があり、これが即ち育英資金である。募金目標を約一万円としている。三十五年五月一日、柏原中学校第一回卒業生より三名、東京開成中学校卒業生一名に、学事奨励のためとして『チャンパー氏英語辞書』を贈っている」とある。同時に、こんな記事も見受けられる。「この会を郷里と連携し、育英の方法を確立し、将来の人物を養成し、郡人聚楽の設備を整え、政争を緩和に

し、彼我の壅塞を啓き、里仁の美風を助長せしめ、我郡の進歩を助け、福祉を増進せんことを期せり」と気宇壮大ではあつたが、「然れどもかくの如きは容易の業にあらざるなり。此を以て歳月を期し徐ろに時期を待てり。爾来三十四年、微々不振経営すこぶる慘憺たり」。こうした有志の会の運営が難しいことは、今も昔も変わらないようである。

その頃、日本はどんな社会だったのだろうか。郷友会を取り巻く社会環境を歴史の本からビクアップしたいと思う。年表を繰っていると、時代のテンポと社会の激動振りは、戦後から現在に至る時代と似ているように思う。維新から四〇数年で、近代国家の体裁を整えるべく、国を挙げて邁進していたその姿は、敗戦から五〇年間に焦土から経済一流国に変えて行つた奮闘振りに実に類似している。ただ、近代国家の建設が最優先された明治時代は、官憲が総てを仕切り、国家主義が指導原理だったのに対して、第二次大戦後は、民主主義を基礎に置き、民間の力を育て有用するという思潮に変わってきた。つまり、前半の五〇年間で近代国家の土台を固め、後半の五〇年で屋舎にしたと言える。

東海道線の新橋―神戸間に急行が走り始めたのは明治二十九年、一八九六年の事だった。所要時間は一七時間二二分とある。仮に、神戸を昼の一二時に出発したとして、列車が新橋に着くのは翌朝の五時二二分である。寝台車ならともかく、

戦前の三等車で一枚板の背もたれの席に座り続けていたら、その疲労困憊は想像に余りある。しかし、明治の人は忍耐強かった。いや、戦前の人達は耐えることが人生であった。

福知山線は、先ず尼崎から池田までが明治二十六年に開通している。摂津鉄道という会社が建設したとある。阪鶴鉄道という会社がこれを買収し、明治三十二年に福知山までの全線が開通している。水上郷友会の会員が比較的便利に上京でき始めたのは、郷友会の設立の頃である。

それから約五〇年後。第二次大戦に敗れた頃は、大阪―東京間は特急で八時間程度であった。今は、新幹線で三時間余りである。明治の頃から五〇年で汽車のスピードは二倍余りになり、一〇〇年で六倍になっている。いまの海外旅行に置き換えてみると、一七時間もあれば、ヨーロッパはおろか更に中近東にまで足が伸ばせる。

小学校の歴史の時間で習ったように、明治二十八年は日清戦争が勝利の中に終わった年である。三月二十日から、山口県下関の春帆樓で行われていた講和会議が決着し、四月十七日に条約が調印されている。清国北洋艦隊の拠点であった威海衛を水陸から攻撃し、壊滅に追い込んで降伏を止むなくさせ、講和に至ったのだった。しかし、講和条約の項目の一つであった遼東半島の割譲は、独仏露三国の干渉に合い、直ちに返還した。十九世紀にヨーロッパを覆った帝国主義の覇権

争いがアジアにも及び、その最後列に加わろうとしていた日本は未だ力不足で、列国の圧力に屈する結果となった。

この頃、日本の政治は旧来の藩閥政府からの脱出を図ろうしていた。維新以来、薩長土肥の主導権で政治が行われていたが、自由民権の思想と共に多くの人が政党政治を要求するようになった。一般国民の中にも、徐々にではあるが民主、自由の気風が広がって来ていた。日清戦争の戦勝を機に、国は様々な近代化政策を進める。陸海軍備の拡張、製鉄所の創立、鉄道の敷設、電信・電話・航海事業の拡張、日本勸業銀行など金融体制の整備、治水政策、台湾経営など、近代国家の基幹部分を固めるのである。

ただ、政権は目まぐるしく変わった。選択の難しい国の開発政策に関して議論が錯綜し、しばしば政府は立往生して、政権交代が日常茶飯となった。その中であって、陸軍、海軍大臣は現役の軍人を天皇が勅命するという制度であった。軍部では、政党の離合散集を快しとせず、元軍人が内閣総理大臣の椅子を取り、且つ軍部大臣を勅命で決めるといふように、日清戦争の勝利を契機に一步一步軍国の道を歩み始めている。勿論、政党政治が主流で、軍人が横行して絶対の権力を握るようになるのは未だ先のことである。その兆しが既に見えていたのである。

当時、ロシアが清国に大連や旅順などの港の租借権を要求

し、それを獲得した。日本との利害が真向から対立することになり、風雲急を告げていた。右翼団体からは、対露戦争の開始を煽るものも出てきており、産業の発展によって潤った資金を軍備拡張に使って、日露戦争への気分を徐々に進めつつあった。

この頃、日本主義の思想が叫ばれた。井上哲次郎らが日本協会を設立して、忠君愛国を唱導し、キリスト教の排撃を主張した。高山樗牛が「日本主義を賛す」という論文を発表して評判を取っている。ただ、こうした右翼思想だけが盛んになったわけではなく、安部磯雄、片山潜、幸徳秋水らが社会主義を唱えて、貧しい人達の応援をするという動きもあった。産業の発達と共に、各地で労働組合運動も進められた。しかし、社会主義を唱えた人達が集まって「社会民主党」を結成し、結社申請をしたところ、直ちに禁止せよとの命令を受け、党の命は三日で終わった。労働組合のストライキも治安警察法によって禁止され、運動はかなり弾圧された。

キリスト教排撃のあった一方、内村鑑三は英文によって著作『余は如何にして基督教徒となりし乎』を発表した。明治二十八年であった。キリスト教団の経営する幼稚園も出来て、貧しい人達に温かい手を差延べている。外国との交流が盛んになると共に、様々な西欧の思想が導入されていたのである。近代国家としての体裁を整えては来ていたが、未だ伝染病

の予防が充分に進んでいなかった。ヨーロッパでは十四世紀に猛威を振る「黒死病」として恐れられたペストが、横浜、神戸などに侵入して時々小さな流行を作った。東京では、ペストの予防のために、鼠を一匹五銭で買い上げる運動を始める始末であった。

徳富蘆花が『不如帰』を発表したのが明治三十一年。武夫と浪子の悲恋物語は多くの人の涙を誘った。この悲恋の原因は、浪子の肺病にあった。愛し合う若い夫婦の間を、浪子が結核に侵されていることを理由に、武夫の母親が離別させるのである。「人間って、なぜ死ぬのでしょう?」と言って、浪子が嘆く下りは名場面として長く人々の記憶に残った。産業革命と共に市民を蝕むこの病が、日本でも明治以来、第二次大戦直後まで流行し、日本人の死亡原因の第一位を占め続ける。そのはしりがこの頃であった。

今からすれば愚かに見えることが幾つもある。その一つ。当時、国内で「脚気」論争が専門家の間で盛んに戦わされていた。軍隊で、若い軍人が脚気に罹る。工場で女工が脚気になる。西洋医学も漢方も争って、脚気の治療に力を入れた。

一八八四年にコッホがコレラ菌を発見して以来、あらゆる病気の原因を細菌に求めた。脚気も細菌が原因ではないかという論文も出た。森鷗外が委員長になって、その細菌を探す研究も行われた。しかし、或る軍艦に米だけでなく麦も乗せて

外洋させたところ、水兵に脚気患者が出なかった。このことから、脚気は細菌ではないことが証明された。ただし、ビタミンB₁が発見されるのは後のことである。

一方、外国で発見されたり発明されたりしたものは意外に早く導入されている。ウイルヘルム・レントゲンが一九〇一年に第一ノーベル物理学賞を受賞したのは、「新しい種類の光線について」というX線発見の論文に対してであった。

それを最初に発表したのが一八九五年。その翌年には、山川健次郎と水野敏之丞がそれぞれX線写真の撮影に成功している。フランスのリヨンで発明されたシネマトグラフを大阪で上映して、大評判を取ったのは明治三十年。仏国留学をした織物会社の重役が、リヨンで前の年に購入したものである。

今の映画の先駆けのようなものであった。映写時間はわずかに二三分の短いものようだが、それを一〇種類くらい集めて一時間の興行にしたとある。京都に初めて「チンチン電車」が走ったのが明治二十八年。豊田佐吉が動力織機を発明して、生産力を二〇倍にしたのが明治三十一年。進取の気性が様々な分野で発揮されていた時代である。

「春高樓の花の宴……」の『荒城の月』、『汽笛一声、新橋を……』の『鉄道唱歌』などがこの頃作詩・作曲されている。樋口一葉が『たけくらべ』を著したのが明治二十八年。尾崎紅葉の『金色夜叉』、島崎藤村の『若菜集』が三十年。黒岩涙香

がデュマの『巖窟王』を翻案したのが三十四年である。同じ年に、与謝野晶子が『みだれ髪』を世に問うている。「やわ肌熱き血潮に触れもみで 悲しからずや道を説くきみ」という情感のこもった歌が、旧弊な世の中だと思いがちなこの頃に既に世に出ていたのである。

他方、洋画家黒田清輝が「裸婦」を展覧会に出品すると、一と騒ぎとなった。彼がフランス留学で描き上げて師匠に絶賛された絵を日本国内で展覧すると、人々は眉をひそめて前を通り過ぎたという。更に、同じような「裸体」を出品したときには、警察当局から、下半身を布で覆うように命ぜられたそう。この時代は、新しい感覚と古い生活感覚が火花を散らしていたのである。

明治二十八年から明治三十五年までの間に、世紀が変わっている。当時の庶民感覚では、西暦はそれほど親密に感じられなかったかも知れない。ただ、一九〇一年の明治三十四年に、慶応義塾大学で、十九世紀・二十世紀の送迎会を開催している。その頃、二十世紀という言葉が流行になったとも言える。開かれて行く新しい世紀に心からの期待をこめていたと同時に、一体どんな社会に変わって行くのかという強い不安を人々は抱いていたに違いない。世紀末の不安定感はいつも同じである。

維新以来約三〇年。我が国は様々な考え方の中で新しい文

化を咀嚼し、将来への基盤を作るべく近代国家への道を歩み始めていた。ただ、ロシアとの争いの暗雲が直ぐ近くまで押し寄せて来ていた。関東氷上郷友会が始まった明治二十九年は、そんな中で過ぎていった。明治三十七、八年の日露戦争は奇蹟的に日本の勝利に終わった。我々は歴史としてしか知らないが、この大戦の最中は国民挙げての戦いであつたのであろう。当時の郷友会が発行していた「氷上郷友会々報」も、この二年間は発行中止になっている。

しかし、日露戦争の勝利は国の指導者に誤つた過大自信を持たせるきっかけとなり、それから四〇年後の昭和二十年まで、多少の曲折はあつたとしてもほぼ一瀉千里に戦争への道を歩んだ。郷友会も明治から大正へかけては平穩無事に過ごしていたようだが、昭和五年に田健治郎氏が没してから、昭

和十年に至つても会長の席は空席のままだつたという。昭和の何年かに、第三代会長に織田信大氏、第四代会長に安藤広太郎氏が就任しているが、世界大戦中は年に一度の総会も中止されている。

そうした将来の見通しが未だ立たなかつた今から一〇〇年前、丹波の山奥から様々な志を持った若者たちが花のお江戸で勉強刻苦し、同郷者と語り合つたであらう。「そめいよしの」という新種の桜が上野公園に植えられたのが、幕末から維新の頃。西郷隆盛像の除幕式が行われたのは明治三十一年。未だピカピカの像の周りを、勢いよく花吹雪が舞つていたことだろう。丹波の「やまざる」たちも、その中で色々な夢を語つたことだろう。どんな時代でも夢と不安が入り混じつて過ぎて行く。

田家の人々

上山

頭(柏原町)

私が田健治郎先生にお目にかかったのは、多分大正十四年十一月頃、当時大学三年生だったが、万象閣で催された氷上

郷友会に出席したときである。

大正十四年だと先生は七十一歳(数え年)、当時としてはかなりの御高齢といつてよく、瘦躯鶴の如くと形容するのがふさわしいかどうかは別として、眼光は炯々と鋭く、なるほど「明治の元勳」とお呼びするにふさわしい方だと感じた印象だけは、かなりはつきり記憶しているが、その他については、万象閣周辺の情景にしても、ほとんど何も思い出すことができないと言つてよい。

『田健治郎伝』（昭和七年六月刊）（以下『伝』と略称する。）
はいただいており、何回かの転任による引越し、戦時の疎開
もあったが、今も私の書架に健在である。

この一冊に関連し、以下若干語りたいと思う。

内務省時代の先輩高橋雄材氏は、昭和三年十月私が初めて
地方事務官として静岡県に赴任したときの静岡県内務部長で
あり、その後も長く御指導に預った。静岡県内務部長から警
視庁警務部長・香川県知事を勤められ、退官後は読売新聞社
に入社、副社長兼主幹になられた。

高橋さんは大変な勉強家で、特に明治時代以後の警察行政
史を研究されていたが、その著書のなかで、『伝』を大変参
考にされているのを以前読んだことを思い出し、もう一度そ
の本を見たいと、近くの有栖川公園にある東京都中央図書館
を訪れた。

高橋さんには、『明治警察史研究』（第一巻昭和三十五年
いし第四巻昭和四十七年・令文社発行）という大著もあった
が、もう一冊『明治時代の警察部長』（昭和五十一年七月・
良書普及会発行）があり、私が前に読んだのはこれに違いな
いと思ひ借り出した。

『明治時代の警察部長』には大浦兼武以下七名が採りあげ
られているが、二番目が田健治郎で、神奈川県警務部長時代の
活躍振りを、『伝』の記述に従いつつ、金玉均事件、保安条

例の執行、神風樓移転問題などについて述べている。
ここでは金玉均事件を紹介したい。

金玉均の追放問題

横浜が開港場で治外法権の外人居留地があったために、
田は他の県の警務部長とは違った種類の事件で苦勞した。金
玉均の追放などもその一つであった。

明治維新以来、朝鮮はわが国の外交関係の中心問題の一
つであった。六年の征韓論で政府が二つに分れ、西郷以下
の五参議が連袂辞職したのは有名だが、その後も朝鮮問題
は政府の頭痛の種であった。韓廷の内部にも金玉均らを中
心とする親日的な進歩派の独立党と閔泳翊らを首領として
支那を後援者とする事大党とが対立していたが、十七年十
二月親日派の独立党が一挙に事大党政府を駆逐し、金玉均、
朴泳孝らが新政府を立てた。事大党は清国公使袁世凱に救
を求めたので、袁は二千の清国兵を率いて王宮を囲み、親
日派の独立党政府は崩壊し、金玉均らはわが竹添公使と共に
日本船に乗って亡命して来た。

かような事情であったから、わが国には金らの同情者が
多く、後援者のうちには、福沢諭吉、後藤象二郎、朝吹英
二、犬養毅、尾崎行雄らがあり……金は渡来後……再挙を
図っていた。これに対し韓国政府はしばしばわが国に対し
て金の引渡しを要求して来たが、容易に目的を達しないの

で……刺客池運永を送って暗殺しようとした。……

この事実を探知した金の関係者は金の安全のためと称して横浜居留地二十番館のグラランド・ホテルに金を移らせた。……池が刺客たることが明らかになったので、政府は韓国に対してその召喚を要求し、韓国政府は……池に帰国命令の電報を発し、……この帰国命令書は外務省から冲知事(注)当時の神奈川県知事)に送られ、田がその処理に当たった。田はまずみずから池を訪うて帰国命令を伝え、ひとまず日本の法権の及ぶ日本人経営の新松樓に移らせた後、……池の拒むのを聴かずに……仁川に護送させた。

池の送還と共に、政府は金をも退去させることに決し、……山縣内務大臣は冲知事に左の如き命令書を交付した。

朝鮮国人金玉均なる者……の、我邦に滞在するは、日本政府と友誼厚情の関係ある現朝鮮政府に不快の感覺を起さしむるのみならず、又我邦の治安を妨害し、且外交上の平和を障碍するの虞ありと認むるに因り、本大臣は右金玉均に命ずるに、此命令書送達の翌日より起算して十五日以内に我帝国を去り……右十五日を経過するも、金玉均去らざるに於ては之を抑留し、右退去の命令を執行するに必要な力を用ゐ、可成速に国外に追放すべき事を以てす。

金玉均の退去命令の執行も、田がみずから当たった。金

の滞在するホテルがフランス人の経営するものだったので、田は予めフランス領事館に照会した後ホテルに赴き、金に面会して退去命令書を渡した。金もやむをえず退去をすることを約したが、旅費の調達が出来ず、遷延日を過すばかりであった。

そこで田は退去命令書にある「必要な力を用ゐ」るもやむなしと決意し、……内務大臣の指揮を求めた。これに対し内務省は……小笠原島へ護送すべしとの命令があった。田は金に面会し、「刺客池運永を強制退去せしめたるが如き、又今回的小笠原移転の如き、皆隣邦志士の安全を図らんとする日本政府の切なる好意である。斯かる好意ある政府をして、君一身の為に国交を困難に陥らしむるが如きは、義人の須らく反省すべき所である」と情理をつくして説得したので、金も遂にこの命令に従うことを約した。

ところが金の幕僚や金を後援して来たわが国の志士達は猛烈に反対し、金もまた前約を翻して退去を拒絶するに至った。これに対して田は毅然たる態度で執行を命じ、……

「号泣して抵抗したる」金を強制して……秀郷丸に乗せ、小笠原に送った。このとき立会った志士達は田の取扱いが無慈悲だとして憤慨したが、本船に赴いて船室等の準備がよく整い、田の寄贈だとして碁盤が備えられ、田は平服で見送って来て金と心よく対局していたので、初め憤慨した

連中も田の処置に感心したということである。

なお『伝』ではその後に、左記のように附言している。

当時現場に在りたる朝吹英二氏が「田と云ふ人は役人には珍しい行届いた男である」と鎌田栄吉氏に話したとのことである。

田健治郎先生は、その後明治二十三年（数え年三十六歳）

四月通信省に転じ、累進して通信次官、その後はさらに通信大臣・台湾総督・枢密顧問官と「明治の元勳」への途を進まれるわけだが、警部長時代の田健治郎先生は、剛毅であつて、しかも爽やか、旧内務省に育つた私にとつての誇るべき郷里の先輩といえよう。

昭和十一年の暮から十二年正月にかけ、私は開業早々の志賀高原ホテルの客であつた。京都府庁に在勤していたが、京都ホテルが志賀高原にホテルを開くとのことを聞き、以前石川県庁在勤当時のスキー仲間Y君も誘つて、そのホテルへ行くことにした。

夕食食堂が開くまでの間、私たちは玄關の広間で、客の入ってくるのをよく眺めていた。そして多分正月になつてからであらう、田誠氏（田健治郎氏の次男）が夫人・お子さん達を連れて入つて来られた。以前何回もお目にかかつてよく存じ

あげていたので、御挨拶したことを記憶している。当時田誠氏は鉄道省の国際観光局長であつた。

実は国際観光局長が誕生した当時の情勢を調べたいと思い、神田の交通博物館を訪れた。そして「鉄路絢爛」（青木槐三著・昭和二十八年八月・交通協会発行）という大変面白い本にめぐりあつたのである。それには田誠氏について次のように述べられている。

佐原（注）二代目国際観光局長が観光局を去る時に、大倉男爵が築地の料亭で送別会をやってくれた。

客席にいた常連が後任は誰だときくので佐原は、田さんだと答えた。

するとそれをきいていた新橋の若い芸者連が、

「あら、いいわね」

と歓声をあげて、酒をついでいたお銚子を一せいにとめてしまった。

田の局長だった頃、昭和十一年から十五年まで観光熱が一番盛んな頃で、彼の室ではカフェー・デンなどとジャーナリストに命名され、千客万来、それこそ世界各国人が往來した。……各地に観光協会を作つたり、中央では観光連盟をつくりあげてその大会を新潟を始め各地で開催……観光ホテル、観光自動車、観光列車と観光ばかりで……。

田時代の盛況の記録は今も破られていない。

昭和十一年には四万二千五百余人の入国外人があつてその落した金は一億七百六十八万八千円にのぼった。今の金に換算したら莫大なるものであらう。これが観光事業収入のピークであつた。

貿易額からでも、生糸、織物に次いで第三位であつた。

田の観光局長は新井(注)初代国際観光局長)の人気の星をまする風があつた。

貴公子然たる田の上品な容貌と白むく鉄火のような外柔内剛の性格は、観光局のような何処かに殿様崇拜の気風もある場所にはまり役であつた。

誰かが新井が家康で佐原が秀忠の役、田は三代將軍家光といったところだと評していたが、あたっているところはないとは思ふけれども、田の時に至つて観光の仕事が絶頂に達し、それ以後事變の影響で下り坂に向かつたことはたしかである。

田の時代東洋観光會議を昭和十年五月二日から四日間にあつて開催した。東洋全体の国々が集つて、共通的な繁榮策を相談し、親睦を計る目的であつたが、集つたのは印度、錫蘭、馬來連邦、蘭領東印度、仏領印度支那、シヤム、香港、比律賓、中華民國、ソ連、英、米、独、仏、伊、蘭の汽船会社、旅行斡旋業者等四十五団体で、世界の観光業者の眼を日本に集中させた。

後に田が華中鐵道の副總裁に選任されたのはこの時以來の因縁によるものだ。

……観光局製作映画「日本の四季」がベルギーで国際コンクールに入選して名誉章を貰つたり田の活躍はみない大成功をおさめた。……

田の時代にニューヨーク市長ラガーディアから日本旅行にと人形夫妻が派遣されて来たことがあつた。このミスター・エンド・ミセス・ニューヨークの日本來朝は田と一ジャーナリストの合作であつて、日本の費用で観光局がひそかに計画したところだつた。……やがて米國から日米親善使節として紐育市長が人形を贈つて来たわけだ。この人形は口もきけない、目も見えない、歩けない、耳も聞こえない。しかし日本の外客斡旋サービスはどんな不具者でも安心して愉快に旅行の出来るほど發達している。それを世界に見て貰うにはよいチャンスだ。……

この人形ミスター・ニューヨークとミセス・ニューヨークは、日光、大阪、奈良、京都と旅行したが、到るところ新聞記者のインタビューを受け、一流ホテルや寢台車、展望車に泊まり、各地で市長と握手し一週間ばかりはこの人形使節で新聞の社会部記事は埋められ、大人氣であつた。田誠氏が国際観光局長だったのは昭和九年から十三年までのように、同局がもっとも華々しく活躍した時期だったこと

は間違ひなからう。

しかし同時にこの時期は、満洲事変・日本の国際連盟脱退に続き、やがては日支事変へと連なる国際情勢のめまぐるしく変転した時期でもあり、わが国にとつての最大の観光市場であったアメリカの対日感情悪化などを考えると、国際観光行政の前途は決して坦々たるものでなく、国際観光局にとつてはもつとも苦難に満ちた時期だったといえよう。『鉄路絢爛』が伝えるような華やかな面だけの時代ではなかったはずで、田局長としてはいろいろの御苦労があったことと察せられる。

ただし、志賀高原ホテルの玄関でお目にかかった田誠氏は、正月御家族も御一緒のくつろぎのときであり、大変明るく、颯爽たる姿であったという印象を、今も記憶している。

昭和十年頃の銀座と田舎娘

木村 つた江（市島町）

私は小学校の低学年の頃には、学校の先生になることを夢みていました。しかし七人兄弟きょうだいの真ん中に生まれた女の子で

志賀高原ホテルの玄関で田誠氏にお目にかかったとき、その御家族のなかに田英夫氏（田誠氏次男）がいられたかどうかは、確かめていない。もしいられたとすると、私の記憶では小学生ぐらいだったと思っていたが、実際は中学生だったのかも知れない。

田英夫氏について『山ざる』の読者に改めて紹介するのは全く無用のことと思うが、実は、前回（平成元年七月）の参議院議員選挙の選挙公報によつてであろうか、田英夫氏はスキーの大変な名手であられることを知った。その記事を読みながら、スキーに夢中だった志賀高原スキー行ころの私自身の若き日を回想していたのである。

す。家の財政が許されるはずありません。「それならば、せめて都会に出たい、山の見えない広い空のある処に行きたい。四方を山で囲まれた中にいると息がつまりそうだ」と思い始めたのは小学校六年生の頃でした。

父は私に農業を手伝わせ、やがては近くに嫁がせるつもりだったようです。その頃四つ年上の兄が村の信用組合に務めていました。兄は警察官の試験を受けるため夜学に通っていました。夜学といっても旧鴨北村の小学校の教頭のＴ先生の

下宿先に、数人の青年が通つて勉強していたのです。私の高等科二年の時にその先生に算数を習いました。とても厳しい先生で男子生徒でさえ恐れていたようですが、私は密かに慕っていました。

秋の取り入れが終わつた或る日、兄はT先生を我が家に招きました。母は手作りの御馳走を作つてもてなしました。その時T先生が言われました。

「僕の妹が東京の本郷で酒屋をやっているんです。身元の確かな娘を世話してほしいと言つてきまして、条件は店を手伝つてくれたら学校へも通わせるし、習い事も充分させるといふんです。妹夫婦には子供がないので可愛がつてくれると思います。つた江、お前いく気あるかい」

私は渡りに舟とばかりに飛びつきました。父は猛反対でした。祖母は「東京のような遠いとこへ娘一人いくのんかいなおとろしいな。もう会えへんかもしれん」と言つて涙を流しました。母は私の気持ちをよく理解してくれ、父を説得して東京行に賛成してくれました。

昭和六年十一月下旬、私は上京の前日、水上町石生のT先生の生家に一泊させて頂き、翌日先生の父上といっしょに上京の途につきました。午前八時石生発の汽車は大阪着十一時半、当時一番早い特急「つばめ号」で東京まで八時間かかり、本郷のM氏宅についたのは午後九時を回っていました。私は

乗り物酔いがひどく、十三時間も汽車にゆられながら、水一滴も飲まず、まるで半病人のようでした。だが、東京に着くと嘘のように元気になりました。

そして瞬く間に一年経ちました。その間田舎者呼ばわりされたり、叱られたり戸惑うことばかりでした。中でも、敗血症という恐ろしい病氣にかかり、手首を切断する寸前で、奇跡的に助かったことは生涯忘れられません。それからの私は持ち前の負けず嫌いと、商売が好きだったせいもあり、水を得た魚のように、何でも引受けて一生懸命働くのでM氏夫妻に重宝がられるようになりました。

昭和十年、M氏が銀座の並木通りに酒とおでんの店を開店しました。私はその店の責任者（店長）として一切を任されることになったのです。

店は灘の銘酒揃いの四斗樽を積みあげて、その樽から直接生一本を客の目の前で出すことと、値段も格安のうえ関西風のうす味のおでんも銀座マンに受け、店は連日満員の盛況でした。当時の銀座は柳並木が四丁目の市電の交差点を中心に、一丁目から新橋までと、有楽町から築地まで整然と続いていました。そして日暮れ時になると柳の下には、いろいろの露店が処せましと立並び客を呼ぶ声にも風情が感じられました。

昭和十一年二月には、日本中に五十四年振りの大雪が降り、東京では地下鉄を除いてはすべての交通が途絶えたのです。

そして二十六日には二・二六事件が起きました。当日は店は休業です。白一色の銀座通りは人影もなく無気味に静まり返っていました。しかし数寄屋橋の上は銃剣で武装した兵隊で埋めつくされていました。事件の内容や政治の詳しいことは若い私にはよく分かりませんが、軍人が政治を動かしている気配があり、これからも何か恐ろしい事が起きそうな予感がしたものです。

二十歳になった私は、店に来る客のO青年に思いを寄せるようになりました。この青年は彼の叔父の経営する食品会社の役員をしていて、店にくると友人と文学論を酒の肴にして楽しんでいるハンサムな青年でした。そのうち彼も私に好意を持つようになり、自然に恋が芽生えたのです。

ある日曜の午後、私は「お風呂に入ってきます」と店の同僚に言い、一人でこっそり出かけました。当時西銀座五丁目の裏通りに金春湯コンバルユという風呂屋がありました。その銭湯の主人とは顔なじみでしたから、湯の道具を脱衣場に預けて、彼とデートを楽しんでいたのです。銀座四丁目の角から三軒目にオリンピックという大きな洋菓子店があり、その二階が喫茶店になっていました。私は胸をときめかせながらここで彼と待ち合わせて、香り高いコーヒーを飲み、美味しいケーキを御馳走になったのです。こんなに幸せでいいのかしらと思つた程です。静かに流れる音楽と共に彼の文学論を聞くのが私

には唯一の楽しみでした。

そんな楽しいデートも長くは続きませんでした。店の同僚の密告で本郷のM主人の耳に入ってしまったからです。

「田舎で牛ぐそを掴んどったような百姓娘が銀座でデートなんて、とんでもない、思ひ上がりもいとこだよ。もう銀座の店にはおいとけない、すぐに連れもどさきなや」

反対されれば尚いっそう燃え上がった恋の炎はついに結婚話にまで進展したのですが、「身分が違う、お前はお人好しだから騙されているんだ」と、又してもM主人に猛反対され、心ならずも諦めるしかなかったのです。

私が銀座の店から本郷に呼び戻された翌年の、昭和十二年に日中戦争が始まり、私の長姉の夫が中支で戦死しました。

実兄も、友人も、M夫妻の親戚や知人も出征しました。この頃、私は同僚と慰問袋を作るのが日課になっていました。袋の中には、手拭、缶詰、菓子類と、千人針を入れました。これを作るために人通りの多い駅前などに数時間立ったのです。これは銃弾よけの腹巻として重視されていたのです。

昭和十五年には隣組が結成され、出征兵士の見送りや防空演習（バケツリレーなど）が日常茶飯事となりました。この頃になると砂糖やマッチも切符制になりました。そして町のあちこちに大きな看板が建てられました。「ぜいたくは敵だ」「ほしがりません勝つまでは」この年、総理大臣に、陸軍中

将の東条英機が就任し、陸軍大臣も兼任しました。

昭和十六年の春を迎えて私は二十五歳になっていました。当時の二十五歳は結婚適齢期をとくに過ぎていたのです。丹波の両親からは結婚相手の写真を次々送ってきて是非帰ってこいと矢の催促です。でも私は彼のことを忘れ兼ねていた上に、東京を離れることができなくて、親からの結婚話に耳をかそうとはしませんでした。そんな私に「ごう」をにやしたM氏は本気で相手を見つけてきたのです。私は観念してM氏のすすめに従い、十六年四月、平凡な見合い結婚をしました。そして東中野の駅に近い借家で新婚生活を始めました。

銀座の恋

(一) 丹波生まれのお転婆むすめ

夢をいっぱい胸に抱き

山が育ちの陽やけの顔で

昭和のはじめ東京へ

(二) 田舎娘も都の水で

三年磨けば色白に

モガ・モボたちも何のその

銀座通りをかつ歩する

(三) 柳なびける並木の蔭に

ひそかに生まれし恋ごころ
ジャズとコーヒー文学談議
たび重なれば燃え上がる

(四)

結ばるる日を夢みれど
時節ときの流れといくさ世に
もてあそばれて夢くだけ
恋の炎は消えかかる

(五)

月日は流れ三十余年
彼と再び巡りあい
昔語りに刻忘る
銀座の恋のものがたり



瀧治郎さんの酒と趣味

足立 正(永上町)



「大西瀧治郎中将が海軍軍令部次長の官舎で自刃したのは、昭和二十年八月十六日の午前四時十五分である。生命力のつよい男で、作法どおり腹を十文字にか

き切り、返す刀で頸と胸とを刺しながら、なお数時間は生きていた。」草柳大蔵著『特攻の思想』第一章の冒頭の部分である。

瀧治郎さんは、帝国海軍航空畑の将官として、実戦はもとより、教育指導、指揮、軍政と八面六臂の活躍をされた郷土出身の勇将であり、神風特攻の生みの親とされている。

『山ざる』の編集部から、「大西瀧治郎のことを書いてほしい」との連絡を頂いて、「大西中将伝刊行会」が昭和三十二年に出した伝記を求めて、国会図書館に出向いたが、そこには無かった。豊島区、新宿区と図書館をさがしたがやはり無

い。ふと気付いたことがあって、足立誠一さんに電話したところ、持っているとのこと。早速拝借を願い出て、手にした。生涯年譜等を含め二八八頁。

知人相談って、故人の伝記を編纂すると決するや、伝え聞いてわれもわれもと発起人になってやろうという人が数えきれない程で、その範囲の広いことに世話人一同今更のように感歎した。余り員数の多いのも困るので、三百二十名で打ち切ったが、その顔振れは各界各層に亘り、実に多彩。故人が軍人でありながら、その交友範囲が如何に広く深かったかを知るに足る。として、発起人名簿がある。

今となつては故人となられた人が多い中で足立誠一さんは、わずかにご生存の一人。

大西は丹波の産であるだけに、大江山酒呑童子の申し子のような酒豪であった。酒のために海軍学校に入れなかった話是有名で、講談にまでされているほどだから、大西を語るに酒を省くわけにはいくまい、と書いてある。公務で、口答試験の前日横須賀に行き、その晩料亭で友人達と酒食を共にした際、座に侍った芸者の取り持ちが気に喰わぬといって、ボカリとやった。

これが翌日地元の新聞にデカデカと載り、学生詮衡規則にふれたとかで、入学候補取消し的一幕となった。大正十三年秋、大尉のとき。その年十二月に小佐になっているところを

みると、昇進には支障がなかったらしい。

「丹波篠山山家の猿が、花のお江戸で芝居する」。一つ覚えのデカンショ節は、兵学校の倶楽部でよく歌い興じた。その後少尉に任官し、中尉に昇進するに従って酒の手も上り歌の文句もあれこれ覚えたと、ドラ声でその上いささか音痴ときており、徒らに蜚声を張り上げるだけで、歌の方はあまり出世しないので終わった。

しかし、酒席の芸の方はどうしてなかなか細かいところがあった。いつ誰に仕込まれたものか、興至れば、よく「山門五三の桐」などやったものである。どてらの上に黒紋付を羽織り、五分刈り頭を紫の紐でゆわえて、蛇の目の傘を斜に開き、八字を踏んで「春のながめは価千両とはチイせえ……」とかセリフよろしくあって、あのギョロリとした独得の目玉をくるくると動かし、大見得をきるところなど、仲々のものだった。

又、どうかすると彼の酒席は議論にそれることがあった。訥弁というほどでもなかったが弁舌は決してさわやかでなく、「それはやネー」「おれはやネー」と悠長なお国言葉ではつくもどかしくなる。しかも一流の負けん気だからつい面倒くさくなって腕力が飛び出す。その頃の若い軍人仲間では、まあ兄弟ゲンカのようなもので、その場限りのさっぱりしたもの。後にしこりの残ることはなかった。彼の暴力は誰からもあ

まり憎まれなかったようである。大正七年から三ヶ年近くの滞英期間中にも酒の上での彼一流の武勇伝が彼の地の人との間にあったが、いつも非は相手方にあり、胸のすくような武者振りに周囲の快哉を受けてケリになったというのである。

碁、将棋、マージャン、トランプなど凡そ勝負事なら何でも好きだった。なかでも将棋は子供のときから父亀吉氏直伝で、海軍士官並みをいささか抜きんでいた。亀吉氏は、瀧治郎さんと将棋を指すのが何より楽しみで、佐官時代になっても、息子のたまの帰省を待った。だんだん息子の方が強くなって来るのを「瀧が大分つよくなりましてな、この年寄りがまかされるようになりましたじや」と言った。

海軍の話などそっちのけで親子差し向かいで将棋を楽しんでいるなごやかな風景をよく村人は見かけたものである。彼は自分の方がはるかに強くなってからも、この年老いた父をいたわって、わざと負けたが、出発前の最後の一番だけは勝つことにしていた。そうすると老人はわが子の出発を村端れまで見送りながら、必ずこういうのであった。

「瀧や、また早よう帰ってこいや、こんどはわしが仇をうってやるサカイ」。

大西瀧治郎、明治二十四年旧芦田村西芦田生まれ。三十八年柏原中学入学、四十二年海軍兵学校入学、四十五年小尉任官、大正四年中尉の時、水上機母艦「若宮」乗組、以来海軍

航空畑にあつて重要なポストを歴任、海軍航空界において、山本五十六元師に次ぐ大立物となる。

戦火の中の青春

近藤

勇（市島町）

今、想い起こせば昭和二十年初頭、すでに敗戦濃厚、上層部は既に終戦を考慮していたであらうと推察されますが、二十歳代の私、大陸の戦線をかけめぐった経験と若気の至り、ましてや軍国教育をたっぷりたたき込まれておりましたので玉碎の心意気に燃えていたように思います。

いつ果てるとも知れぬ苦難の日々でありましたが、一生懸命お国のための合言葉でよくぞ頑張ってきたものと回顧しております。

私は昭和十二年九月、召集令状により広島電信第二連隊に入営、三ヶ月の猛訓練を受け十二月動員下令で北支に出征しました。

厳しい軍律の軍隊生活での一番の楽しみは内地からの慰問袋でした。中でも小学校で一級下の丁子さんからのラブレター入り慰問袋は格別でした。小学校高学年の頃から二人の間に

昭和二十年五月海軍軍令部次長に親補され終戦を迎える。行年五十五歳。

ほのかな恋が芽生えていたのです。

私が戦地に行つてからは、その思いが慰問袋や便りの数を重ねる毎に深まっていき、無事復員の晩には結婚を約束するまでになつておりました。ところが二年余り経過し、これまで頻繁に来ていた便りがぶつくり途絶えてしまったのです。私は不吉な予感に襲われました。

数ヶ月後、丁子さんの姉さんからの便りで、丁子さんが肺結核で亡くなったことを知りました。「妹は貴方の便りをしつかり胸に抱いて、安らかなきれいな死顔でした」と書かれていました。それからの自分（当時北京電信第五連隊本部勤務）は憔悴し切つた毎日を過しておりましたところへ、追打ちをかけるように母の訃報が届いたので（母は約一年前に死去）。異郷の戦地で母と恋人と、かけがえのない大切な二人を失つて呆然自失の態でした。何とか気分転換しようとして上官に申告して最前線へ出向を命じられました。

黄河を渡り中支に転戦。軍通信は最後部に位置しておりましたのであまり危険はありませんが、流れ弾や迫撃弾がとんで来ることもありました。十六年中頃復員のうわさがあり、いよいよ内地へ帰還出来るだろうと心ひそかに喜んでおりました。

たところ、大東亜戦争が勃発して再び北京連隊本部に配置替えになり功績班に所属しました。ようやく十七年八月末念願の帰還命令が出て広島へ帰着。八月二十七日召集解除となり五ヶ年振りに丹波の土を踏みました。

九月早々上京、私の入隊前の職場の先輩の招きにより芝浜松町の電気照明器具工場に就職。(経営者福知山出身)

新堀町(現芝三丁目)のアパートに居住し、在郷軍人竹芝分団に所属して昼間は会社の経理、夜は芝公園で予備兵役の人々を召集して軍事訓練に明け暮れておりました。この間十八年七月郷里で結婚式を挙げた。

十九年暮れ、日増しに東京空襲が激しくなり、在宅の復員兵は再召集必至の情報が在郷軍人会の本部からあり、それならば近くに曉部隊が駐屯しておりましたので在郷軍人会を通じて応召志願しました。

二十年一月、特設水上勤務百六中隊。教育防衛召集令状が到来、芝神明小学校に一ヶ小隊が分駐しており一月二十日この小隊の一員となりました。ここの勤務は下士官二名で十五日間交代勤務、十五日軍務につき十五日は待機ですから会社の仕事もでき、それに下士官は営外居住が許されておりましたので、朝の点呼までに出勤し夜の点呼終了で帰宅の毎日でした。

朝八時三十分、二十余名の召集兵(ロートルと言っており

ました老軍人ばかり)を引率して竹芝棧橋に赴き、軍需物資を海上輸送する任務につきました。当時硫黄島の激戦地へ食糧輸送をしていた部隊で私達ロートル兵は専ら倉庫から木造の伝馬船に、食糧を積み込む荷役作業が主体であった。

既に制空権は敵にあって、夜陰に乘じ決死隊(陸軍工兵隊)が伝馬船に乗船して輸送の任に当たっておりまして。十艘出港しても、その内一、二船が現地につけば成功と言われていたようです。大量の食糧は木箱に詰め両端に空樽を針金でしばって、船が撃沈されても食糧が海上に浮かぶように工夫をこらしていたのです。島の近くまでなんとか辿りついても接岸出来ない場合は海中に投棄し、島の兵隊が泳いでこれを引き取る手はなくなっていたようです。

「今どきこんなことをしても無駄じゃないか。万が一硫黄島に届いたとしても兵隊の口に入るとは限らない。大きな声では言えないけど敗戦はもう時間の問題のような気がする」

当方は荷役任務なので生命の危険はなく、午後五時積載作業終了、兵を伴い兵舎に帰営する日々でした。その帰営の際倉庫係管理の下士官がソツと小さな缶詰(主としてサバかいワシ)一個をポケットに入れてくれました。

夜の点呼終了後、炊事係上等兵に朝依頼しておいた残飯(麦飯)を木の弁当箱に詰めてもらって(時には弁当箱二つ、三つ)缶詰と共に持ち帰り、家族や近所の老人達と分け合っ

て細々と生活を営んでいたわけです。

当時、食糧難はもう限界に来ていたようです。配給米はトウモロコシや豆粕（牛の飼料）入りの原米が一人一日一合で、庶民は辛うじて飢えを凌いでいたのです。

たまたま外食券なしで買える雑炊（魚の骨入り）を売る食堂が金杉橋のたもとにありました。私も鍋を持って長い行列に並んだものです。

三月十日、本所深川一帯が焼夷弾により大火災、多くの人命が失われ、又五月二十六日夜は品川、芝、新橋、銀座が戦災を受けて全滅しました。芝増上寺の三重塔が炎上するのを目のあたりに見て、神も佛もない地獄の苦難を大衆は味わいました。

この二十六日の大災で会社も住居も焼失し、金杉川の畔の防空壕で穴居生活を始めましたが、何ぶん食糧が乏しく着の

国民学校一年生の夏

徳田 八郎衛（柏原町）

博報堂の調査によると、太平洋戦争で日本が連合軍側に立つて戦ったと信じている人が四十五歳以下の人の何と二割を占

み着のまま（軍服だけはありません）途方に暮れ、丹波への疎開（家族は四月二十九日に疎開済み）を決意し部隊長に召集解除を申告、七月召集解除になり直ちに帰省しました。

当時、兵庫県有馬郡藍村相野の山中に建設中の大阪陸軍造兵廠につてを求めて就職。

陸軍雇員、第一製造所第八工場庶務班勤務、八月一日付辞令をもらいましたが、八月十五日終戦、残務整理のため十月五日まで勤務しました。当時としては大金の退職金が百六十円でした。

青春時代常に非常時体制下にあり、軍関係ばかりに身を寄せていたように思います。長い戦線での苦難話、戦後の混乱、再上京、波乱の人生でしたが、歳月の流れと共に又一入の感懐です。終戦直後のあれこれは又の機会に書き留めたいと思っています。

めるそうな。

「世人を驚かすため、わざと呆けたようなヤツばかりを対象に調査したのでは？」という人もいるが、たとえ呆けているにせよ、こんな意識の世代が登場する時代になったのだから、私のような「最後の国民学校一年生」世代の記憶も今や歴史的に貴重な記録になったといえよう。我々が入学した時も丁度五十年前に起った日清戦争当時のことを記憶している

人は非常に貴重な語り部だったと思われる。ここに記すのは新しい学校生活にも慣れてきた五月頃に私の周辺で起こった三つの出来事である。

一、ドイツの降伏

五月初旬の日曜日、わが旧新井村母坪部落では何時ものように男子児童は神社の、女子児童は公会堂の清掃を行っていた。すでに大都市は焼き尽くされ、「鬼畜米機」の戦略爆撃の対象は地方都市に向けられていた時期だが、田舎なるが故の特権で平和な朝だった。防空頭巾を常時携行することもなかった。神社の清掃が終わると次は山頂の妙見堂の清掃だ。我々一年生は、学校の教室掃除さえ一学期中は免除され六年生の厄介になっていたので、どうせ集団にくつついて遊んでいたに違いないが、学齢に達した今、一応社会の役に立っているという誇りはあったように思う。

何故か姿が見えなかった四年生の徳田求さん（通称モーチャン）が山頂へ駆け上がったきて伝えたのが次の一句だった。「オイ、ドイツが降伏したじよ」。丁度、朝の列車で大阪から運ばれてきた新聞が村落へ配達される時間であり、それを読んで、または大人が騒いでいるのを見て伝えたのであろう。記録によると、ヒトラー、ついでゲッベルスが自決したあとドイツの最高責任者となったデーニッツ提督が英軍総司令官

モントゴメリー將軍の司令部に軍使を送りドイツの降伏を通告したのが五月四日だから、この日曜日は五月六日だったことになる。

不思議なことに、夏に日本が降伏して親が涙を流したり我が家が大勢の人が集まって心配した時よりも大きなショックを、まだ一年坊主だった私が受けたのだ。世界を相手に戦っている日本の唯一つの盟邦と聞かされてきた国が消滅し、祖国が独りぼっちになったという恐怖感に襲われたのは事実だが、では何故日本の降伏の際に「自国の消滅」として、もっと怯えなかったのだろうか？

今となって考えれば、これは地図の上で国家の消滅を見たからではないかと思う。ドイツが東西から攻め込まれてベチャンコになって行くのは子供の目にも明らかだった。日本の場合は、八月になっても日の丸が立っている地域が地図の上ではまだ沢山残っていた。ソ連が参戦したと大人が青褪めた時も、日ソの間には幅一千キロの大きな日本海があった。一年生の目には祖国は焼け野原にはなってもベチャンコにはならなかったのだ。

二、校長先生の応召

五月に入ってからだったと思う。広瀬巖校長が出征して行かれた。近所の若いお兄さんの入営と違って、若々しいとは

いえ校長先生が応召されるというのは一年坊主の心にも緊迫感を与え、入学式で校長が述べられたように日本がただならぬ状況に置かれていることをヒシヒシと感じさせた。日の丸の小旗で見送る児童の列の中を挙手の礼で進まれる校長の厳肅な姿と表情も、緊迫と悲壮そのものだった。

不思議なのは児童がお見送りするのは校門付近が自然なのに、はるばる挙田部落の下まで「遠征」して柏原駅へ向かわれる校長を見送ったことだ。校門の付近や大新屋部落のあたりには誰が陣取ったのだろう。かなり暑い陽射しの日だった。

幸いにも校長は朝鮮で終戦を迎え、秋には復員、復職された。旧小川村井原の方だと知ったのは、その頃である。その冬、わずかに降雪を見たある朝、軍事教練用の木銃を押収するため「進駐軍」がジープに乗って来校する。あれは普段何の部屋だったろうか、第一校舎にある職員室から小さい応接室や二階の講堂への昇降口を経た西寄りに位置する大部屋で「進駐軍」に堂々と応対される校長の姿は、第二校舎のやはり西寄りに位置する一年生の教室付近からは実に良く見えた。恐らく通訳もいたはずだが、窓ガラスもあってやりとりは聞こえないから、我々には校長が英語で直接渡り合っておられるように思え、益々尊敬した。だが廊下の窓ガラスに群がって騒いでいる我らの姿は、米軍人には猿と思えたに違いない。翌年四月、広瀬校長自らが我々新一年生を受け持つて下さっ

た。まだ外地からの復員は進んでおらず、青年教師が不足だったためだろう。児童に歯ブラシとコップを家庭から持参させて校庭で歯磨講習を実施し「横磨きはダメ、縦磨きでないとカスは取れない」と教えられた。「乞食王子」などの名作を題材として表情豊かに「お話し」もして下さった。最近も「読み聞かせ運動」というのがあるし、我々がもう中学生になっっているのに志賀直哉の作などを朗読して聞かせるのが大好きな教師もおられたが、何故生徒に自ら読ませないのか不思議で仕方がなかった。その点、この「お話し」は、棒読み朗読ではなく広瀬校長の部分的な修飾も加わった楽しいもので、早く原作を読みたいという衝動にも駆られた。だがこの年には占領軍の指令による公職追放が始まり、かつて氷上郡の在郷軍人会会長を勤められた広瀬校長もその対象となつて解職された。まだ四十過ぎの働き盛りだったようだ。

時流に便乗した訳ではないのに指導的な地位にあったが故に公職から追われた有能な犠牲者は広瀬校長だけではなかったが、父兄や視学官だけでなく児童の目にも立派な教育者だっただけに残念でならない。時代が時代だから教師には絶えず殴られたりビンタを食ったりしたが、広瀬校長に叩かれたという話しは聞いたことがない。教育界には復帰されないうまま昭和六十年に他界された。心から御冥福をお祈りする次第である。

三、工場の疎開

今の体育館とは似ても似つかぬ代物ではあったが、我々が入学した頃にはまだ雨天体操場があり、浜田先生という若い女教師の薙刀練習をよく見ることもできた。ところが五月になると床が剥がされて土間がむきだしになる。そこへスッポリ入り込んだのは都会から疎開してきた工場であった。

ある日登校すると、早朝に搬入された工作機械が校庭にゴロゴロ置いてある。だが一年坊主に最も面白そうな機材は、重い機械を吊り上げるウィンチであった。悪戯では誰にも引けを取らない腕白者二名が早速ガラガラと動かしてから教室へ入ったが、いつも「悪事」は千里を走る。何者かがご注進に及んだらしく、担任教師は不運な二人の首筋を掴み皆の前へ引き摺りだして叱り付け、恐ろしい宣告を下す。「そんな悪さをする子は、あの鎖から吊り下げてやる！」

子供の世界は残酷なもので、他人の不幸は絶好の楽しみである。入学以来、君子と見做していた友人までもが「(彼らが吊り下げられたら)見ちゃろかい、見ちゃろかい」とはしゃぐのに驚いたが、いつも大人に反発する「素直でない」私は、同情が先行して笑えなかった。触ってもいけない大切な鎖に吊り下げるといふ先生は明らかに矛盾しているし、「搬入器材に手を触れるな」という警告は、私の記憶では出ていなかった。それに罪と罰が比例関係にあるとはいえ、これは吊り下

げられるほどの大罪だろうか？

疎開機材に触れて児童が怪我しないか、また、予備部品が殆どない状況なのに児童が器材を壊すことがないかと工場側も学校側もピリピリしていたことを知ったのは、私が成人してからであった。

四、さすがは上級生

高等科二年生となると一年坊主の目には完全に大人であった。山仕事、農作業と何でもこなす。一番感心したのはイモ畑と化した運動場の通路に学年毎に整列して行われる朝礼の際の人員掌握である。各級長(すなわち学年長)から大声で伝えられる「現員〇〇名、欠席〇名」という報告を高等科二年生の級長が暗算で合計し、校長が朝礼台に登壇されるや軍隊式にピシッと敬礼して「総員〇〇〇名、現員〇〇〇名、欠席〇名」と報告する。この暗算にも要領があるのを知ったのはかなり後のことであり、当時は神秘的な能力に思えた。五年生以上が早朝から奥山へ作業に出た時は、何と代理の四年生級長がそれを見事に代行した。下級生の目にはカッコよかった。

はたちで終戦、今や古稀

永井 勇（市島町）

左に添えた少女の写真、我々の少年少女時代を象徴すべき
実になつかしくも好ましいものである。

大正末期に生まれた我々は種々な変動期に遭遇し数々の経
験を経て生きてきた。正に世界大恐慌のまっ只中であり、特
に農漁村の疲弊は甚だしく「おしん」そのものであった。ど



の家も子沢山にて一家六人は当たり前、十人兄弟など珍らしくもなかった。学校から帰れば弟妹をおんぶして子守をすることは義務であり、当然のことであった。下駄ばき子守だすき他、私のほのかな初恋の少女をも思わせる、又その時代を偲ばせる実に見事な出来である。

私は、市島町旧美和村出身にて、関東郷友会にても御活躍の田中篤郎氏、又前柏原高校校長の永井壮一郎氏も同郷である。昭和七年小学校入学（前年満州事変勃発）、同級生の中に熱心な幹事役が居てくれ度々同級会を行っているが、年に二、三回は冠婚等親戚付き合いにて帰省はしているものの、ずばらな自分はなかなか出席し得なかった。

前述の如く子沢山の時代である。三輪小学校（どういう訳か神社と学校のみが村名「美和」と異っている）は、当時高等小学校を合せ在籍児童数約四百名（現在は百五十名程度とか）、そのうち我が学年が最も多くその数六十八名、前にも後にもこの組が最多数であった由。余りにも多いため一教室に入りきれず、木造校舎の突き当たりの廊下を取り除き教室に改造。一年生から六年生迄同教室にて勉強したものである。

去る三月、同級会の招きを受け、特に今年は古稀を迎える年でもあり是非参加をと思い帰丹した。一部の同級生にはたまに会ったことがあるが、大部分の友は終戦直後の同級会以来会っていない。誰がだれやらさっぱりわからぬ、正に浦島

太郎同然である。中に片思い初恋の人も居り、年甲斐もなく照れくさいやら心ときめきもあった。互に健康を喜び合い、専ら若さをアピールするため、私の得意とする目的話題を出し「永井さんはもっと立派な人になっとってやと思とったがしょーもない人になっとってや」と特に女性に思われたかも知れぬが、この年となると、えてして暗い話題となりがちに

柏原藩陣屋跡



小田藩邸



崇広館木額

てまっぴらである。

現存の友五十一名中出席二十八名、仲々元気にて笑いの絶えぬ頗る楽しい会であり、来年は京都を約して開散した。

ちなみに昭和七年組は入学六十八名、戦死者一名、他物故者十六名にて、何と五十一名が(七五%)健在である。我々が戦争参加最後の年であり、あと半年も(本土決戦)戦いあらば我々大半はこの世に居ないであろう。吾が学友真に幸運であり、たのしくも元気で頑張らねばならぬ。

この際一代記の稿を練り書いてみたが、まとめ下手のため数十枚となった。没にされても困るので、丹波での思い出を主体とする。

昭和十二年(日中戦争開始)旧制柏原中学に入学、四年終了後兵庫師範学校に入学(太平洋戦争始まる)、戦局最悪のため十九年九月繰り上げ卒業。父は先生にさえておけばと苦労の上学校を出してくれたが、次男坊である私は、敗戦等夢にも考えぬ当時のこととて、満州にあこがれ大陸科に在席していたので卒業と同時に単身奉天に奉職したが、既に陸軍特別甲種幹部生として入校が決っていたため僅か三ヶ月で帰国した。

奉天では四年生を受け持ったが、帰国の際児童が一斉に大声で泣きだした。あたかも敗戦を予感するが如く。今もこの声(耳をつき当時の児童が果して何人生きてゐるのやら……)。

青春時代の最もショックな出来事であった。

帰国後の十九年十二月、東京目黒の軽重兵学校へ入校した。この頃のことは思い出しくもないので割愛するが、翌一月より早速に大空襲である。三月迄に東京の大半が焼けてしまった。四月本土決戦に備え福島山奥に疎開させた。何のことはない特攻隊上陸舟艇肉攻訓練のためである。

終戦ゝ助かったゝ残念ゝ複雑。その殆どが学徒である。一目散に帰って行った。原爆犠牲者には誠に申しわけないが、この大犠牲があったればこそ、と今も確信している。

さて復員後、柏原崇広小学校に十月より勤務した。今の小田藩邸（現在は実に立派に復元されている）が職員室代りに使われていたが、終戦直後とはいえ大変な荒れようである。

雑然と物置代りに使われ、先生は専ら校庭での畠作り。止むを得ぬ時代であった。復員帰りの若い情熱ある先生ということで高等二年生を持たされた。

生徒は毎日鎌、鋸等を持ち炭焼が日課であり、御多聞にもれず悪童化しており、中には藩邸の屋根に上り暴れ回っている者あり、先生の言う事など聞こうはずがない。敗けたとはいえ私も一応終戦見習士官である。軍隊式が抜け切れず、よく一列に並ばせビンタをくらわしたものであり、若さの至りとは言え、今に思えば実に汗顔の至りであるが、年が七歳しかはなれていなかったせいか、兄貴的存在となり餓鬼大将が

自分を引き連れているような有様にて慕われるようになり勉強もするようになった。今思えば私の青春絶頂期であったかも知れぬ。諸君の卒業後は結構立派に生き、校長になった者役所、農協等の上級幹部、尚現在町会議員として活躍中の氏あり、多士である。戦時中のこととて出来なかつた伊勢参り、私の還暦祝をかね静岡にて同級会を実行等々、今も深い交流をなし幸を感じている。

柏原のこの頃である、実に目につく可愛らしい姉妹がいた（確か妹の方で小三頃と思う）。中学時代の英語教師、粕谷先生のお嬢さんである。高校時代は男子生の憧れの的であつたとか。この美しい少女が、現在、日本舞踊家として御活躍中の西崎祥さんで中々御苦勞の上の今日であつたとか（『山ざら』12号参照）。御本人は忘れられたかも知れぬが後日談あり、紙面が足りないので割愛する。

昭和二十二年、六三制学制改革、井上校長と共に黒井中学校へ赴任した。これが今日の運命を決定付ける発端となる。

某校長のお世話にて婿養子の縁談が来た。先生ではとても自活が出来ぬ。父は私の前途を思い懸命に薦めた。意を決し行くこととし結納も交し結婚直前となった。しかし、もともと自立を考えていた私は、「小糠三合あれば何とやら」養子はいやだ、悩みに悩んだ末に止めることとしたが、不義理者の私を父は相手にしてくれない。仕方なく自分で返しに行つ

た。実に相手の娘さんを傷つけることとなり、若さのせいとはいえ、無茶なことをしたものである。校長はじめ大勢に迷惑をかけ、相手にもすまぬ念、今以て帰丹の度に思い出される。

常々何とか都会か外国へでも出たいと夢見ていた私は、教員を思い切つて止めた。さて悩み考えたあげく、黒井出身の実業界の出世頭、石橋治郎八氏（四代目関東郷友会長）の門をたたいた。しかし今迄丹波人が何人か入社したが、一人として残らなかった由、「丹波の人間は根性がないから使いのにならん」見るからに恐ろしい社長、折角、横浜の御自宅迄訪ねたが門前払いである。落胆。

その当時、石橋氏は静岡にも遊休の土地と工場を持つておられた。これを生かすべく考えられたのであろう、戦後復元撚糸（生糸をよる仕事）の計画あり、静岡で仕事をしてみないかとのお呼びを戴き、何をするやも解らぬままに早速現地に赴いた。焼け残りの、壁は落ち雨もりはする物凄い工場である。西も東も解らぬ土地にて、技術等持ち合せるすべもない先生の出来ぞこない、これからがやり直し人生苦闘の始まりである。来静二年目にして不幸者の私を案じながら父は世を去った。無叛をした罰である。この時ほど悲しく自分がはじめに思えたことはない。十年程は芽が出なかった。しかし地域の先輩諸氏や、本社からの先輩の応援等を得て徐々に成

績も上り、あの恐い石橋社長も、静岡を見習えと言つて下さる迄となった。後略。

面白い事も多々あったが、我が青春は努力と苦闘の時代であり、波乱多きも、今や幸運であつたと感謝している。静岡在住四十七年、静岡は素晴らしい何とも住み良い処であり気に入っている。骨を埋るつもりである。坂本重雄氏（静大教授・法学部長、柏高三期生）も在住であるが、同感であろうと思う。

今は専ら社会福祉に重点を置き、民生児童委員、町内会長、保育園理事他をなし地域への報恩をしたいと考えている。何となれば地域先輩諸氏の大変な御愛顧を得た。今はこれらの人々、石橋社長をはじめ（現在はお孫さん昭彦氏の代となり、隆々としている）活躍した役員諸氏も殆ど先立たれた。今や私も古稀である。

愚息（歯科医）孫男子二人、妻も健康であり幸福感を抱き、これからが生き甲斐と思いつつ、記念ある年であるため、愚稿を提した次第です。伝統ある郷友会百年、益々の発展と会員諸氏の御健康を祈るや切であります。

私の「戦後の丹波」

谷 達 雄（柏原町）

戦後五十年——大きな節目として、今年、日本中でこの言葉が氾濫している。大きな苦難を経た人それぞれがなにがしかの感慨をもつに違いない。丹波にも戦後の五十年があった。しかし在住しない私にはそれについて書く資格はない。ここでは私を感じ、目にとめた戦後の丹波を筆のままに書いてみようと思う。

題して「私の」という所似である。

（その一）まっ先に私の最も強い印象として浮んでくるのは、JR新大阪から一時間一〇〇分の特急（北近畿）が丹波（柏原）へ着くようになったことだ。思ってもみなかった時間の短縮である。これで東京在住の私には丹波との距離が一気に短縮され、故郷が一層身近かになった。

そして福知山線に入ると、生瀬、武田尾、道場をトンネルの轟音とともに一気に抜ける。この電車の唸りは戦後の丹波の夜明けを告げるように思われる。その代わり以前の風情ある溪谷の眺めは消えた。戦後の大きな特徴はスピードなのだ

ろう。

私は十九歳で故郷を離れ、旧制山口高校に学んだ。当時の福知山線はもちろん各駅停車で、柏原から大阪まで二時間四十分かかった。それから恐らく三、四十年間は縮まっていな。大阪で夜行（今の準急）に乗って朝、山口へ着く。乗る度に福知山線にじれったい思いがした。終いには丹波に生まれたのが不運と諦めた。それだけに特急電車の昔のおよそ半分という短縮は、私にとって痛烈な思いなのである。

トンネルといえば、もう一つ谷川と柏原の間の奥野々トンネルがある。昔はこれを抜けるのに十分くらいかかった。このトンネルを抜けると、そろそろ柏原下車の支度というのが常であった。ところが、今はどうも様子がおかしい。すぐ抜けてしまう。特急運転の頃に改修されたらしい。鉄道でなく山南町と柏原町を結ぶ幹線道路に奥野々トンネルの新設工事が進んでおり、また柏原の鐘が坂に新しく第三のトンネルを掘るという。

山国にトンネルはつきものだが、現在の土木工事では地中に穴を開けるのは割に楽らしい。大きな直径の掘削機で掘り進む。それで東京では至るところで地下鉄工事が行われている。日本の掘削機はイギリスとフランスの間のドーバー海峡に穴を開け、今年、英仏直通特急が開通した。

(その二) たしかに交通は地方を、地域を大きく変化させる。丹波へも中国縦貫の吉川から舞鶴自動車道が貫通し、阪神との時間的距離が短縮され、地域にいろいろな影響を起こしている。テレビで「日本一速い高速道路はどれか」というクイズがあった。答えは舞鶴自動車道だという。ここは走行台数が少なく、めったに渋滞が起きないから「日本一」と人を馬鹿にしたような答えであった。

戦後、日本中どこでも、山の中まで道路がよくなった。丹波も例外ではない。地域でも新しいバイパスが造られ、それに伴って地域や町に変化が起こる。道路ばかりのせいではないが、社会、経済全体の過密と過疎、日本中の都市以外の町や村が過疎に悩み、首長や商工業者の頭の痛いところだ。地域のバイパスは交通の流れを良くする反面、町自体の過疎をひき起こす。バイパスによって旧市街の過疎を招き、商業活動は氣息えんえんとなる。全国至るところで見られる事例である。これには全く有効な対策がないようだ。

(その三) 福知山線で丹波へ入ると、農家や民家の立派さが目につく。多くはどっしりした黒光りの瓦葺きで、丹波は昔からよそよりすぐれていたが、近ごろ一層磨きがかかったように思われる。民家は住民の民度の現れだ。私は東京練馬の田園地帯に住んでいるが、代々の農家は構えも大きく瓦葺き

の重厚なものだが、まわりは鉄板葺きの新建材がほとんどで、外装は白系統、まるで植民地のようにだと独り嘆いている。

瓦葺きで美事なのは島根から山口へかけての石州瓦だろう。代赭色(赤褐色)の屋根が輝いている。もっとも瓦葺きに日本の味わいがあると言っても、阪神大震災で瓦葺きの和風建築は脆かったというから、いささか複雑な思いである。

(その四) 丹波は山国には違いない。私の手すざびにしている俳句には、俳句によりこまれた名所をまとめた俳枕(はいまくら)というものがある。私の持っている俳枕の「丹波」の一節には「山国で、細川や明智の統治が知られ、のち篠山藩、柏原藩の領するところとなった。栗や松茸、猪など山里の味覚で知られるところ」と出ている。

戦後、松茸は振わなくなったが、丹波栗と猪は健在だ。近ごろではそれに鹿が増えて林業家、農家を困らせているらしい。不謹慎のそしりをまぬがれないが、私には丹波の山野を鹿が駆け回っているのを想像するのも楽しい。近年では丹波黒豆が正月のおせちの最高品として、東京でも一般に知られるようになった。

丹波にはまだまだ自然が残っている。今年も丹波の溪川に山椒魚がぬつとあらわれた。モリアオガエルが春日やその他でも卵を産んだ。そして蛭が春日の竹田川上流で乱舞したと

いう。

先日、私は東京目白の椿山荘へ蜚を見に行った。ここでは毎年、蜚をとり寄せて広大な庭園に放している。丹波でも少なくなったことだろうが、こういうところへ足を運んでせめてもの渴をいやすほかないのである。

(その五) こういう丹波の自然を伝えてくれるのは丹波新聞である。この新聞は自然の息吹きの報道に意を用いているように、すぐれた見識だ。序でにこの小さな新聞で光っているのはコラム「丹波春秋」だと思う。筆力もなかなかのもの、丹波人にとってはなにげない日常の心情や生活が文章の中にひそんでいて、そこから私は「丹波人のいま」を掬みとるのである。

それと戦後目立つのは町の広報活動だ。毎月、柏原町から送ってもらっている。それには町長が自らの方針や所感を述べ、町全体や町民各位の動きがよく分かる。他郷にいて、いやがうえにも郷里への思い入れが深くならざるをえない。

(その六) 大分長くなったので、少しはしよる。近着の新聞によると、柏原高校から西オーストラリアの高校へ十五人もがショートステイに出かけるという。戦後、同校では三十年前から米国西海岸ワシントン州の高校に交換学生を出してい

る。この制度が今も続いているのは県下でも同校だけとか。丹波の山ざるであつても国際化が必要な時代に全く意義のあることだ。私をはじめて海を渡ったのは一九五四年、四十年前、ターボプロップ機の時代だ。役所の命をうけて、右も左もわからぬままに出かけた。私は旧制高校ではドイツ語をやったので、私の英語は今もって柏原中学の五年間止まりである。それで長年、何とかごまかしてきたが、青少年の時代に培う経験は全く尊いと思う。

(その七) 教育・文化でも県立の丹波文化センターが出来、また丹波年輪の里その他各町とも文化施設に力を入れている。今年、私も歩いてみたが、文化センターが柏原駅の南に広大な拡張、改修工事を行っている。今秋竣工の予定とか。もつと雄大なのはウィーンに習った丹波の森構想だ。一昨年、私もヨーロッパ旅行の途次、ウィーンの森の一端を歩いてみたが、これはなまはんなな進め方では実現する代物ではないと思う。年月をかけて、たゆまぬ努力で、やってよかったとなることを願っている。

ところで、日本には平地の田畑でもなく、森林の山地でもないその中間の新しく「中山間地帯」と呼ばれるところが四〇％ある。そしてまた、ここで米の四〇％ほどを生産している。その地帯の労働力は主に高齢者だ。また農村景観の最も

日本的なところでもある。この地帯の振興をはかることが、今の重要な農業政策になっている。二十一世紀のはじめまでに、この地帯の整備水準を現在の中都市並みに引き上げることを目標に、丹波でも集落排水の整備その他環境整備が行われているが、本質はそんなことではなく、ここに将来にわたつ

道義地に堕ち世相狂乱

—老残なお抱く憂国の志—

佐々木 盛雄（春日町）

氷上郡出身者の関東郷友会ができて今年は百年目になるそうですが、当時は明治二十七、八年の日清戦争で日本国中が興奮に湧きかえっていた頃でしょう。私は明治四十一年生まれで今年八十八歳ですから、私が生まれる十数年前に東京在住者の氷上郷友会があったのです。

私は現在の春日町の山奥の大路村に生まれました。前面には三尾連山の高峰がそびえ立ち、後背には妙高山を眺めて少年時代を過ごしました。妙高山上の神池寺は、昔は天台宗の中本山として境内には五十三ヶ寺の塔堂伽藍が立ち並んでいて、護貞親皇が隠れておられたこともあると聞かされています。

て健やかな農業地帯を構築することである。今までに例のない難しい問題であり事業である。

いずれにしても、本当に美しい日本ができ、その中に活力ある丹波があることを、心から願っている。

した。村の古老の話では、神池寺にあった護貞親皇の鎧兜を明治初年にお上の役人達がきて持ち去って、鎌倉八幡宮の宝物にしたのだそうです。

神池寺で思い出すのは子供の頃に母に連れられて「二十六夜」のお祭りに登山したことです。近隣の村人達が続々登山してお堂に籠って、ご詠歌を唱えたり、漫才、浪曲、のぞき等の余興もあって大賑わいでしたが、夜ふけて満月が雲の中から顔を出すとモヤの中にかすんだ月が二つ、三つ並んで見えるのです。それを眺めるのが「二十六夜」の呼び物でしたが、今も「二十六夜さん」のは続いているのでしょうか。

私は小学を終って、当時の柏原中学に通いました。大路村から黒井駅までの二里の道を自転車走って、黒井駅から汽車で柏原に行くのですから、母は毎朝三時頃に起きて、かまどで薪木を燃やしてご飯を炊いて私の弁当を作るのです。私は床の中で母の折り焚く柴の音を聞きながら、ひそかに合掌して母に感謝したことを思い出します。

戦前には小学一年から六年まで「修身」の教科書があつて道徳教育を叩きこまれましたが、大東亜戦争に敗れると、占領軍は修身も、地理も、歴史も禁止して教科書を集めて焼き捨ててしまったのです。

また、学校の儀式には、校長先生が全校児童を講堂に集めて「教育勅語」を拝読しました。明治天皇が明治十九年に東京帝国大学を視察されて申されるには、西洋の進んだ法律や、科学などの教育は完備しているが、日本国民としての倫理、道徳の教科が欠けている。だから教育の根本は国民精神の育成にあることを教えなければならぬと仰せになって、明治二十三年に「教育勅語」を發布されたのです。

教育勅語で明治天皇が最初に仰せられていることは「父母に孝」ということです。父母の恩に感謝しなさいと言うことです。ところが親孝行は昔の古臭い悪習慣である、といって反対するのが今日の風潮です。しかし父母の恩に感謝することは昔も、今も、変わらない人間としての常識であります。

柏原中学ではアメリカ人女性のソントンさんや、イギリス人のヘンリーさんから英語会話を学びましたが、大正末期から昭和初頭は、第一次世界大戦後の経済不況脱出の活路を、満洲進出に求めた日本民族大移動時代でありましたから、私は柏原中学を終えると大陸雄飛を志して東京外語に入学して中国語を学びました。

そして昭和六年九月、満洲事変が火蓋を切ると同時に級友と共に渡満して、朝鮮羅南旅団長依田少将直属の学生通訳となって従軍、錦州入城では西大門に駈け上がつて日の丸国旗を掲げました。ところが、その時の光景がニュース映画に出たことを日本に帰ってから知りました。

翌昭和七年、外語卒業と同時に新聞社に採用されて、外務省詰めとなつて外交関係を担当、海外特派員としても各地に出かけましたが、当時は飛行便がなく、横浜から乗船してフランスのマルセイユ港に上陸するまで約四十日間もかかる気の長い船旅でした。

新聞記者約十年、昭和十六年十二月八日、ハワイ真珠湾攻撃で大東亜戦争が起ると、海軍に徴発されて海外情報関係担当を命じられました。この大東亜戦争では、芦田村出身の大西滝治郎海軍中将総指揮の特攻機の敵艦突入や人間魚雷の壮絶な戦術がくりひろげられたのです。

だが四年間にわたつた大東亜戦争も広島、長崎に原爆投下を受けて昭和二十年八月十五日、ついに陛下の御決断によって全面降伏となりました。だが国民は敵機の空爆で焼野原と化した日本列島を食糧を求めてさまよう悲惨な占領時代がつづきました。

だから私は日本の独立回復の急務を叫んで、新憲法最初の総選挙に自由党公認候補として出馬しました。もとより赤手

空拳ですから金もなく、自動車もなく、拡声器とともなく、自転車で丹波、但馬を走り廻ってメガホンを片手に声をふり絞って、日本の早期独立回復を訴えました。

すると私を応援して下さる人たちが次第に増えて、選挙事務所に米、野菜、魚の食糧を差し入れていただくなど応援氣勢が盛り上がったお陰で当選できました。

しかし選挙運動中には色々な失敗や、滑稽な出来事がありました。たとえば多紀郡のいちばん山奥の草山村の谷底の道路にさしかかった時、山の頂上で誰かが手を振ってくれているようにしたから、私が「佐々木盛雄が立候補のご挨拶に参りました」と大声で叫びますと、同行の青年が「あれは有権者ではありません」と言うのです。成程よくよく見れば、山の上で猿が二、三匹集って、たわむれているのが人間が手を振っているように見えたのです。また、ある時は街頭演説をしていますと、集ってきた人たちが「ここは京都府で、あなたの選挙区でないですよ」と言って大笑いされました。

私は議員になりますと国会の外務委員代表として吉田首相を首席全権とするサンフランシスコ講和会議に参列しました。この講和会議において吉田首相は巻紙に筆で大書した演説原稿を壇上から垂らしながら捉提、国後、齒舞、色丹の北方四島は有史以来の日本の固有領土であって絶対に放棄したものではない、と絶叫してソ連の不法占領をきびしく論難した当

時の光景が、今も私の眼前に浮かんできます。

ところが、ソ連は平和条約への調印を拒否して今日に至るも不法占領を続けているのです。それにもかかわらず日本の歴代政府は、土下座外交の醜態を露呈してソ連の不法占領を黙視し、あまつさえソ連への巨額の経済援助を行っているのは正に国辱と言わねばなりません。

さて、今年の日本は正に危急存亡の関頭に立っているといっても過言ではありません。年頭早々には阪神大震災が起こって多くの水上郡出身の方々が大変な災難に遭いましたし、災害復旧は難航しております。しかし地震は避けられない天災であります、阪神大震災に引き続いて起ったのが、オウム真理教のサリン無差別殺人による国家顛覆の大暴動であります。

彼等は十一月には天皇御臨席の国会開会式場にサリンを投げこみ、空からはリモコン・ヘリコプター十機を飛ばして東京都民にサリンを浴びせることを計画していたのです。だからもし警察のオウム教施設に対する一斉捜査が遅れていたなら、十一月には東京全都が阿鼻叫喚のこの世の生き地獄となったでしょう。

しかるにオウム教は警察の捜査を宗教弾圧だと言って、国民に対する一言の謝罪もしないのです。ところが、あの厚顔無恥で傲慢不遜な上祐外報部長に花束を捧げたり、上祐のサ

イン入り顔写真一枚一万円に群がり買う女性達がいるのですから、狂っているのはオウム教団だけではなくて、世の中には善と悪との判断ができない連中が溢れているのです。

これは戦後の「日教組」の偏向教育によって日本人が国民道徳を失ってしまったからです。かつて文部省が道徳教育を復活しようとした時、左翼政党や日教組の教師達は児童を放置して赤旗をかざし、革命歌をが鳴り立てて街頭デモで荒れ狂ったのです。丹波、但馬の日教組教師達も大挙上京してデモ行進に参加したのを私は見ました。

さりとて最近の政界を眺めると、議員は自分の当選だけの選挙運動に明け暮れ、政党は国家理念も国策もない政權妄者達の野合集団となつてしまいました。そして国内はバブル景気がはじけた円高不況の渦中で企業は海外に流失、国内産業は空洞化のリストラ人員整理で失業人口は増大、日本経済の危機が眼前に迫っております。

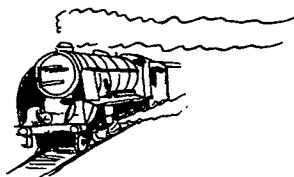
だから深刻化する経済不況脱出のための抜本的対策を講じることが政局の最大課題であることは言うまでもありません。しかし今日の世相狂乱を眺める時、戦後の平和ボケに浮かれて喪失した父祖の精神を取り戻すべき時であります。

細川首相以来、羽田、村山歴代首相は、日本を侵略国と断罪する謝罪宣言をくり返してきました。たしかに人類の歴史は今日まで、戦争の連続でありますが、自国を侵略国として

謝罪決議を行った国は一国もありません。村山首相と、土井たか子議長は東南アジア各国を歴訪して侵略戦争の謝罪を伝えたと、各国首脳は「五十年前の過去の謝罪よりもアジアの将来を語ろう」と言われて赤恥をかきました。

日本を侵略国と断罪すれば二百五十万の靖国英霊は戦争犯罪人となります。靖国英霊に対する慰霊感謝の決議こそ国民代表たる国会の責務ではないでしょうか。見捨てられた靖国英霊の悲憤の慟哭が九段の社にこだましているのです。

私は明治、大正、昭和、平成四代におよぶ激動の時代を生きて抜いてきましたが、今日の世相を眺める時、老いたりといえ、わが国の前途に憂慮の念を禁じ得ない昨今です。



夜行列車は行く

—新幹線が開通するまで—

池田 忍（山南町）

汽車は出ていく煙は残る——若い頃、汽車に乗り遅れる夢をよく見た。福知山線谷川駅、正月三が日を終え、心残りを振り切って駅に駆け付けたものの列車は今ホームを離れたばかり。帰りたくない気持ちもあって再び実家に戻るのだから、それから何日も帰れない。東京ではとくに会社が始まっている。実家の甘い生活に浸りつつ世間から置いてきぼりの失意の日々。寝覚めはよくなかった。

独身の頃は正月には必ず帰省した。東京駅夜十一時三十分発の鈍行列車、忘年会で間際まで飲んでいて列車に飛び乗り、通路に倒れたまま大阪に着いたことがある。帰省のときはどんなに混んでいようが苦にはならなかった。しかし正月三日はまたたく間に過ぎて東京に帰る日はセンチメンタルであった。祖母が門口に出てきて泣きながら見送るのが常だった。

谷川駅を昼過ぎの列車に乗る。車中はすでに満杯、デッキにはみだしており、やっとの思いでしがみつく。そのまま二十幾つかあるトンネルで、たつぷりと煤煙の洗礼を受け、約

二時間半かけてや々と大阪駅に辿り着く。

さて、それからが地獄の一夜になる。

昭和三十年代は初頭のナベ底景気から徐々に這い上がり、三十五年頃の高度成長の入口にさしかかる。集団就職列車も走るようになり、京浜地帯への人口集中は激しくなるばかり。三十七年にはついに東京の人口が一千万を突破する。しかし東海道線を走る列車事情は改善されることもなく、昭和三十九年十月の新幹線の開通を待たねばならなかった。

その頃、昼間に走る特急列車があることはあったが、我々にはお呼びでなかった。大阪・東京間は夜行列車が主であった。神戸始発の「銀河」にはじまり、大阪始発は「明星」「彗星」「金星」「月光」とつづくラインアップ。名前はいずれもドリーミイだが、夢見ごちを味わうわけにはいかない。乗車率二〇〇％以上、座席を確保するためには二、三時間前から並ばなければならなかった。

わが「明星」は二十一時十分発、東京には翌朝七時四十四に着く。改札が始まると人は殺気だち我先にと乗り込む。またたく間に座席はふさがり、デッキまであふれ出る。通路に坐る場所を確保できたらいほうで、ドア近くは立ったままになる。

ようやく新聞紙一枚を広げられるスペースを通路に確保した。今夜は、尻が痛たくなるのをこらえ膝小僧を抱いて眠る

しかない。

ある時、車両の真ん中あたりの通路に腰を据えたのはよかったが、やがて生理現象に悩まされる。我慢も限界に達し、トイレに向かう。通路にはぎつしりと脚が出ている。座席につきまわりながら、慎重に足を踏み入れていく。よろけて股間を踏みつけたら一大事である。

やっとの思いで通り抜け、目的を果たす。気分は清々しているが、元の場所に戻るのがひと苦勞だ。ドアをあけ、通路を見渡す。ドア付近には人がぎつしり立っており、いずれも怒っているような顔つきだ。機嫌がいいわけがない。この人たちを押し退けて通らねばならない。田舎出の気の弱い青年は進退きわまつてドアを開けたまま、しばし立ち尽くしてしまったのだ。そこへ罵声が飛んできた。

「おまえがそこにいるからイケナインダ」

通るならさっさと通れというわけだ。通路に立っている人は、私がドアを開けたとたんに「またきたか」と迷惑でも通さないわけにもいかなないから、半身になって構えていたのだ。それが立ち止まったままだったから、さきの罵声になったのだった。

その後の人生で、その時のことをよく思い出す。進むべきか退くべきか、進退きわまるという場面、こちらが態度をはつきりしないために相手の気持を宙ぶらりんにしてしまうこと

がある。目的に向かって進まねばならぬときは、多少強引でも周囲に迷惑をかけてでも、自己の意志を貫かねばならぬ。しかし、未だに迷ってばかりの人生だ。

「朝の明けない夜はない」。眠れぬ一夜であつたが、七時四十四分、列車は勢いよく東京駅のプラットフォームにすべり込む。駅頭に立つと嵐のような騒音が押し寄せてくる。頭の半分は田舎の静穏を残したままだ。やれやれまた東京にかえて来た。そのまま職場に向かい、昨日までとは全く別世界の生活が始まる。

新幹線が開通したのは東京オリンピックが開催される十日前の昭和三十九年十月一日である。東京は開催に備えて、さまざまな施設が急ピッチで建設され、高速道路が縦横に走って街の景観も一変した。東京・大阪間を最速三時間で結ぶ新幹線の開通で、あの丹波の山奥から半日で行き来できるようになった。便利にはなったが、世の中は一層忙しくなり、人情もまた変わった。

時代は新幹線とスピードを競い合うかのように、昭和四十年代の高度成長に向かって驕進を始めた。

更なるご発展を

柏陵同窓会 会長 植 田 憲 雄

関東氷上郷友会の創立百周年おめでとうございます。

明治二十八（一八九五）年の頃がどういう時代であったのか、日本史の教科書を復習しなければならぬ程遠い昔になりますが、明治憲法が公布された後で、日清戦争や三国干渉など国の内外で日本が大きく変貌を遂げようとしていた頃と想像されます。

そうした時期に、丹波から、ある人は遊学の夢を抱いて、ある人は実業・政界に雄飛せんと、東京に壮途を求められた人たちが、相互に連携をとり、苦楽を共にし、相励まし合おうと貴会を設立されたものと拝察致しております。誠にその意気や旺んであっただろうと心揺さられる思いが致します。

爾来百年、国においても個人におかれましても、多事多難な変遷があったものと思われませんが、貴会の創立の理想は厳然と守り継がれ、幾多の名士を輩出され、国内は勿論のこと、

全世界の各界に多大の貢献をされましたことに深く感動しております。また、その成果は故郷丹波にも大きな影響力があり、丹波に育つ若者に常に大きな夢を与えていただいております。このことに對しましても心から感謝申し上げます。

この百年の間、この郷友会の運営に営々として当ってこられました皆さん、黙々と『山ざる』の編集、発行に努めてこられ、会の発展に寄与されてきました皆さんに満腔の敬意を表します。

私たちの母校柏原高校も時をほぼ同じくして、平成九年に百周年を迎えます。関東氷上郷友会の発足と同じ頃に、旧制県立柏原中学校が丹波の地に創立されたのも何かの因縁であり、丹波から優秀な人材を求める時代的な要請もあったものと深く推察致します。

柏陵同窓会も会員三万二千有余名となり、貴会にも最もゆかりのある団体であります。今後共々に連携し、会員相互の連帯と親睦の輪を広げ、郷土の発展にも寄与して行きたく存じております。よろしくお願い申し上げます。

名誉と栄光に輝く氷上郷友会が更にたくましく発展されまことを心からお祈りし、お祝いの辞とさせていただきます。

記念すべき郷友会一〇〇周年

足 立 三 治（青垣町）

明治、大正、昭和を経て平成時代にまで生を受けた私にとつて、水上郷友会の一〇〇周年は、誠に感慨無量のものであります。

一〇〇年前、遠い古里にあって郷友会の発足に尽力された先輩の偉業に対して、今ここに改めて感謝の意を捧げます。郷友会をつくられた先人の心意気が今さらのように偲ばれてなりません。

一口に一〇〇年と申しますが、初期の郷友会を知る人は、もはやこの世にはいなくなりました。

私は大正十三年に大志を抱いて上京いたしました。いつも優れた先人達の思いを念頭に浮かべながら、六十有余年間に一途に働き続けました。

その間郷友会の同志と交り、なつかしい古里のよき思い出と、先輩のよきご指導のおかげで、今年八十八歳の年を迎えることができました。今は日々の幸福に感謝の余生を送っております。

今思い出すことは、大東亜戦争の、今まで体験したこと

ない敗戦によって、新しい時代と対応したころのことです。

今は亡き石橋治郎八元会長が発起人となって、戦争でしばらく中断していた水上郷友会の再発足を呼びかけたのです。石橋氏の熱心な奉仕の甲斐あって、新橋のステーションホテルに久しぶりの郷友が続々とつめかけて、盛大な再発足を見たのでした。

石橋氏の執念が実を結び、会長にも就任され、その後も熱心な奉仕活動が続けられ、今日の隆盛の基礎が築かれたのです。

なかでも忘れることのできないのは『山ざる』の発行を提案されて、それが実現を見たことであります。『山ざる』誌によって、丹波人の意気を会員に伝え、相互の親睦をはかろうというものでした。ちなみに『山ざる』誌の題字は石橋元会長の手になるものです。

石橋会長亡き後、会員の皆さんのご推挙によって、不肖私が会長に就任いたしました。

私は『山ざる』誌を会のシンボルとして、会員諸君とともに約十年間会長を勤めました。その間皆さん方のご支援を得て全うできましたことは、私にとって最大のよろこびと、感謝のほかの何ものでもありません。

今回水上郷友会創立一〇〇周年の記念すべき年を迎え、会員の一人としてよろこんでおります。

関係者の皆さんには大変ご苦勞をかけますが、この記念すべき行事が皆さんのご努力によって成功願えますよう、心か

関東氷上郷友会百周年を祝して

谷 垣

尚（柏原町）

私共が関西電力柏原営業所長として赴任した父について柏原へ転居したのは昭和八年八月十八日でした。あれから六十年以上経ち、父も母も今は亡く故郷となった柏原で永い眠りについています。

私が氷上郷友会を知ったのは昭和十一年三月崇広小学校を卒業するときでした。郷友会から記念の賞を頂きました。この時戴いた黒い表紙のアルバムには家族の古い写真が貼られて、我が家の大切な宝となり、今も柏原へ帰ったときはこのアルバムを眺めて昔を懐かしんでいます。

関東氷上郷友会が百周年を迎えたということは、大変な歴史だと思っています。会がよく開かれた東郷神社の近く神宮前に住んでいた昭和五十年前後は何回か郷友会に出席しましたが、その後九州へ移り又横須賀に帰って来た何年もの間すっかりご無沙汰していました。ただ毎年送って頂く『山ざる』を見

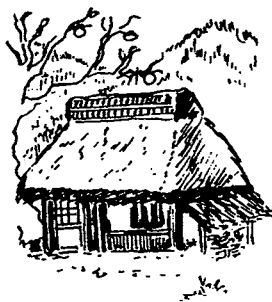
ら祈念いたしますとともに、あわせて関東氷上郷友会のゆるぎなき発展を祈ります。

ては友の消息を知り望郷の念にかられたりしました。老松の聳え立つ崇広小学校の校庭や大内山の姿、入船山下の柏中校庭、兎狩りをした東奥の山、釣り糸を垂れた小川のほとりなど昔を語りあえる友の集う郷友会は今後益々盛大に発展して欲しいものです。

私は中学校で井上雅二氏など郷土の先輩方の講演を何回か聞きましたが啓発される所多く今も鮮烈な印象が残っています。

今年は図らずも戦後五十年です。誤った史観に毒され遂に行き詰まってしまった現在の日本を再び光輝ある三千年の日本史の大道に復帰させるために、郷友会が若者に郷土を語り歴史を伝え明日の日本を考える場となり、再び独立したアジアの日本を建設する上に役立って貰いたいと念願しています。そのためにも今後は万難を排して会に出席し百周年を迎えた関東氷上郷友会の発展に盡力しなければならぬと覚悟を決めている次第です。

ふるさと随想



古里賛歌

——来しかたのあと——

渡邊 隆 男（氷上町）

記憶というものはふしぎなもの、幼い日々の断層が昨日のことのようによみがえると、その周辺のことごとくまでも、霧が晴れるごとくに現れる。年を経て古里の山野に佇めば、思ひ出はまたひとしおである。時の流れが洗い去るのか、苦難の実感足跡も失せて、往時の心裏に焼きつく哀楽の情だけが、とりわけあざやかに浮上する。

今してみればさもないことが、無性に楽しかったのはなぜだろう。それだけ辛い日々だったのか。あれほどきつい環境に平気で耐えていたのはなぜだろう。だれもが同じだったから、語らう野山があったから。苦楽はいつも裏表、喜びも哀しみもまた、目線・視角のちがいののだ。

戦前、戦中、戦後、そんな呼びかたも終わろうとしているのだが、この二十世紀の有為転変は、世界的規模で展開した。思えばどれくらい時代をよくぞ生きたものだ。今つれづれに來しかた記憶の断片をたどってみるのもおもしろい。

昭和三年、水上郡沼貫村朝坂に生をうけた私は、六男一女の三男、家は農業の傍らせんべいや菓子をつくって卸していたが、文字どおり赤貧洗うがごとき幼少時代を送った。

あのころの冬は寒かった。肌身に痛い寒さだった。母がつくった木綿の下着、兄ゆずりの筒袖着物に紐の帯、一重の足袋にわら草履、みな夜なべの自家製だ。白山おろしの北風がスネから胸もとを吹き抜ける。子供はきまつて鼻水二本、白くて太いのをジンキバナ、筒袖の端で拭くからそこだけが黒光りになる。霜焼けの赤い頬、手足の指は霜ぶくれでかゆくなる。水仕事のおばさんの手先には、ヒビ赤切れができていて、アスファルトのような膏藥を火であぶって貼っていた。

子供は風の子、外へ出て遊べ、ぬく袖あかんたれ、炬燵は毒じゃ。火鉢に手を出しても叱られるという、まさに野放しのスバルタ教育なのだ。

それにしても祖父が「はよう来てあたれ」という炬燵の魅力はまた格別、隠居部屋だけは治外法権だった。

だから春が待ちどおしかった。春まだき鶯の声や梅の香にはだされるのだが、桜がワッと咲くころは、もう浮かされて気もそぞろ。古里の春の野山は、子供には別天地だった。

四、五歳になると早くもひと役かわされる。弟妹の子守りだ。冬は綿入れの負い子をおるのでぬくいのが冥利だが、背負ってばかりではこっちの足腰がもたないのだ。小便はほっ

ておけば乾くが、大便のやわらかいのは始末におえない。泣き叫ぶのを黙らせるには、口にものを吸わせるにかぎる。

六歳の暮のことだった。正月に遊ぶ一銭の奴風はしさに、畑仕事の母にすがって半日泣いた。銭はない、兄に頼んでつくってもらえ、涙ぐむ母、ようやくあきらめる。

隣村の店に奴風を偵察に行く。「これ一銭、それ二銭、どっちにしましょ」「うーん、また来ます」——小雪の道を帰りながら、兄には頼まん一人でつくと心にきめる。

竹ヒゴを割るのは祖父が手伝ってくれた。細く削ってローソクの火であぶって曲げる。障子紙を貼って乾かしていると「よっしゃ、顔はわしがかいちゃろ」と父が墨で描いたのは鬼の面、「糸のつけかたがむずかしいんじゃ」と、胸糸までつけてくれたのだ。「こんな大きいのは三銭はするぜ!」

翌朝、わが鬼面の奴風は、頭を地にこすって離陸をしない。あがりかけても急降下、兄が偉そうにいった。「あほう、しりっぱが足らん、新聞もう一枚分つなげ!」——かくして自作の風は、みごと空高く舞いあがったのである。

それが機縁になったのか、小学校へあがつてからも模型飛行機やグライダーづくりについてつつを抜かすこととなる。



七歳で小学校にあがるとみな学生服に変わるのだが、これまた兄ゆずりの年季もの。ただし足にはもとよりわら草履。

それでも初の洋服姿はりりしい気分。桜吹雪の入学式に、東北・南の隣村から、まだ見ぬ友が男女あわせて二十四人、村ごとに並んでやってくる。緊張の余り顔までほてる。

教科書が一新した。サイタ、サイタ、サクラガサイタ。ススメ、ススメ、ヘイタイススメ。ヒノマルノハタ、バンザイ、バンザイ。軍国主義の洗脳がはじまっていた。

学校から帰るとカバンを放り投げて、暗くなるまでお手伝い。水汲み、風呂焚き、黒葉させ、車の先引き後押し、牛小舎掃除。十歳ともなれば何でもこいだ。麦刈り、田植、田の草とり、稲刈り、籾干し、肥たんご。百姓仕事はいっちょ前。宿題は晩飯のあとだが、本を開くなり寝てしまい、目がさめるともう朝なのだ。あ、今日も廊下に立たされる。

小学校三年、修身の授業だった。乃木大將は冬のさなかに毎朝井戸水をかぶった。偉くなる人はな、鍛えかたがちがうんじや、と教えられ、いたく感動した。よーし、やってこましたる。十一月はまだ寒くない。早速に始めて翌年三月末まで、冬の五カ月を三年間、五年生を終えるまで続けたのだ。

毎朝六時、起きざま井戸端に走り、ツルペで水を汲みあげ、素っ裸になって三杯、頭からザンブリかぶるのだ。タオルで拭く数秒間がきついが、服を着ると爽快この上なし。直ちに山裾の神社まで駆けあがり、柏手打って走り返るのだが、全身がはてって寒気もさわやかなのだ。いちばんむずかしいの

は、ガバツと起きるときの気合いというか「決断」である。これはまさに自己との闘争である。この決断の訓練は、私の生涯、知らず大きな役割りを果たしているようだ。以来今だに感冒を知らないのも、この冬行水の成果にちがいない。

毎朝の宮参りで柏手を打つとき、神だのみはひとつにしぼった。「どうか東京に行けますように」パン、パン。まだ見ぬ大都会東京は、そのころからあこがれの夢の楽園だった。

うなぎの茶づけに月見の団子、村中総出の川裾祭り。祖父にもらった一銭銅貨を、ゆかたの帯に巻きこんで、帯ごと握ればルンルン気分。夜店にカーバイトの臭いが立ちこめる。アイスクリンか水蜜桃、ラムネ、風船、煙硝玉。迷いに迷い買ったのは、たつた三束の線香花火。三日三晩が楽しめる。火華の出る前にポタツと落ちる、あ、無情。息をのみ手をゆらさずに大輪華、瞬劇のハイライト。しじまに消え入る流線が、いとおいしい。私は今でも線香花火がいちばん好きだ。

成松の二十四日盆は仕掛の大花火、せいもん払いは菊人形、柏原の厄除さんは街中が夜店。年に一度のお祭りは、指折り数えて待っていた。二里、八キロの道のりなんぞ何のその、唐辛子きいた素うどんを、今日こそ食わずにおくものか。歩き疲れたあとの帰り道の、遠かったことよ。



日清、日露の戦役を祖父がよく話してくれた。そしていつ

もつけ加えたものだ。「戦争はのう、したらいかん、勝つても負けても、両方とも損をするだけじゃ」と。

昭和十二年、支那事変勃発。働き盛りの村の若衆が次々と、真新しい軍服にタスキをかけて「不肖〇〇二等兵、お国のためご奉公にがあります」ギコチない敬礼をくり返ししながら、村総出の旗行列に送り出される。そしてそのうち白布に包まれた白木の小箱で無言の凱旋。そんな光景がどれほどくり返されたことか。「国家」というものはふしぎなものだ。

昭和十五年、私は柏原中学の受験を目ざしたのだが、願書提出の寸前、父が進学を拒んだ。うちにそんな金はない。家で働けというのだ。くやしくて何度も泣いた。あきらめるほかなかった。そんなとき母が私にささやいた。「鶏をもっとふやしてのう、卵を売って、何とかして金をつくるさかいに、中学に行っとくれ」父は聞こえぬふりをしていた。

柏原中学に入った年に日米開戦、日本は奈落の軌道に入る。もう勉強どころではなかった。国民皆兵、どうせ死ぬなら飛行機に乗りたい。私はグライダーの特訓を受けて三級滑空士の免許をとった。目ざすは海軍飛行予科練習生、特攻隊の養成機関である。中学三年半ばで西宮の軍需工場に学徒動員されたが、予科練の試験の前日には里帰りが許された。

翌朝は五時前に起きた。柏原六時の汽車に乗りなければならぬ。母がげげな顔つきでどこへ行くのかと聞く。「……」

「おかしい、何か隠しとる、いうとくれ」「どこでもえ、やないか」押し問答の末、予科練の試験だと白状におよぶ。

「それだけはやめとくれ、絶対にやめとくれ」母は泣きながら服の袖をつかんで離さない。とうとう汽車の時間に遅れてしまったのである。昭和十九年春のことだった。

殺すか殺されるか、殺さなければ殺されるのが戦争というものだ。義理も人情もなく、手段も選ばない、極めて単純な行為なのだ。なぜ戦争をするのか。民族の優越意識、宗教の過信、為政者の名譽慾、国と国との利害の掛け引き、いつてみれば単細胞同士、ガキのケンカにすぎない。理の通じない一方通行の世界、それを我々はいやというほど体験した。

だから今でも高飛車にものいうやつには腹が立つ。謙虚が美德、負けるが勝、古里は辛抱と粘りとを教えてくれた。

あの暗く忌まわしい圧政の時代はもう二度と語りたくない。



昭和二十年四月、私は東京中野の東海科学専門学校に入學した。物理学校（現理科大）の分校、東海大学の前身である。

あこがれの東京は焼けただれて、見渡すかぎり瓦礫の原だった。まだ空襲が続いていた。布団を肩に、大きなリュックを背に、父が調べてくれた住所のメモをたよりに蒲田の焼け跡をさまよった。わが朝坂村出の荻野はんが住んでいるはずという。そしてようやく尋ねあてたのが、何とトタン屋根の防

空壕だった。荻野さんは健在だった。「あんた渡辺さんの息子さん、こんな所へ何しに来たの」と目をシロクロ。

リュックには銀シャリ（白米）と味噌が詰まっていた。地獄に仏だと歓迎されたものだった。防空壕はいくつもあった。もぐら生活が始まる。途中グラマン戦闘機の機銃掃射を避けながら中野の学校に通った。まだ授業が続けられていた。

五ヵ月後の八月に終戦。何と生きのびたのだ。前身タガのゆるむ思いだった。春の訪れた古里の、あの解放感だった。



東海科学専門学校は戦後府中に引越して全寮制になった。クジで引き当てたのが先生ばかりの寮だった。食べ物、夢ばかり見る食糧難の時代、みなやせこけて大きな目玉をしていた。結核が流行、死ぬ生徒も続出した。腹がへっては勉強はできぬ。私は農耕経験者を集め、校舎の周りの荒地を四、五百坪耕し、さつま芋や大根を植えたのである。

関東ローム層は肥沃な黒土で、丹波のカジけば火の出るような堅土とは比較にならない。秋になると、まだかまだかと矢の催促、勝手なもので取り入れにはみなが群がった。山積みした収穫を先生生徒に配ったときは仏菩薩の心境だった。

芋づくりにかまけてよく授業をさぼった。さぼらなければ芋は育たぬ。農耕と学業の板ばさみである。百姓の子は百姓か、化学や数学や理論物理はといった何のために学ぶのか、

俺は学者先生向きじゃない、道をまちがえたか。青年期の定石、懷疑心が頭をもたげる。毎晩のように先生を次々訪ねて道を問う。つまり夜学の個人教育を受けたわけである。

戦争時代は国家が人間を管理し、人格と人権を無視した。戦後の今は人権の自由が保証された。何を考え何をしてもいい、ただし、自由とは勝手気ままをいうのではない。人間社会にあつて勝手な行為は自滅あるのみ。自由とは極めてきびしい世界、自から自己を律し管理しなければならぬからだ。他に責任を転化しないのが「自己管理」というものだ。

自由の時代に入ったのだが、今にきつと社会やイデオロギーや宗教の管理がはじまるだろう。だが真の自由とは、いかなる他からも管理されないことなのだ。そして、人間の営みでもっとも幸せなことは、ものを育て造ること、「創造」なのだ。そのためにこそ知識、学問、体験が必要なのである。

懷疑心が晴れた。目のウロコが落ちる思いだった。そしてひらめいたのである。「よし、戦後のこの人心の混沌を耕して「本」をつくらう。みな本に飢えていた。早朝から書店に行列して新刊本を買った時代である。出版がやりたい。

先生たちはみな本を書いていたので出版社にコネがあつた。掃除でもお茶汲みでもいい、紹介してほしいと頼んだ。

願いがかなつて面接があつた。「なぜ出版社に入りたいのかね」「はい、出版をやりたいんですが、よくわかりません。

二、三カ月でいいですから教えてください。月給はいりませんから」「何っ、一、二、三カ月で、ワッハッハッハッ」こっちは真剣だったから、なぜ大笑いされたかわからなかった。



終戦から五十年、けっして短い歳月ではないのだが、あの暗く長いトンネルを出たあとの東京時代は、今にして思えば、なぜか夢まぼろしのごときタイムマシーンである。

出版社の白水社に丁稚奉公したのだが、仕事がわかるほど出版がわからなくなる、無謀にもその四年後に独立して出版の二玄社を創業した。二十四歳だった。父が田舎の田畑を担保にして大枚二十万円を工面してくれたのだった。こわいもの知らずだった。トントン拍子のすべり出しだったが、破産寸前のピンチもあった。父の助太刀と丹波っ子の意地がなかったら、とつくにつぶれていたと思う。

かつて小学生は小説を読むことを禁じられていたのだが、押し入れの中、隙間の光で読みふけた小説があった。菊池寛や吉川英治の長篇だった。一部ルビもふられていたが、知らない漢字はとばしても意味はわかった。高村光太郎の智恵子抄などは涙が止まらず、何度もうり返し読んだものだ。

昭和十六年、篠山出身の下中弥三郎さんが興した出版社の平凡社から柏原中学校に大量の本が寄贈されて開放された。

私と本とのきずなはそこにはじまっていたようだ。

学校が全寮制だったおかげで、多くの学者先生の知遇を得た。文人・墨客への人脈にもめぐまれた。

出版を始めた昭和二十八年ごろから三十年代にかけては、音に聞こえた文士はほとんどみな健在だった。志賀直哉、谷崎潤一郎、高村光太郎、永井荷風、吉川英治、会津八一、武者小路実篤、川端康成、……。仏文学者、哲学者、美術史家、歌人・俳人、書家、画家、工芸家、茶道・華道の家元など、若さにまかせて原稿依頼に訪ねまわったものである。

今はみな歴史上の人物となったが、世に抜き出た人物は、会ってみるとどこにもいそうな好々爺だが、やはりどこかがちがう。人間の大きさが深さがケタちがいなのだ。それにみな逆境育ち。老いてなお向学心に燃えるハングリー精神の固まりなのだ。だからみな青年のような若さを秘めている。



出版社は、印刷製本を専門会社に依頼し、販売は全国の書店に委託する。リスクはすべて出版社にあるので、売れなければ大損もする。本の企画内容が企業の成否を決定する。

中国や日本の書画が奥深い精神芸術だとして、書道図書を中心に伝統芸術の出版を手がけた。哲学書や社会科学書も出した。車が好きだったので自動車の月刊雑誌も出版した。

最初は一人でスタートしたのだが、いずれ人もふえ、会社も形を成して、今は百三十名の中堅出版社、日本の文化を背

負った気で、取材にアジア・欧米を駆けめぐっている。

私の出版業もいつの間にか四十年を過ぎた。どっちを見て
も先輩ばかりだったが、今や長老の仲間入り。昨年はとうとう出版協会の理事長にハメられた。やりたい人がいるのにと逃げ回ったのがつかまった。たちまち文部省国語審議会・著作権審議会委員、国際出版社連合副会長（アジア圏担当）、などいもづる式に十いくつの役がついてきた。政界・官僚との交渉ごと、海外交流もひっきりなしだ。おまけに業界の冠婚葬祭が加わる。体がいくつあっても足りない。

こんな激務が何とかこなせるのも、丹波育ちの体力あればこそと思う。古里には九十二歳の母が、今も達者で毎朝畑仕事に余念がない。お母ちゃんに負けとられしまへんがな。

東京に出てからも、さまざまなき師、よき先輩、よき友にめぐまれた私は、果報者である。来しかたの軌跡は細い一本の線なのだが、それは点と点との、人と偶然とのタイムリーな関係の、さわどい連続である。そのときその場を思い出すと、人生の岐路は無数にあった。運がよかったといえればそれまでだが、人生はそんなエスカレーターのようなものではない。さまざまな岐路に立つとき、いつもよきナビゲーターがいたのだ。自らも謙虚に考えぬいたのだ。人生は、よき師よき友を訪ね求める旅に似ている。足と汗とで探さなければやってはこない。運もチャンスもまたしかりなのである。

はるかなりわが鴨庄村

丸 川 健三郎（市島町）

（一）花の村

「ふたりのお里はあの山を越えてあなたの花の村」

（童謡『叱られて』より）

もうかれこれ三十年以上も村には帰っていないが、折にふれ鴨庄村（現在は市島町の一部）を思い出す。当時を思い返せば、ひとつひとつの思い出が貴重で、記録にとどめておきたい気になる。たいていはささやかな個人的思い出にすぎないのだけれど、当時の村の姿を少しは写すことができるかも知れないと考えて、以下の文を書いた。

戦争も終わりに近づいた昭和二十年五月、私の小学三年のときに、私たち一家は徳島市からの疎開で丹波へやって来た。連絡船や鉄道を乗り継いでの長旅を経て、福知山線市島駅で汽車を降りた。駅を出てしばらく歩くと鴨庄村へとつながる長い川土手道に出る。父は「あの山の向こうが鴨庄村だ」と言ったが、そのむこうに村があるとも思えなかった。しかし、川土手道を過ぎると、山で遮られると見えた道も川も山と山との隘路を抜けてさらに続いており、意外にも明るく広がっ

た村にでた。それが鴨庄村だった。家ごとに立派な庭があり、植木があり、花が咲いているのが印象的だった。私たち一家は休業中の造り酒屋の事務所を仮の住まいとして、村での生活をはじめた。

その頃、父は飛行機用のベアリングを作る会社に勤めていた。柏原町にこの工場の分工場、つまり疎開先が出来て父はその工場長になっていたが、その工場の縁で鴨庄村に疎開することになったのである。わが家の疎開の後、六月には徳島市は空襲で全滅しているので、きわどいタイミンクの疎開だったことになる。村へは私たちの後からも多くの疎開者がやってきており、同年八月の終戦時には一学年の生徒約六十名のうち十名ほどが疎開の子どもだった。

さすがに鴨庄村には戦争の影はうすかったが、全校生徒による荒れ地の開墾などがしばしばあって、疎開者の子どもにはつらい日々だった。さらに、終戦に続く一、二年の食料事情もひどいものだった。しかし、結局は世の中も落ちつき、私も方言しかしゃべれない村の子どもになった。

(2) わらべ歌

徳島では私の周囲にわらべ歌と言えるようなものはなかったが、鴨庄ではいくつも覚えた。歌ったのは低学年の間だけだったが、今でも不思議にすらすらと思ひ出せる。つぎ

のものは遠足などの帰り道でよく歌ったものである。隣村などからの帰路、学校に帰り着くまえに自分の家の近くを通れば、そこでさっさと「さようなら」をして帰宅してしまうのだが、このようにして誰かが隊列から離れると、その他の子どもたちが急に元気をとりもどして、声をそろえて歌い出す。「さいなら三角またきて四角、四角はお豆腐、お豆腐は白い、白いはうさぎ、うさぎははやい、はやいは電報、電報はえらい、えらいは病氣、病氣はうつる、うつるは鏡、鏡はわれる、われら少年男児」

この歌の同類は全国あちこちにあるらしい。つぎのはどうだろうか。

「つばめ、めじろ、ロシヤ、やばんこく、クロパツトキン、きんのたま、負けて逃げるはチャンチャンボー、棒でなぐるは犬殺し、シベリヤ鉄道ながけれど、土瓶の口からはきだせば、バルチック艦隊全滅、つばめ、めじろ、ロシヤ、……」

この歌は「しりとりの歌」になっており、無限に続くので長い道のりでもあきることがない。子どもころは、クロパツトキンが分からないままに歌っていたが、最近たまたま日露戦争の頃のロシヤの將軍であることがわかって、長年のものもやが氷解した。これは昔の歌だと思っていたが、これを歌っていた昭和二十年代は日露戦争から数えて四十年ほどで、戦後五十年よりは短かった。

これらはどちらかと言うと男の子の歌だが、つぎのは鞠つき歌だから、女の子のものである。これをいつどのようにして覚えたのかさっぱり記憶にないが、歌声だけは耳の奥から鮮明に聞こえてくる。

「一^{もんぢ}奴のいすけさん、一の字がきらいで、一万一千一百億いっといっといつとまのお蔵に納めて二^{ふた}奴に渡した。二^{ふた}奴のいすけさん、二の字がきらいで、……」
つぎのも鞠つき歌である。

「あのね、おしよさんがね、くらいおんどでね、なもしなもし、あらおかしわね、いちりとらんらん、らつきよ食ってしっし、しんがらもちききや、きやべつでほい」

後半は意味不明だが、この歌詞も記憶にはつきりしており、間違いがない。つぎのはかごめ遊びの歌である。

「ぼんさんぼんさんどこ行くの、あの山越えてすず買いに、わたしも一緒につれてんか、おまえら行ったらじゃまになる、けんけんぼうずけんぼうず、うしろの正面だあれ」

かごめ遊びの歌は、全国に流布しているらしい。私の妻は千葉県出身だが鴨庄のとかなりよく似たかごめ歌を知っている。鴨庄村のような孤立しているように見える村にも子どもの文化が外から流れ込んで来るようである。

(3) 天神講など

鴨庄にきて間もなくのころ、近所の人から「にってんさん（日天様）のお供」のことを教えてもらった。これはお彼岸の日に子どもたちが自主的に実施する遠足のことである。まず、朝早く起きて東の方へどんどん歩く。そして日の出を見て、太陽が東から西へと移動するのに合わせて、今度は西に向かってどんどん歩く。もっとも、だいたいそんなに早起きできないので、東のほうへ適當なところまで行って、そこでお弁当を食べて帰ってくることになる。鴨庄では村の西側が村への入り口になっており、他の方角は、東も北も南も、すべて山でさえぎられている。村の中心には、村役場、精米所、交番などがあり、さらに少し行けば鴨庄小学校があった。小学校を過ぎれば村の東半分となるが、その奥のほうには大きな貯水池、みけ（神池）の池や、山上のお寺、妙高山神池寺（これについては『山ざる』21号、荻野武氏の文に詳しい）や、東はずれの部落「戸平（とべら）」に通じるトンネルなどがあつた。これらはいずれも、村の西側に住む小学生にとつては遠足に値する距離にあつた。

「天神講」は、鴨庄ではよく知られた子どもたちの行事である。夏休みや冬休みに同じ部落の子どもたちが公会堂に集まって一緒に遊び、食事をする。天神様（学問の神様）にやかろうというのが名前の由来だろうか。鴨庄村は十個程の

部落に分かれているので、それぞれの部落で少しずつやり方に違いがあるかもしれないが、私のいた部落（端部落）では小学一年から中学三年まで、男子も女子も全員が集まる習慣だった。小さな部落だったから、男女別にする人数が少なすぎて遊びが成立しなかったためだろう。部落の戸数は計十九軒で、集まる子どもはおよそ二十名だった。ちなみに、このうち疎開者は四軒とかなりの高率で、私の同級生六名のうち四名までが疎開者だった。

天神講に関しては親は口も手も出さないのが本来のきまりで、いちばん年かさの男の子が責任者になる。天神講の準備には、まず、子どもの数だけのメモ用紙をつくり、それにそれぞれが持つてくるべきものを書きつける。たとえば、米一合、大根一本、里芋一個といった具合である。公会堂には、かまどが二個とそれぞれに大鍋があった。集まったすべてのお米を一つの釜で炊き、もう一つの鍋で集まったすべての野菜を煮た。両方が出来あがったところで、ごはんを煮物をまぜあわす。上級生はこの料理を作ったり、けんかして泣きだしたりする下級生を上手に遊ばせたり、出来上がったご飯を茶碗に盛りつけたりで大変だった。しかし、一日がおわり、薄暗くなったところで下級生を家に帰すと、あとは上級生だけの遊び時間となる。公会堂には囲炉裏があり、そのまわりを集まるか、冬だとかたつに集まり、トランプで遊ぶのが普

通だった。そのうちに夜が更けて、心配した親が連れ戻しに来る。子どもは抵抗するが結局一人去り二人去りで、トランプ遊びができないほどに人数が減ると天神講はおしまになる。

部落の子どもたちは小さいながら田圃を一枚所有しており、田植えの季節にはそれぞれが稲の苗を一束二束と持ち寄って田植えをした。田の鍬起こしなど、子どもの手に残るところもあったけれど、多少の親の助けを借りつつ、天神講一回分以上の米の収穫を得ていた。そのほか、天神講の資金稼ぎのための「わらび採り」や、苗代の「めいらん取り」（稲の害虫の卵の採集除去）など、部落の子どもたちにはいろいろ共同作業があった。

（４）野ゆき山ゆき

鴨庄で最初に住んだ家は借家だったけれど、一年半ほど過ぎたところで家を購入して、引っ越した。たまたま村を出て行く人がいて、そのあとを譲ってもらったらしい。古い農家だったけれど、家屋敷のほか三反歩弱の田畑までついており、わが家はにわかには農業もやることになった。その頃、父は村で興した瓦工場で働いていた。ペーリング工場は終戦とともに早々につぶれてしまっていたが、その後には始まった村のいくつかの新規事業にかかわったものの、そちらもうまくいか

なかった様子である。瓦工場とて順調ではなかったもので、わが家の経済も容易でない状況のようだった。しかし、疎開者としてはわが家はまだ恵まれていたほうで、多くの家庭では戦後数年にわたって経済的困難が続いていたようである。

新たに住むことになった端（はし）部落は村の西南側にあって、山際の小さな部落だった。わが家は山裾から続く四枚の段々畑の下にあった。山近くの田は水が冷たいせいで稲の出来が悪く、そのうえ、ときどき毒蛇（まむし）が出てきた。

しかし、山に近いと、山からの恩恵もいろいろ受けることになる。子どもたちにとっては木の実なども恩恵のひとつで、

栗、あけび、せんごう（野生の柿）、木いちご、などが採れた。少し変わった木の実として近くの山に「けんぼなし」というのがあった。これはほんとうは実ではなく、枝というべきものだが、けしつぶほどの実の根元の枝が数センチほどにわたってふくらんで、そこが甘くなる。実と一緒に地面に落ちた枝を拾ってきて、それをかまどの上などにつるしておく、と、わずかな渋さ、煙くささに、強い甘さがミックスされて、えも言われぬ味わいになった。言うまでもないことだが、このような山の幸は無やみに山を探しまわってもそれほど見つかるものではない。ため込んだ知識、人には言わない秘密の知識が財産なのである。

春のわらび採りや、正月前の裏白採りにはずっと遠くの山

まで出かけていった。部落の奥の山をどんどん登って行くと尾根道に出て、なおもどんどん行くと、ついに隣村の奥山、「日ヶ奥（ひがおく）」に達する。ここは深山幽谷の趣のあるところで、深い緑の中に小さな滝があつて、きれいなせせらぎにつながっていた。さらに下ればせせらぎは貯水池にそそいでいた。貯水池の堤防からはある程度の見晴らしがあるにもかかわらず、いつ行っても人影ひとつ見かけなかった。ここでは、わらびでもふきでも裏白でも沢山とれた。

（５）あとがき

私の中学卒業は昭和二十七年三月だが、その頃は高校への進学率がそれほど高くなかったので、鴨庄の多くの友だちとは中学校の卒業式がお別れの日になった。同じ部落の同級生もそれぞれ別の進路をたどることになり、私だけが普通高校へ進学した。その頃、父は大阪のほうに新しい勤め先を見つけており、わが家の経済は好転しはじめていたが、私の中学卒業はちょうどそのような時期にあたっていたので好運だった。

はじめに書いたように、鴨庄村へは長年すっかり無沙汰している。大学の上級生になってからはあまり村へ帰らなくなっていたが、そのうちに親が引越してしまい、村へ帰る理由もなくなってしまった。その後、村は大きく変わったに

違いない。町村合併で鴨庄村の名称そのものがなくなってしまうが、変化はそれだけではないだろう。最近の地図で見ると、驚いたことに村を高速道路が貫通している。しかもこの道路は丁度わが家のあった辺りの山際を走っている。兎のいた「かの山」はどうなっただろうか。村も否応なく時代とともに変化しているようである。

母の思い出

梶原 矢寸子（山南町）

昭和三十八年二月のことでした。主人が大阪陸運局（現近畿運輸局）自動車部長を拝命した直後で、私はまだ板橋区内の国鉄宿舎に住んでいました。

母危篤の知らせに「あの元氣だった母がどうして急に」と祈るような気持でその日の夜行列車に乗りました。中二の長女、四歳の長男、二歳の次女を連れ、満員列車のデッキで揺られて大阪までたしか十一時間。谷川駅に着くのもどこかし、粉雪の舞う中を上久下村阿草へと急ぎました。

母の青ざめた顔を眺めながら「やす子が帰ったでえ」と必死に呼びかけると、一瞬涙が光りかすかに笑をうかべたよう

に思いました。意識がないと思っていた周囲の者は皆驚きました。他家で倒れた母の唯一残した言葉は「いにたい」でした。唇の動きでかすかに読みとれる声でした。その夜、父と隣保の方が雨戸に寝かせ母を氣遣いながら静かに我家まで運びました。母がそれを自覚できていたかどうかは判りませんが、倒れてから十日目、誰にも別れを告げることなく眠ったように息を引き取りました。享年五十六才でした。

私は主人の大阪勤務に伴って、十年ぶりに郷里に近い芦屋に住むことになっていました。若くして結婚した私は、子供が生まれるたびに母に手伝いにきてもらい、さあやっとこれから親孝行ができると喜んでいた矢先の母の死でした。突然の母の死がどれほど残念で悔しかったことか言葉では言い表わせません。

昔、父は檜皮屋根の請負業をしていて、神社から神社へと留守がちな生活でした。母は助産婦をしながら家を守り、私たち七人の子供を育てあげました。無口で頑張りやで芯が強く、それでいて本当に心の優しい人でした。主人が昭和五十五年の参議院議員に立候補したとき、全候補者の『私の尊敬する人』が新聞に掲載されましたが、主人は「ともに忍耐の固まりのような母と亡くなった義母」と書いていました。

母は手先が器用で、何でも作っていました。私たち姉妹のセーターやハーフコートはみな母の編んだものでした。長靴

下まで編み通学に履いていました。小学生の時セルの着物を解いてジャンパースカートとボレロを作り、モスリンで縫ったブラウスは胸元にリボンを結び、当時としてはとてもモダンなものでした。『主婦の友』の付録等を参考にして作っていました。私が京都の女学校へ行くタメの洋服は、福知山で布を買ってきて縫ってくれたものでした。グレイの地にエンジとグリーンの細かい縞で、襟とベルトは和服の残り布でできていました。それに袖を通した時の嬉しかったのを昨日のことのように想い出します。リボン刺繍のおべんとう袋や、クリーム色の布のバラソル、家族みな帽子入れまで作り、それは、大きな筒型の布を上下と中二段位に堅い紙で仕切り、外側の布が開くようになっていてファスナーで開閉できるようになっていました。部屋の隅に下げておいて、下に置いてある長持に上って出し入れしていました。

ある夜ふと目醒めると、母はうす暗い電燈の下で当時としては珍しい機械編で編物をしていました。足が四本あって上に沢山の鉤針が並び、糸をかけて矢と呼ぶ平らかな巾二裡位の長い棒を通して編んでいくものでした。母は何時に寝るのだろうか、私は子供心に不思議に思ったものです。助産婦をしながら、さぞ多忙な毎日であつたらうと、今つくづく思い返されます。母自身の着物も手作りのがありました。縁側で、布に秋草模様などの型紙を置き、その上から羽毛で染料を塗っ

て柄を染めていました。その着物を着ていた母を想い出しながら、昔の人はよく働き、何でも作り、我慢強く常に笑顔を忘れずに黙々と働いていたと感心させられます。幼い頃、母に「お花生けとくれ」と頼むと、母はお花畠から花を切ってきてよく生けてくれたものでした。花が生けられ水盤が床の間に置かれると、私は嬉しくて何度も覗きに行つたものでした。あの頃よく母は「鎌倉」や「青葉茂れる桜井の……」を唄っていました。母が「七里が浜の磯づたい……」と唄い出すと、いつの間にか子供達も一緒に唄っていてとても賑やかでした。まだ祖母も叔母もおり、明るい大家族でした。

また母は心の傷みのよく判る人でもありました。私が結婚して間もなく主人が実家のことで悩みながら篠山から雨の中を川代溪谷を歩いて、やつとのことで阿草へ辿り着いたことがありました。心身共に疲れはてて、土間に座り込んだ主人を母は何も言わずに迎え、黙って、泥だらけの足を洗ってくれたそうです。「あの時の顔は、慈愛に満ち、共に悲しんでくれた顔だった。お義母さんはほんとうに立派な人やったなあ」と懐かしんで子供達にも話しております。私は母の生きた年齢を十年余り越えましたが、今だに母が人生の目標であり、母を師と敬愛している今日此の頃です。

丹波という言葉

増井 攻（山南町）

人生五十年がすぎた。昭和二十年生まれだから昭和時代は計算が楽だった。平成になってからはややこしい。明治生まれの父の年齢になると更にややこしい。では西暦という自分分の生まれた年がすぐには出てこない。家族のはなおさらで、本人に聞くのが手っとり早くなる。ややこしくなったものだ。

さて、丹波という言葉である。いつごろからかは知らないが、ずーっと昔からある言葉である。丹とは朱色を意味する。頭が朱色の鶴を丹頂鶴と言っているが、その丹である。と言うことは、朱色が波のようになってる地方と言うことになる。モミジとかが山一面に燃えるように紅葉しているところからきたものだろうか。いやいやどうもそうでないらしい。タンとは谷という意味らしい。谷が幾重にも波のように連なっている地方であるということが正しいようである。だから丹波は谷波が正しい書き方なんだろう。同じように谷が幾重にもある丹波に続くのが丹後である。京都から遠のくので後がつく。「なるほどな！」と尤もらしい解釈である。信じたく

なる人もいるはず。谷をタンと呼びタンの当て字が丹ということである。谷をタンと呼ぶのは大陸の言い方である。丹波の命名者は大陸から来た同文同種の人達である。当時の学識経験者が命名者となる。その昔、大陸文化を輸入していた頃の話である。東京、大阪よりもずーっと歴史のある地名である。そのころ我が故郷の丹波は、大陸と都や摂津との文化輸入道路のメインストリートであったのだ。大陸から文化人が往来し、きつと華やかであったことと思う。現在の丹波人を見ると優秀な人が一杯いる。これは彼らの落とし種も随分あったからではないだろうか（これは信じないほうがいい）。

話は変わるが、出身地を聞かれたとき、まず「兵庫県です」と応える。そしてその次に「丹波です」と言う。大体の人はこれで通じる。「氷上郡です」と言っても「どの辺りですか」と返ってくるのがいいところ。丹波と言えば一発で済むから楽である。丹波は有名なんです。氷上郡を丹波郡に変更してもらいたいもんだ。「コウリカミ」は冷たい印象を与える。

「タンバ」は暖かく感じる。

宴会で歌うのは「丹波ア笹山ア……」である。がなりだすと皆は手拍子で合わせてくれて場は盛り上がる。御神酒もすすむものである。今ではアカンシヨ節は、私のテーマソングになっている。時には他人に強要することもある。普及活動である。いろんな会社が集まった恒例のパーティの席で某社

長に歌ってもらったこともある。残念であるがカラオケに入っているのがごく稀である。

丹波の風景は、日本国中で似たところはない。久しぶりに帰っても、「オッ帰ってきた」と感じる。丹波に住んでいたころと比べると町々は随分発展したが、山々は昔と変わっていない。田舎を出てからのほうが長い年月となったが、母の懷に戻った気がして何故か落ち着くところがある。たまに帰るからいいのかもしれないが、定年になったら余生は丹波に帰って送りたいものだ。丹波の語源は谷波でなく、真つ赤に燃える幾重にも連なる山々を象徴した丹波がやっぱりいいと思う。そのほうが情緒があり、望郷にかられ、子供たちにもカッコよく説明できる。

柏原中学校時代の思い出

東 郷

茂 (加西市)

私は中学五年間寄宿舎生活でした。寄宿舎には色々楽しい行事がありました。舎生は百四、五十人いました。夏のホタル狩、秋の松茸狩、年一回舎生全体の茶話会が催され有志が色々隠し芸を披露します。これらは楽しい行事でした。

一年に一、二回夜中に非常招集のラッパが鳴らされ真暗やみの中で服を着てゲートルを巻いて校庭へ出て整列するのですが、一年生は慣れないので変てこな面白い姿で出て来る者がありました。上衣を足にはいてその上にゲートルを巻きズボンを手に通して出てきたのです。校庭で服装検査、平素の行いの悪い者は呼び出され体罰を加えられる。又学期に一回ぐらい風紀部会と称して三年生以下を娛樂室に集めて日ごろ行いの悪い所を取り上げて体罰を加えることがありました。このような下級生いじめが時々ありましたが私達が五年生の時こんな野蛮な行為は一切やめようと申し合いました。

学校生活でも色々な思い出があります。入学すると間もなく篠山の連隊の軍旗祭に参加のため柏原、篠山間往復約十キロの道程を歩いたのですが、まだ学生服も出来ず着物に袴、靴ばきでした。一年生の中には翌日は満足に歩けないで便所へも這って行く者もありました。中学時代には一日十里位の行軍はよくありました。

冬の朝雪が積もって一面の銀世界、登校して第一時間目に教室へ入って間もなく非常招集のラッパが鳴り勉強道具をしまつて教室を飛び出し、先に出た者から体操の先生を先頭にどんどん駆けて町はずれで止まり整列し直し「今日はこれから一日雪中行軍を行う」という体操の先生の号令でどんな行軍、一日約十里以上歩きました。道端の雪で喉を潤しながら

らもくもくと歩いた。初めの間は話し声も元気だったが終り頃には声もなくなつた。

秋の軍事演習の行軍など一日十里位はよく歩かされ足も鍛えられました。

三月十日の陸軍記念日のマラソンもなつかしい行事でした。

四年生の時だったか英語の教科書に *The last rose of summer* という詩があつて、米国から来ておられたスコットという小柄で快活な先生が自分でフルートを吹いてその歌を教えて下さった。そのフルートの奇麗なソフトな音色が今も忘れず記憶に残っています。詩の曲は日本の「庭の千草」という曲でした。

故郷の思い出

須 原 逸 郎 (市島町)

私は昨年八十歳をむかえて当会から祝寿の荣誉に浴し誠に感激致しております。ありがとうございました。私は市島町の下竹田才田部落の出身です。才田部落は京都府と境を接する塩津峠の麓にあつて、戸数二十数戸の小さな集落です。私はここで生まれ育ちました。そして柏原中学校を卒業する十

八歳になる迄の間ここで生活してきました。小学校へはこの小さな部落でも同級生が私のほか男性二人、女性が三人もいましたが、私と仲よしであつた二人の男の子はその後応召して共に戦死してしまいました。柏原中学へは竹田からは私と荻野忠夫君との二人だけの入学になりましたが、この荻野君とも中学校卒業後あまり会うことなく彼も戦死してしまいました。

このように幼な友達が次々と亡くなって本当に悲しく残念なことになりました。これは戦争の渦中であつた私達世代の宿命だつたと思っています。ここに心より物故された諸兄のご冥福をお祈り申し上げます。

昭和二十年八月十五日の終戦は万感の思いでむかえました。それから時代はどんどんと過ぎ戦後も終わり、国内社会にはいろいろな混乱もありましたがそれも何とか落ちついてきて、日本は所得倍増をモットーとして経済的發展を重ね遂に諸外国から経済大国として注目されるまでに大きく繁栄してきました。その過程では国民の一人一人が無我夢中でただただ働いて実績をつくってきたのが実情だろうと思っています。私も例にもれず複雑化した社会の荒波にもまれながら、転職や転勤を重ねて国内の各地を移動しつづ働いてきました。幸い健康と幸運に恵まれたのでようやく今日横浜に落ち着いて余生を送ることが出来るようになりました。

このように私は大正、昭和、平成の各時代戦前戦後を通じて日本国内の各地で数年ずつ生活を送ってきたわけですが、何と言っても幼少時代にすごした故郷での思い出はいつまでもたつても忘れることはできません。私はごく幼い時は近所の幼な友達と一緒に家の近くの小川で小魚すくいに興じたり、近くの林へかぶと虫をとりにつたり、又シーズンになると家族と一緒に蜜狩りに出かけたりして、ごく自然に田舎の環境になじんでいました。やや長ずると共に兄達や先輩に連れられて家からかなり遠方にあたる、村人が大川と称える竹田川まで出むきそこが私達の新しい楽しみ場となりました。そこでは魚取りも本格的になり横に長いよせ網を川の一方から数人がかりで引いてきて、鯉をおいつめる勇壮な鯉とりや、しっかりした手ごたえのあるかけ針による鮎とりなどに全く夢中になり、休みの日など朝から晩まで川の中で過ごすことも屢々でした。又時には兄と二人で高谷山をはじめ周囲の山野を跋涉し、山頂から美しい故郷の田園風景を眺めながら飯盒炊飯で舌鼓をうったりしました。

秋になると学校から帰った午後、近所の松茸山や雑木林へきのこ狩りによく出かけました。当時は今日と違ってきのこが豊富で松茸やしめじがよきによきとかたまって群生している所などを見つけると体中がわくわくする程嬉しく非常に楽しい思い出が沢山ありました。又冬降雪をみるようになる

と、手細工の竹スキーで付近の雪の野原で滑走する楽しみがありましたし、お正月がくると毎晩仲よしのメンバーと蜜柑を喰べながらカルタ取りやトランプ遊びをした思い出は懐かしく本当に楽しみが一杯でした。

中学時代では学校行事での兎狩りや寒稽古、遠足等一つ一つが今でも印象的で楽しかったし、特に夏休みになって五人の仲よしメンバーで学校から天幕を借りうけ天の橋立や網野竹野方面へ自転車による無銭旅行に行きましたが、この時天の橋立に近接する成相山上での記念写真は六十五年を経過した現在でも五人の紅顔の美少年の童顔がほほえましくこの旅行をいつまでも忘れられない最高の傑作として居ります。

最近国内では旅行ブームがわきおこり国内各地の観光地をはじめ世界の到る処へ日本人が押しかけるようになりました。私は今でも時々内外に旅行することがありますが、幼少の頃或いは少年時代に故郷で私が体験したあまりお金を使わない素朴な様々な楽しみ方は今日ではたとえお金を使ったとしても得にくい貴重な経験であることがわかりました。そんなことからして自分が本当に丹波氷上の地で生まれ育って幼少時代を過ごした幸せをしみじみ感じるこの頃です。

我が故郷「新井村北山」

能 勢

徹（柏原町）

昭和二十年八月一日、私は新井村北山に生まれた。そして、柏原高校を卒業して社会に出るまでこの新井村北山で過ごした。しかし、今はこの故郷には私の身内はだれも住んでいない。そして、新井村という地名も私が子供のころ柏原町に吸収合併されて私の脳裏に残っている地名に過ぎない。しかし、小学校の六年間を過ごしたのは、「新井小学校」なので柏原町よりも何となくこの「新井村」という地名に郷愁を感じる。

数年前、数十年振りに新井村北山を訪れる機会があった。先ず、懐かしい小学校に足を運んだ。当時の建物としては体育館のみが残っていた。当時、私たちの校舎は木造であつて校舎の脇に数箇所、「つつぱり」がしてあつた。柏原の崇広小学校の生徒に「つつぱり学校、つつぱり学校」とよくからかわれ、子供心に悔しい思いをしたことを今も覚えている。運動場も昔のままであつたが、極端に狭く感じられた。こんなに狭いところで、運動会をしていたのが不思議に思えたが、腰を低くして子供のころの視線の高さで運動場を再度、見直してみると何となく広く感じられた。狭く感じたのは、運動

場のみでなく、我が家のあつた北山の中央を走る道路もそうであつた。こんなに、狭いところでキャッチボールをしたり、夕方になれば竹ぼうきで蚊ととりトンボを追っかけ回していたのかと我が目を疑つたものである。

よく野球をした稲荷神社にも足を運んでみた。ここだけは、子供のころと全く同じ光景が私をあたたく迎えてくれた。竹のバットでボールを打って、よく隣の竹やぶにボールを拾いに入つたものだ。お祭りの時には、急な神社の石段を沢山の大人が「みこし」を担いでそり、そりと降りたものだ。大新屋や田路の「みこし」は「太鼓」と言つて、子供が顔におしろいを塗り、きれいな着物を着て「みこし」に乗り込み、太鼓をたたきながら村中を練り歩いたものだ。しかし、北山の「みこし」は、ただ担ぐだけの「みこし」であつて、乗り込むことができなかったもので、他の村の友達がうらやましく、北山に生まれたことを子供心に悔しい思いをしたものだ。北山の地名のとおり、村の北側には小さな山があつて、山の頂上には、サイレンが設置してあつて正午になると、「ウーウー」と新井村全体に響きわたつたものだ。北山が新井村の中心にあつたので、ここに役場や農協が設置され、サイレンも設置されたのであろう。春分の日や秋分の日には、この裏山に「お日さん迎え」といって、親に弁当を作ってもらい、一日中、山の中で「鞍馬天狗」や「新選組」になつてチャン

バラごっこをしたものである。そして、カラスの鳴き声を聞きながら家路に着いたものである。

故郷には、このような思い出の山があれば、また、川もあった。夏になると、水の量が減った川をせき止めて、「かいどり」といつてバケツで水をかい出して、ウナギやナマズが穴の中から出て来たところを素手で捕まえたものだ。また、大雨の降った後には、川の中に網を沈めて、「待ち受け」をして「コッソ」と魚が網の中に入る感触で網をすくい上げて魚を取ったことも子供のころの楽しい思い出の一つである。

また、当時は田んぼの多かった村では、夏の夕方になるとあちこちに、「誘蛾灯」が設置され、青白い光が田んぼに反射して、美しかったことを覚えている。田植えシーズンには、「めいらん取り」といつて苗代に入って、棒で苗をなでながら「めいらん」を探し歩いた。また、秋には「イナゴ取り」といつて、布袋の先端に竹筒を取り付けて捕まえたイナゴをその竹筒の入り口から押し込んで、友達と袋の大きさを競い合ったものである。

走馬灯の如く、故郷の思い出は次から次と浮かんてくる。今年の八月には、私も満五十歳になるが、このような故郷の思い出が、まるで昨日の出来事のように新鮮に脳裏に浮かんてくるのは、私一人ではあるまい。人にはそれぞれの歴史がある。この歴史をバネに今日を、そして明日を力強く生き抜

いている。「故郷は遠きにありて思うもの、ありがたきかな」である。

谷間に轟く「しし脅し」おど

芦 田 昌 保（青垣町）

私のふるさと青垣町は、昭和二十年、七歳のとき大阪から疎開してきてから社会人となりこの地を後にするまでの十数年間、自然の懷の中で暖かく過ごすことができた思い出の地である。ここ十年近く、住む人のいないわが家を訪ねる機会もなく、ふるさととは正に遠くにありて思う地となった。

わが家は、僅かな面積の田畑を耕していた。父親が勤務の関係でほとんど家にいなかったため、われわれ兄弟三人が母親の農作業を手伝うことが当然の成り行きであった。

とはいっても、友達と遊びたい年頃、屁理屈をつけて手伝いから逃れることばかりを考えていた。

夏休みの暑い午後、さつまいも畑での草取りの最中に夕立がきたので、「早く帰らないと雨が止むよ」と、急いで土砂降りの中をずぶ濡れになりながら家にたどり着いた。雨宿りをして夕立をやり過ごせばいいものを、雨が上がった後は、

畑に戻らないで、遊びにうつつを抜かすことが度々あった。

物干竿が届きそうな山と山との狭い谷間の奥に、棚状の田んぼがあり、稲の収穫時期になると、いのししが山から下りてきて稲穂を食い荒らしていた。

このため、田んぼの周囲をトタン板で囲っていのししの侵入を防いだり、田んぼの周りを裸電線で張り廻らし、いのししが電線に触れると電流のショックで撃退する等の方法が取られていた。しかしながら、これらの方法は、地面とトタン板又は電線との間にいのししがすり抜ける隙間があれば、いのししはその隙間から田んぼに出入りするので万全の策ではなかった。

そこで考えられたのは、孟宗竹を利用した「しし脅し」である。肉厚の孟宗竹の根本の部分を一メートル位の長さに切り取り、一番根本の節を残して筒内のすべての節を抜き取り、円筒状の竹筒を作る。さらに、残した節の上部五センチ位のところに直径一センチ位の穴を一か所空ける。

次に、準備するものは、カーバイトの塊、水を入れたやかん及びマッチである。このしし脅しは、孟宗竹の上部からじやがいも大のカーバイトの塊を込め、筒先の上部をやや上向きに据え、根本の節近くに空けた穴から水を少し注ぎ込む。カーバイトと水とが激しく反応してアセチレンガスが発生する。アセチレンガスが筒内に充満するのを待って、孟宗竹の先端

にマッチで点火すると、アセチレンガスが一気に炎に化けるとともに『ドカーン』という轟音が響きわたる。

いのししは、このとてつもない轟音に驚いて、田んぼには近寄らなくなるといふものである。

近隣の田んぼの耕作者が、一晚交代で夜の八時及び十二時頃にしし脅しを仕掛けていた。

しし脅しの当番となったある夜、道具一式の他に、灯り用のカンテラを手に、谷間の田んぼに向かった。

途中近道をして、田んぼのあぜ道にさしかかると、あぜ道のすぐ下でガサガサと変な音がした。月明かりに見ると、なんといのししが稲穂を食い荒らしているではないか。生まれて初めて見る生きたいのししに驚いたのなんのって、慌ててあぜ道を引き返し、震える手でカーバイトを込め、点火、「ブスッ」と小さな音。急いだためか、ガスが足りなかった。今度こそはとガスが充満するのを待って点火。『ドカーン』と轟音一発。

びっくり仰天して山に帰るいのししの逃げ足の早いこと早いこと。大役を果たしてほっとしたものである。

物資が不足し、食料にも事欠く貧しい時代ではあったが、自然に恵まれた心豊かな思い出が、いまだに鮮明によみがえってくる。

「金剛石も磨かずば……」

池田 忍（山南町）

「あしたなあ、デーデーチイたらピーチイたらいう会合が学校であるんやて」祖母が母に告げる。戦争に負けてアメリカ軍が来たら「大池にはまって死のか」とまじめにウワサし合っていた大人たちも、その子供たちの頭や体にいきなりDDTを振りかけてシラミ退治をしてくれるアメリカさんとの親切にすっかり親しみをおぼえていた。やがて学校にPTAというケツタイな会ができて、それほど抵抗はなかった。ただ、どつと流れこんできたワケのわからぬアメリカ語にオバアチャンの頭はミソクソに混乱するばかりであった。

その頃できた六三三制の新教育制度は、わが家には好都合だった。一人夭逝したのを含めて兄弟姉妹は八人、それがうまい具合に？女を頭^{かしら}に男女交互に生み分けられ、更に都合よく三年ごとなのだ。三年制の中学や高校などは一人入れれば一人が出るという具合だった。

私が小学校の時は、先頭の女学校も入れると五人が学校に通っていた。母の夜なべは、それらの衣服の繕いに費やされた。夕飯が終わると、姉などは母と共に後片づけをしたが、

その他大勢は「食べてじきに寝ると牛になるでエー」と叱られながら満腹をかかえて居間に寝転んでいる。そこへ、後片づけを終えた母が上がってきて足袋や靴下の繕いを始める。古電球を靴下の中に入れてふくらませながら器用に糸を通していたが、もう何度も同じ箇所を繕うものだから、ゴワゴワになって足の指がうまく入らないほどであった。当時は草履に足袋をはき、ケツツケ（ボール蹴り）などして遊ぶものだから、足袋の親指の部分などはもう指の入る隙間もなかった。学期末になると、兄弟みんなが通信簿を持ち帰った。みんなドングリの背くらべで、学期によって僅かに上下する程度であったが、その僅かの差で、それぞれの威勢がちがった。少しでもいいときは良かったが、悪いときは兄弟には見られたくない。隠そうとすると、なお見たがる。最後は、目くそ鼻くそ式の口ゲンカになる。

二つ折の通信簿の内側の成績表は親の失望を買うに十分であったが、なお悪かったのはその裏側に書かれた担任の評価。「勉強態度が悪い」「落ち着きがない」などなど。最後には担任も書きようがなくなつたのか「努力すれば成績は向上する」というのもあった。母は、この担任評をみてはよく説教をした。説教しながら、やがて低い声で歌いはじめる。

「コンゴオ セーキモ ミガカズバー」ちゅうじやいやい。母の節まわしは、たいがいこの「ちゅうじやいやい」で終

わり、あとに続く「ターマノ ヒカリハ ソワザラン」は普通の口調に戻る。

「こんごう石ちゅうダイヤモンドもなー、もとはザラザラの石や。それをみがいてみがいてピカピカになるんや。ええか、人間もな努力せんとあかんちゅうこっちゃ」。

その場はわかったような気はしていたが、翌日からはじめ夏休みなどは宿題もそっちのけで遊びほうけていた。

いま、この原稿を書くにあたって、この歌の出所を調べてみた。なんと明治天皇の皇后・昭憲皇太后の御歌とあり、明治二十九年に「新編教育唱歌集」に収められたという。この歌の一番の歌詞は、こうである。

金剛石もみがかずば たまの光はそわざらん
ひとも学びて後にこそ まことの徳はあらわるれ
時計のはりのたえまなく めぐるがごとく時の間も
光陰惜しみてはげみなば いかなる業かならざらん

さすがに、畏れ多き方の重厚な歌である。二番を含めて七五調の中に、修身の徳目が歌いこまれている。こんな徳目を唱歌として教えこまれつつ育った明治生まれの人間は、やはり背骨に一本シャンとした筋を通していたのだろう。

こんな歌を唄いながら不肖の子を励ました母、ダイヤモンドの原石ならともかく、磨けど光らぬ石ころもある。そう知っ

てか知らずか……。いま、この歳になってつくづく思うのであるが「努力」も能力のうちなのだ。能力は努力と別にあるものでなく、集中力と持続力（根気）が努力の中身をつくり、それが能力として形成される。だから「もう少し努力すれば」などというの、「努力する能力」を持ち合わせていない者にはただの気休めにすぎない、とまで言ってしまつては、我々凡人にはやはり希望がなさすぎる。やはり「努力」という名の「希望」があればこそ、明日も生きていけるのだ。

*

母は、この明治の精神を挺して献身的努力で大勢の子どもを育て、家事を切り回した。その母がこの一月、八十七歳の生涯を閉じた。私も妻と共に柏原日赤病院で初めて徹夜の付き添いをした。一月二日の寒い夜、九時になると暖房が止まった。室内の気温も次第に下がり、夜半にはシンシンと冷え込んできた。その連想で、斉藤茂吉の歌が頭に浮かび、こびりついて放れなくなった。

垂乳根の母に添い寝のしんしんと

遠田の蛙 天に聞こゆる

季節はまるで逆であり、こちらは寒いばかりのしんしんとあつたが、この歌に圧倒されるばかりで、この期に及んで、心境を歌に詠めない自分の無能無芸を悔やんだ。

「数え唄」の由来

木村 つた江（青垣町）

一い二う三い四のあねさんたちは
殿がないのであなどりなさる

殿は丹波の助太郎さん

助た土産に何なにもろた。

一ぶかんざし二ぶしたこうがい

三にさしぐし四ばんに枕

五ばんに紅さし六ばん鏡せめて

七ばん繻子の帯

この唄は私が七歳の頃に、祖母から聞いたのを、何故か七十年も経った今でも覚えていたものです。それが今頃になって、助太郎さんでどんな人だったのだろう、実際の人物だったのかしら、また大金持ちだったのかなどと気がかりになっていたのです。

そんな折、偶然去る四月二十日付の丹波新聞に、「たんなの民謡と伝説」からというタイトルで助太郎の記事が掲載

されていました。私は気になっていた謎が解けたようですっかり嬉しくなりました。

「鼻の助太郎さん」は正直で剽軽者でした。しかし、鼻がよくきくので、あちこちで色々頼まれました。ある時、庄屋さんの娘の嫁入り支度にと大切にしていた金のカンザシが紛失したのを嗅ぎ当ていつそう有名になったのです。そして、それが都の殿様の耳に入り、都から使者がきて家宝の刀がなくなつたので、その鼻で嗅ぎ出すようと命じられました。

さあ大変です、今度は命がけです。助太郎さんは覚悟を決めて旅に出ました。いくつもの山を越えて行く旅の途中で、腕白な子供にいじめられている子狐を助けたのです。その夜の夢枕に親狐が現れて、刀のありかを教えてくれたのです。助太郎さんは、殿様から褒美に大量の金を貰い、その金でお壕を廻らした立派な屋敷を建てました。人々はそれを助太郎屋敷と呼んでいたそうです。

そんな助太郎さんのこと故、娘たちに大はんふるまいをして人気者だったのでしょう。

昔（二百年位）丹波の山奥にも、助太郎さんや、その人柄を理解するユーモアに富んだ庶民がいたことに、私はほのぼのと心温まる思いがしました。

ふる里

中野 真理子 (柏原町)

(旧姓宮野)

初風^{はつふう}やきらきら星の降ることく

洋上の朝日燃えつ、おほろなり

ふる里の初筍の皮を剥ぐ

ビル狭間^{はざま}ファミコンめきし遠花火^{とくわ}

赤とんぼ露風の世界重ねけり

石段を踏みはずすまじ山紅葉^{やまもみぢ}

露の世や幾何模様なる墓地公園

藪椿五右エ門風呂の父の里

咲きつづく眞向^{まむかひ}きそ向きの藪椿

ひたすらに看とる家族や花は葉^は

ダイインの平和広場や原爆忌

原稿大募集

- ①ふるさと随想▶ふるさとに関するさまざまな思い出や感想など
- ②近況・エッセイ▶旅行や趣味／世相雑感／私の近況など
- ③インフォメーション▶展覧会／同好会／催し／同窓会など
- ④こんなテーマの原稿も募集しています。

▶ふるさとに残る民話や伝説、小話など

▶〈わが出立の時〉ふるさとを離れる時の動機・出立の日など

▶ふるさとの古い写真を簡単な説明をつけてお送りください。

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは
平成8年8月20日です。

原稿枚数：400字詰め原稿用紙4枚程度

送付先：〒104 東京都中央区明石町2-16-501

株式会社 ホンゴ出版内『山ざる』編集部 (池田)

TEL 03-3248-6625 FAX 03-3248-6626



遙かなりカイバル峠

岸 本 眞 輔 (柏原町)

いつも楽しく拝見させて貰っている『山ざる』から思いがけず寄稿のお誘いを頂きました。見本帖やカタログを一杯詰め込んだ重いトランク片手にいろんな国々を廻っていた若かりし日の想い出などを拙い筆で綴らせて頂きます。

貿易商社マンとしてパキスタンのカラチに駐在していました私に「アフガニスタンの市場調査のための短期出張を命ず」という電報が本社から届いたのは昭和三十(一九五五)年の秋のことでした。当時アフガニスタンの首都カブールに出張所を設けていた日本の商社は僅かに二社で、その中の一社のカラチ駐在員が連絡のため陸路でカブールに出かける予定と聞かされて同行を頼んだら「旅は道連れ」と快諾してくれました。

確か九月だったかと思いますが、秋が来ても突き抜けるような青空で雲一つ見ることのない酷暑のカラチを発って二人は鉄道で北上、パキスタン北部の古都ペシャワールで一泊、翌日は運転手付きシボレーをチャーターしていいよ出発です。

我々の向かう道はペシャワールからカプールまで約四〇キロ、古くから中央アジアやヨーロッパとインドを結ぶ通商路でスレイマン山脈中の最高頂一〇二九メートルのあたりがカibal峠でパキスタン・アフガニスタンの国境であります。

車は橋の無い川瀬を横切ったり、羊を追う遊牧の群れと行き交ったと思う間もなく、今度は一木一草を許さぬ峨々たる岩肌の道、下方に目を移すと深い谷底には転落した車の残骸。

「桑原くわばら」。やっと峠を越えてあとは下り坂と一安心した途端に頼みのシボレーがエンスト、ひやりとさせられました。が、運転手は慣れた顔付きで「一旦降りて、外は寒いから焚火をして二〇分程お待ちを」と言います。木ぎれ一つ無い岩間の道で何を燃やすのかと訝りながらA君と二人で目を凝らすと、駱駝が喰べこぼした枯草がそここに散らばっています。「同行」二人で良かったなあ、心丈夫で」などと顔を見合わせながらチョロチョロと燃える火に手をかざした宵闇迫るカibal峠のひとつときは、今も脳裏に焼き付いております。

カプール滞在は僅か二カ月でしたが、宿舎のカプールホテルの窓を明けると朝毎に目に迫る白銀の山々、果物とはこんなにまで瑞々しく美味しいものかと感嘆させられたブドウや西瓜、カプール河畔の隊商宿に憩う駱駝たち、道路の両側に一メートル近い雪が掃き寄せられた夜のカプールの街を御者付き馬車で往き来した日々。人も羊も商品も何も彼もが雑多

に行き交うバザールを包むシシカバブの強烈な匂い。そして善良で我慢強く且つ誇り高い人々。

それは例えばシャンゼリゼのカフェテラスで交わされるエスプリの効いた軽妙な会話やニューヨーク五番街のショールインダーを飾る高価なブランド品とは恐らく無縁ではあっても、悠久の時の流れの中で遅しくも懸命に生きる人々の姿でした。

その平穏な日々の暮らしがもうこれ以上戦火で乱されることのないようにと祈念しつつ擲筆致します。

超大作「麗暉」を描いて

常岡幹彦（柏原町）

昨年四月末、丹波に帰り、かねて制作を依頼されていた円応教本部を訪ねた。案内された五法閣ホールからなにげなく眺めた雨あがりの景観は、今しがたまで雨にけむっていた霧がとぎれてたなびき、あるいは天に向かって湧きあがって、山は大きく、ふところは深く正に氣韻生動。最初の出会いがこのような情景に心を洗われたことは誠に幸運であった。帰路車窓から再び眺めながら、あの山を描こうと心に決めた。



横七メートル、縦一・五メートルの大作ともなれば何を描こうかとモチーフに迷うのが普通なのだが――。

その後数ヶ月して、同本部に宿泊をお願いして毎日々々夜明前から空を眺め、昼間は貼り合わせた横二メートルの紙にコッコツと写生をした。

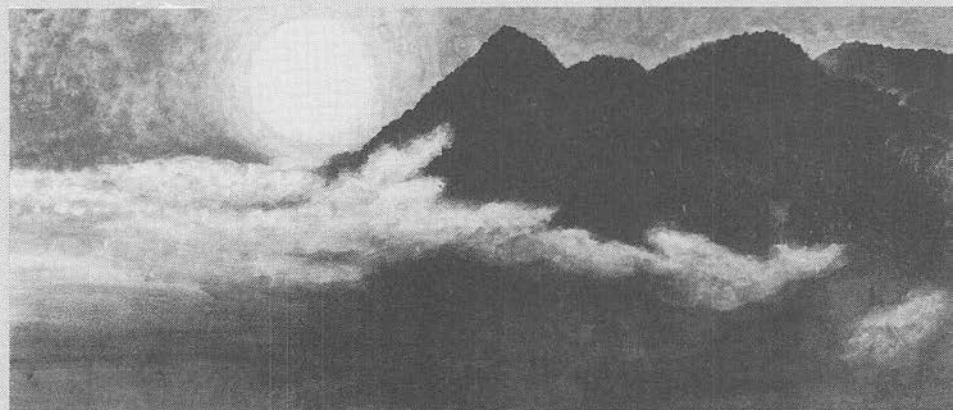
帰宅後、大よその仕上がりを予想した横三〇センチ程の右下図をくり返し十数枚描き、その中で気に入った一枚の感じをさらに横七〇センチ程の画面に中下図として数枚造った。

この段階で構成と共に色は墨、金泥、朱の三色に絞ることに決定した。

そして、実大の天下図にとりかかった。この木炭デッサンの大下図をもって帰丹すること二回、実際に五法閣ホールの壁面に貼って補筆修正して構成を決定。これで山に使う墨、霧をあらわす金泥、空を表現する朱、それぞれの分量（色面）の納得ができた。

今年正月早々、額装店から三分割したパネルが届き、その場で、制作する本紙をパネルに袋ばりをしてもらい、三枚のパネルをボルトで連結してすべての準備がととのったが、自宅で見るとそれは何と大画面であることか。画面に向かって挑む実感がわく。光線を一定にするため、南側の雨戸は以後制作の終わる半年間締切りである。

私は、制作する時、絵を床にねかせて描くのだが、筆を下



常岡幹彦・画「麗暉」

ろす前に画面を眺めながら、どのような筆づかいでどう描くのか、どこをぼかしどの部分に水を打つかなど、手順がはっきりと見えて心がきまるまで何日でも熟慮をかさねる。いざ決まれば画面の上に板をわたし、その上に乗って左手には水をふくませた刷毛を、右手には太筆をもって左から右端まで思い切って存分に一気に七メートルを描いてゆく。生かすも殺すも一気である。それが最も墨色や日本画の顔料が生きる——と私は信じている。

この時、最も神経を使ったことは墨や絵具の操作もさることながら、筆づかいの、つまりタッチの荒さであった。

絵の本当の強さを生むのは私の場合、自然、宇宙から受けるリズムが私の息づかいになり、それが筆づかいとなり、それによるタッチの荒さ加減が「いのち」となる。それを補うのは狭いアトリエの中では、あの大ホールの空間を想いおこしながらのカン以外にたよるものはなかった。画面構成の中で墨や金泥の濃淡やタッチの呼吸がピタッときまった時、本当に絵は強くなる。これが絵が生きるか死ぬかの境目であり、（特に今回はなしろ七メートルである）最も苦しくもあり、それだけにやりがいのあるところであった。

平成七年七月七日、ホールに飾りつけた際、丹波の友人は「強いなー」との感想を、東京から同行してくれた額装店の三人からは「うまくいきましたね」の言葉を聞いた時、これ

まで丹波で写生のときからつきあってくれた友人と、埼玉のアトリエで私の仕事を見てくれていた人達であっただけに、うれしくもあり、ホットしたことであった。

世間は狭い

池田 和子（柏原町）

私は市川に嫁いで三十数年、生まれ育った柏原の地より数年長く住むことになりました。

その間、幼稚園勤め五年、三十七歳から公立の小学校教師二十二年と十一ヶ月。そして二年前、定年退職致しました。現在は、公民館、市川市教育委員会勤務を経て、昨年九月より私立アース学園という幼稚園に勤めています。毎日三百八十名の園児に囲まれ、園長先生と呼ばれ、輝くひとみ、やんちゃで無邪気なかわいい子ども達と過ごせることは、責任は重いけれど幸せに感じています。

ところで縁は異なもの、世間は狭いと申しますが、私もそのすばらしい人間関係に守られ、ここまで来たのだとつくづく感じます。

私の弟、上田吉明も現在、神奈川県川崎北高校の校長を拝

命しておりますが、県立川和高校時代、二ヶ年担任した女生徒が「今日、母が進学の件でご相談に伺います」と話して来たそうです。お母さんは丹波の生まれだと話され、よくよく聞いてみると、日本舞踊の西崎祥さんだったとか、幼なじみのご来校に驚き、旧交を温めたとか、お陰で私まで、国立劇場での優美な舞をうっとり拝見させていただける幸せに恵まれたことでした。

私が日頃お世話になっている美容師さんが京都に帰られるというので、京都の話になり、そのうち丹波に及んで、お兄さんが柏原高校の出身で、コースで当時部長だった藤本義一さんの弟さんだったとのこと、柏原とは縁のない方と思っていましたのに驚きでした。

まだこんな話は他にもあるのですが、市川で教師をしておられ、教頭になられるはずの寺井清己先生に、私の長女の担任の紹介で親しくお話をする機会を得ました。先生は鳥取の出身と言われ、私は兵庫県です、という話から、「兵庫県のどこですか」「福知山線の沿線、篠山の近くですよ」「ばくの親戚が近くにあります」「私は柏原ですよ」と申し上げると、「そこだ」とおっしゃるのです。「えっ、どなたですか」「元県立柏原病院に家内の兄が整形外科医で、今は当地で開業しています。柳浦医院です。子どもが柏原はいいところだから住みたいと言うのですよ」とその時は話しておられたのです

が、後日寺井先生は、奥様が不治の病のため将来ある身を惜しまれながら市川の教職を退かれ、残り少ない命を共に生き、看病のため柏原の地に住を移されたのです。お嬢さんの真由さんも柏原高校に転校され、先生は「なごら病院」の慣れない職に就かれたのです。今はもう、その奥様も天国に召されました。きっとお二人の幸せを見守っておられることでしょう。

娘の担任の紹介がなかったら、小・中合わせて五十五校もある市川市です。きっと何も知らずに過ぎたかも知れません。寺井先生のお陰で柏原と市川は知人の間でも近しく感じられるようになりました。

元市川市の教育長の故島津新治先生は義理の亡父池田種生の姫路師範の同級生で、私が公立の小学校に入学のため、県の採用試験や人事についても大変ご心配を下さいました。また、前教育長山口重直先生も、私の仕えた校長先生で、同輩とは半分の経歴しかない私を教頭・校長に推薦下さり、女性管理職として市川で七代目を経験させていただき、本当に幸せでした。

同僚から、丹波人はねばりがあるね、などと評されましたが、寺井先生の手紙にあるように、「東山魁夷画伯の唐招提寺の襖絵のごとく、四方の山々は霧が舞い、夕焼けのそれはしばし、立ち止まる」とありますが、底冷えのする風土が

人間を培ったのかも知れません。（東山魁夷画伯は市川にお住まいです）

それにつけても、立場によるすばらしい方々に出会い、人間関係の得がたい縁に、今更ながら人間業では出来ない何か、神のみぞ知る不可思議な力がそこに作用して生かされているのではないかと考えさせられます。

そもそも、私の主人は池田忍さんの従兄弟で、今日この原稿を書くはめになってしまったようです。彼との出会いは、柏高時代、柏原キリスト教会のバイブルクラスであったように思います。このすばらしい出会いありがとうございます。

五十歳でトライ

—トライアスコンペの道のり—

細見利明（氷上町）

四年間を学生寮で過ごしたためか、就職した時には、体重が五〇キロを切り、もやしの如き状態でした。ところが、結婚して二、三年もすると順調すぎるほど肉が付きはじめ、一〇年、二〇年を過ぎると、身長一六〇センチほどのなのに、体重は、ついに六〇キロを優に越え、確実に肥満体となったの

です。職場では、「細見」ではなく「太見さん」と呼ばれるようになり、また、関東では少ない姓なので、「細身」と間違えて書かれると、皮肉かと思うまでになりました。

そこで、一念発起し、職場に近い「皇居」の周回コースを走るランナーの仲間入りをしたのです。周回コースは五キロあり、排気ガズはすごいものの、信号もなく、ジョガーにとつてはメッカとされているコースです。このコースを昼休みに走り始めたのです。このため、昭和天皇が亡くなった冬、乾門、半蔵門での狂気じみた報道体制を毎日目撃することにもなるのですが。

ところが、夜のアルコールの補給が程よいために、なかなか減量できないのです。

そこで、今度は、水泳も始めました。子供の頃、近くの佐治川で泳いだ程度ですが、一応クロールもできました。池袋に「マンモスプール」といって、競泳用のプールも備えている施設があり、仕事が終わった帰路、このプールへ泳ぎに行くのです。はじめは、クロールの息つきがうまくできず、二五メートルも泳げば苦しくなっていました。少しづつ距離が延びはじめ、そのうち、憧れの一五〇〇メートルが泳げるようになりました。そうなると、泳ぐことが楽しく、プールへ行く回数も増えるのでした。

こうして、体重も減りはじめ、プール仲間に裸を晒しても、

恥ずかしくない体型に変化してきました。

こうなると、残るはバイク（オートバイではなく、ロードレース用の自転車）です。

思えば、氷上町成松で育った私は、高校の三年間、二里の道のりを自転車で通学したのでした。あの一六丁のまっすぐに伸びたアスファルト道路を思い出します。

一九八六年（昭六二）秋、私はいよいよB社のトライアスロン用のバイクを買いました。このころは、日本でも、トライアスロンが一般的な競技として普及しようとしているころでした。

そして私は、より快適なプールを求め、池袋にあるアスレチッククラブR館の会員になり、泳ぐ、走る、固定バイクをこぐなどのトレーニングをはじめていましたが、同好の人たちも何人が現れました。

月一回の日曜日は、この仲間たちとバイクのトレーニングに当てました。主には、荒川に架かる秋ガ瀬大橋の下で待ち合わせ、荒川沿いにつくられたサイクリングロードを走り、埼玉の武蔵丘陵森林公園までの往復です。一〇〇キロを超えるコースです。しかし、このコースは特別で、普段バイクで走っていると、日本の道路は、いかに車中心であるかを痛感させられます。常に、危険が隣あわせで、車と接触し、怪我をした仲間もいました。

それにしてもバイクは非常に魅力的でした。ドロップハンドルのスリムでシンブルな車体、四〇キロを越えるスピード、長距離のツアーなど。

バイクは、ペダルを踏む力、引き上げる力を全てエネルギーに転化するため、ペダルと靴は固定して乗ります。スキー板を着けると同様、ペダルに靴をはめ込むようになっており、ひねるなど衝撃を与えると外れる仕組みになっています。この種のバイクは、前二段、後輪七段のギアが付いており、時速四〇キロ以上のスピードをだせます。ギアチェンジによる上り坂のテクニク、下り坂のブレーキ操作、曲がり角のテクニクなど、買物自転車とは全く異なる未知の世界が開かれる思いでした。

そしてこの年は、一年前から参加してきた山中湖のハーフマラソン大会に、会場までバイクで行こうということになったのです。東京を出発した仲間三名は、東京と山梨の境をなす大垂水峠の難所を越え、大月から富士吉田までの長い長い登り、富士吉田から富士山に飛び込んでいくような、さらなる登り等々に耐えた約八時間、ようやく山中湖に着いたのです。そして、翌日、私はハーフマラソンを無事完走。帰りは、車で参加した仲間にバイクを積んでもらい帰宅したのでした。

私のトライアスロンデビュー戦は、一九八七年九月六日

(日)、愛知県渥美半島の先端にある伊良湖岬で行われた第一回トライアスロン・ジャパンカップ・イン・イラゴ大会でした。スイム二キロ、バイク九〇キロ、ラン二〇キロのハーフタイプです。なにかにつけ反発する女房が、どういう風の吹きまわしか応援についてきてくれました。五〇歳になる残暑きびしい夏のことでした。

バイクをつめたキャリアバッグをかつぎ、電車に乗り込み、豊橋で降り、バスで伊良湖岬へ。宿舎である伊良湖国民休暇村の広場が受付になっており、バイクの車検を受け、ゼッケンを受け取ります。すでに海にはコースロープが張られていますが、二キロというのは半端な距離でないと感じ入るばかりです。

当日、二の腕と太股に、黒のマジックで695と私のゼッケン番号が書かれると、いよいよスタートを待つばかり、緊張と不安がつる一瞬です。

数百名が一斉にスタートするので、大形の魚が沖を目指す如く壮快な見ものですが、泳ぐ当人は大変で、殴られ、蹴とばされで、しばしの間はまさに格闘技の様です。

海から上がれば、後は自分の足だと思いきや、バイクでは水を取り損ねて転倒し、ランでは炎天下ですっかりグロッキー、目標時間を大幅に遅れ、最後は女房に背中を押されながらやよとのゴール。スタートから六時間を越える苦闘でした。

後日談。翌年も二、三のトライアスロン大会に参加しましたが、踵を傷めたため、その後は走るのを中断せざるをえませんでした。

二、三年前から、また走り始めています。数日まえから三〇度を越す日々が続いていますが、それにめげず今日も走っております。

南仏・美の旅

生 田 清 弘（柏原町）

今年は戦後五十年、身近かなところでは関東水上郷友会が創立一〇〇周年を迎える。こうした記念すべき年に、奇しくも私はすべての職を離れ人生の節目の年を迎えることになった。顧みれば、昭和十九年に社会に出てから今日まで半世紀に及ぶ長い間勤めたことになる。つまり、私の社会歴は戦後の歩みと全く重なり誠に感無量である。

この年を思い出深いものとするために、南仏旅行を思い立つた。

南仏といえばプロヴァンスとコート・ダジュールの移り変わる四季折々の景色、この地方のどこでもが絵になる自然の

美しさが魅力である。そこには燦々と降り注ぐ陽光の中、きらきら輝く紺碧の海、抜けるような青い空、水量豊かなローヌの流れがある。花の季節にはあちこちに乱れ咲く色とりどりの花とハーブの芳香が漂い、夏ともなれば照りつける太陽のもと、北フランスをはじめ国外からも多くの人々がこの南の光を求めて海辺に集い、これを迎える地中海の色も時間とともに見事に変化していく。四季を通じての農場での種蒔きから収穫に至るまでの光景は、それぞれの季節の背景を彩る色合いとともによく描かれるところである。また、この地方では季節の変わり目にミストラルと呼ばれる風が吹くことでも名だ。「ドーデの風車小屋」の資料によれば三十二種類の風の呼び名が示されているが、秋口から冬にかけては山から海へアルプス下ろしの強風が吹き荒れ、この頃アルプス続きの山肌は次第に雪化粧に変わっていく。

今回の旅では、ナボレオンの生家のあるコルシカ島まで足をのびしたので、これらを含めて歴史のことや、南仏料理などにも触れたいが紙面の都合もあり、またの機会にゆずるとして、ここでは「美」を中心に、画家たちとそれにかかわることがらに絞って書くことにする。

ニースの高級住宅街の一角にモダンな構えのシャガール美

術館がある。一九七三年、彼が八十六歳の時に「聖書の美術館」として完成したもので、旧約聖書のエピソードを描いた十七枚の油絵は迫力があり、その幻想的な構図と色彩に圧倒される。マルク・シャガールが一九三一年にイスラエルに旅をしたのがきっかけで聖書の雰囲気を感じ、宗教志向の作品を描くようになったといわれ、展示の十七枚の絵は完成までに十三年を費したという。この美術館には色彩鮮やかなステンドグラス、池に映る大壁画や、油絵のほかにも水彩画やリトグラフなどの作品が展示されている。

彼はリトグラフをはじめ版画技法のあらゆる可能性に挑戦し、ピカソと並び世界最高の版画家として高い評価をうけている。連作版画として「聖書」「ダフニスとクロエ」「サーカス」「夢」などが有名だが、中でも「ダフニスとクロエ」(一九五七—一九六〇)は「色彩の魔術師」の名を遺憾なく発揮した代表作として注目されている。シャガールは一九五〇年から南仏のヴァンスに居を構え、ここで結婚している。この頃から南仏に降り注ぐ光に心を奪われ、さらに色彩やかな作品をつくりあげていったのである。

シャガール美術館に行く途中、美しいバラ庭園があると聞いてそこに立ち寄り花を愛で付近を散策しているうちに或る墓地に出た。この辺りは高台らしく、ここに立つとニースの

パノラマが開け、素晴らしい眺めであった。各家族ごとの墓が整然と並ぶ中に、これは全くの偶然であつたが「RAOUL DUFY」と刻まれた墓石を見つけて胸のときめきを覚えた。これは正しく画家のラウル・デュフィの墓だったからだ。彼は南仏に滞在したことからセザンヌの影響を少なからず受けたとされるが、ノルマンディー生まれの彼はニースやプロヴァンスに関する絵も多く残している。彼の絵も明るく陽気な色彩が特色であり、近年評価も次第に高まってきたと聞く。

今年の七月にたまたま新宿・伊勢丹美術館において「デュフィ展」が催されたが、彼の多彩な制作活動を物語る油彩・水彩・素描など八十七点が展示された中で、一九三七年のパリ万国博覧会に出展の大壁画の縮小版(高さ一・一メートル、幅六メートル)とその原画となった数々の習作がひときわ目立った。この壁画は万博で電気館(光の宮殿)の入口ホールに掲げられた「電気的精」と呼ぶ装飾画で、制作のために与えられた空間は実に高さ一〇メートル、幅六〇メートルの広さだったという。

今回の出品の中に「ニース、馬車の通る遊歩道のカジノ」という作品があつたが、今から約七〇年前のものでおそらくホテル・ネグレスコあたりの光景を描いたものであろう。画面では馬車が通っているが、現在では馬車ならぬ白い電気自動車数台のトレーラーを引っ張っている。公害への配慮か

ら動力源として電気を使っているとか。私もニースの市内観光に乗ってみたが、狭い道や人混みの中を難なく器用に走り抜けるのには驚いたり感心したり。全く予期しなかったデュフィの墓参りのお陰で同じ年にこのような催しを日本でみる縁に感動した。

また、ニースといえば紺碧の海を抱く天使の湾、弧を描く海岸沿いの散歩道、プロムナード・デ・ザングレは世の画家達が一度は描いてみたい景色とか。事実、ここを画題とした絵は多く、先のデュフィも南仏のまばゆい光に魅せられた一人でとりわけニースに愛着を抱いたという。栈橋で大きな口をあけて叫んでいる有名な作品「叫び」のエドヴァルド・ムンクもまたニースに滞在中に、この絵を発想した。ムンクの「プロムナード・デ・ザングレ」は豪華ホテル・ネグレスコの前からアンティプ方向を見た景色を描いたもので、今から約一〇〇年前の作品だが、同じ場所に立つと今昔の感一入である。

ニースの近郊、カーニユ・シュル・メールという町にオーギュスト・ルノワールのアトリエがある。彼は中部フランスの陶磁器で有名なリモージュで生まれ、間もなくパリに移り十三歳の時から陶器の絵付けの仕事に従事していたが、のち画家に転向した。ルノワールの描く女性はふくよかなからだ

つきでよく知られているが、アトリエの庭には豊満な裸婦像があり、この像の横に立つと殆どの女性がスマートに見えるという。晩年、彼はこのアトリエで過ごしリユーマチに悩むが、自由の利かない手に絵筆をしばらく描いた。そして、「絵は手で描くものではなく目で描くものだ」という名言を残している。

一階はマダム・ルノワールのブロンズの胸像が置いてあるホール、リビング、それに彼の友人達のベッドルームが用意され、二階にはアトリエや彼自身並びに家族のベッドルームなどがあり、アトリエ内にはアームチェア、イーゼル、筆、額縁などが往時のままの姿で保存されている。ここを訪れた記念に彼が不自由を克服して用いたであろうアームチェアにそっと触れてみた。

地中海を眼下に見下ろし遠くにアンティプ岬の見える素晴らしい環境の中のたたずまい、まわりには樹齢百年を超すオリーブの大木が沢山植わっている。それもそのはず、ここはもと広大なオリーブ畑だったのだ。一九〇七年、六十六歳の時にこの畑を買いとり、翌年一番見晴らしのよい場所に家を新築して生涯を閉じるまでの十一年の間ここに住んだのである。

ここから海岸沿いに車を走らせると程なくアンティプの町

に入る。ここにはピカソ美術館がある。

パブロ・ピカソは言うまでもなく七十五年以上にわたる長い画家生活において常に時代の先端に立ち旺盛な創造活動をしてきた。彼の作品には一般になじみにくいものが多い。それも造形秩序の破壊を試みたキュビズム（立体主義）の故かも知れないが、彼の面目躍如たる前衛運動の展開であり、たえず破壊と再構成の繰り返しを続け、「ピカソ芸術の神髄は現実に立脚したあくなき人間追求にある」と評価されている。

この美術館はグリマルディ城を美術館にしたもので、一九四六年に館長がピカソに美術館の空部屋をアトリエに提供したのが縁となり、ピカソの作品の寄贈をうけ、後に絵画のほかヴァロリスで制作した陶器も展示されるようになった。館内の海に面した庭に人物像の彫刻が並んでいる。景色の美しい場所であり、おそらく別荘的役割も果たしたと思われる。

ポール・セザンヌは南仏エクス・アン・プロヴァンスで生まれ、この地方の自然をこよなく愛し、数々の名作を残している。セザンヌのアトリエに行く途中、彼が好んで描いたテーマの一つであるサント・ヴィクトワール山を望む場所で、しばしの間、山を眺めながら彼の心境に思いを馳せる。この山はルノワールの作品の中にもあり、セザンヌとはほぼ同じ場所から描いているが、二人の作品を見て感じることは、セザン

ヌの絵は比較的タッチが粗く色彩的に空や山から受ける印象は神秘的かつ動的であるのに反し、ルノワールのものは彼独特の小麦色の配色で何となく穏やかで暖か味があり、それぞれの特色がでていて面白い。

アトリエは大して広くはなく、木立ちに囲まれた中に建っており、イーゼルや椅子、それに果物の収穫に用いたと思われる背の高い脚立、ドライフラワー、ドライフルーツなどが当時をしのぶに十分な姿で配置され、あまり多くはないがスケッチや油絵の作品があった。

エクス・アン・プロヴァンスの町はセザンヌとかかわりが深く、セザンヌの生家をはじめ父親が経営していたという帽子店、一時通学したことのある大学、彼がお祈りを捧げたサン・ソヴール大聖堂やアトリエ、墓などがあり、またこの町のメイン・ストリートであるミラボー大通りにはお気に入りのレストランなどがあって、この辺りをよく散歩したことであろう。プラタナスの並木があるミラボー大通りにあるヘレ・ドウ・ギャルソンという有名な格調高いカフェレストランもセザンヌが好きだった店の一つと伝えられている。

話はそれるが、『南仏プロヴァンスの十二か月』の著者ビクター・メイルも六月の頃にこのレストランに触れているので引用してみよう。

「ミラボー大通りは数多く建ち並ぶ個性豊かなカフェは愛

着が深い。なかでも私が最眞にしているのはヘドウ・ギャルソンである。……ヘドウ・ギャルソン」のテラスはいつも女子大生たちでいっぱいである。私の観察では、彼女たちは勉強の疲れを癒しに来るのではない。その反対にこの店に来ることがひとつの教養なのである。……彼女たちだって、この忙しい社会勉強の合間に多少は学業に精を出すこともあるだろうと想像するが、カフェのテーブルに本が積み上げられていたことは絶えてなく、彼女たちが学問や政治について論じ会うのを聞いたことはただの一度もない。女子大生の関心はもっぱら人目に見場よくふるまうことにあり、そのせいかミラボー大通りは常に艶めかしい華やきに満ち溢れている。」と書いている。

また、この本の中の挿絵にはヘドウ・ギャルソン」のテラスで女子大生が椅子に腰かけ、テーブルの上には教科書ならぬセザンヌの本と、カリソンという菱形の箱に入ったプロヴァンスの名菓が置いてある。因にカリソンの店はこの大通りにもある。このような情景を今セザンヌが見たら何と思うだろうか。私もこの店の前を通り、セザンヌやピーター・メイルのことを回想し何となく楽しくなったものだ。

ついでながら、この「プロヴァンスの十二月」のお陰で英米人の南仏への観光客が急増したと聞いた。

マルセイユからエクスを経てアルルに入った。アルルはローヌ川の水運の要として栄えたが、後に地中海とアルルが運河によって結ばれた結果、さらに飛躍的な発展を遂げた町で、ローマ時代の遺跡が多く残っていることで有名であり、多くの観光客をひきつけている。また、それに劣らず画家フィンセント・ファン・ゴッホの町として知られている。オランダ生まれの彼はアルルに住むようになって耳切り事件や精神病院への強制入院、さらには三十七歳の若さで自殺という数奇な人生を送ったのであるが、このようなこともあってか彼の生前は地元の人々には評判がわるかったが、死後名声は一躍高まったという。

まず、郊外にあるゴッホの跳ね橋を見に行く。実際にゴッホの描いた橋は第二次大戦中、ドイツ軍により破壊され、現在のものは後に絵に基づいて場所も変えて復元されたという。「ゴッホの跳ね橋」は橋が閉じて馬車や人が通っている絵（いずれも一八八八年）であるが、私が見たのは橋が跳ね水路が開いた状態であった。「黄色い家」という作品は、ラマルティヌ広場に面した外観が黄色い二階建の建物でゴーギャンとともに住んでいたことがあるようだが、この家も戦争のどばつちりをうけて破壊され今はない。

私が泊ったホテルの近くにフォーラム広場があった。そこには「ミレイユ」でノーベル文学賞を受けた有名な文人フレ

デリック・ミストラルの像が建っている。広場の横にはゴッホの描いた「夕べのカフェ・テラス」があり一〇七年たった今も絵の雰囲気と殆ど変っていない。この絵は一八八八年の作品で青い夏空に大きく、あるいは小さく星が輝き、苦心に苦心を重ねて到達したといわれる光に映えるテラスのテントや建物の黄色の表現が実に迫真的で空の青とよく調和している。夜の雰囲気を楽しむためにモチーフとなったレストラン〈Le cafe l'ya Nui〉に入ってみた。店内はスペイン人の流しの、客のリクエストに応じた歌声で盛りあがっていて、ゴッホゆかりの店での素晴らしいときを楽しむことができ幸せであった。

アルルにはこのほかにもゴッホの描いたスポットが沢山あるが、「療養所の中庭」と題する絵もその一つである。耳切り事件のあと強制入院させられたところで、病状が落ち着いていた作品という。鍵をかけ、看守付きで独房に入れられたゴッホの心境はいかばかりであっただろうか。この中庭は後になって絵を参考にして再現されたという。

アルルをあとにしてニースからカマルグ地方に向かった。ローヌ川はアルルの近郊から大ローヌと小ローヌに分かれ、この二つの流れに囲まれたところがカマルグ平野で、中央に広いヴァカレス湖を抱えている。このあたり一帯は自然動植

物保護区の大湿地帯である。この湿地帯で白馬や牛の群れを見たが、遠くにフラミンゴを見ることもできた。本によれば、フラミンゴの大群の飛翔する様は何と壮観なことか。このような大自然はプロヴァンスならではの風景ではないだろうか。まさに絵になる風景である。

地中海に面したところに、サント・マリー・ド・ラ・メールという町があり、これもゴッホゆかりの地である。この町名は「海の聖女マリアたち」との意味だそうで、町の中央部に十二世紀に建てられた教会があり、春秋に催される大祭当日は巡礼者が各地から集まり大変な賑わいをみせる。

ゴッホの「サント・マリー・ド・ラ・メールの眺め」は一八八八年の作で海岸寄りの円形闘技場の方角から町の中心部を眺めたもので、絵の手前には紫色の花をつけたラヴェンダー畑が描かれているが今はその姿はなく、教会そのものは現在も当時のたたずまいをそのまま残している。また、同年の作品に「サント・マリー・ド・ラ・メールの海景」というのがある。当時はアルルから乗合馬車で五時間ほど行くと地中海に出ることができた。ゴッホはアルルに着いた時から地中海に憧れていて、五月の末にここに着き五日間滞在したと記されている。彼は地中海に魅せられたが絵に描くことは大変むずかしかったと述懐している。それについて弟テオ宛の書簡の中で次のように書いている。

「地中海はまるでサバみたいに色が千変万化する。いつ緑や紫、いつ青になるかわからない。次の瞬間には光の反射が変わって、ピンクやグレーの調子をおびるんだ。」（書簡四九九）

かくして忘れたい「美の旅」を終えたが、今後関東氷上郷友会がますます発展するにつれ、一〇〇周年とともに思いだすことであろう。

命ある限り

高尾久子（柏原町）

「先生、主人はどうかしたのでしょうか。予定よりも二時間以上たちましたけど……」

「大丈夫です。もうすぐ終わりますから」

一九八八年九月、主人の膀胱ガン摘出手術中での私と主治医との会話です。

朝七時に麻酔を打ちストレッチャーで手術室に運ばれてから八〜九時間で終わりますと言われていたのに、それを過ぎても二時間、三時間と経ち、結局五時間以上遅れの夜の十時三十分終了。その間、先生も看護婦さんも一言の説明もな

く、何度聞いても「大丈夫、もう少し」の返事ばかりです。昼間賑やかだった病院内も見舞客が全部帰り、消灯の時間もすぎ、シーンと静まりかえった薄暗い廊下と待合室の間を、訳も分からず気ばかりもんで、ただウロウロと歩き廻るだけの私でした。

やっと手術室から出てきた主人は眼をうつろに開けて「痛いよう痛いよう」の繰り返し。手術が長引いて麻酔がきれてしまった痛みとか、術中血圧が下がりがすぎ手術続行がむずかしくなり途中で何度か休止したこと、又輸血も足りなくなっであわてた旨等、後で手術が長引いた理由の説明がありました。よくあることですよと事もなげに……。それにしてもよく頑張って耐えてくれました。

一応の手術は成功と聞いてほっとしたのも束の間、翌日から原因不明の発熱。レントゲンをとっては肺にカゲ？ CT スキャンでは肝臓に転移か？ はたまたアレルギー性によるものかと先生は原因が分からないの一点張り。十日間も高熱が続いた結果、腹部縫合部の内側が化膿していることがやっと分かりました。再び傷口を開け、ウミを出すこと一週間、八日目によりやく傷口をふさぐ手術を施行。本人は体力、氣力共に極限ギリギリでした。勿論まわりの氣もみも。

私は仕事を持っていた関係で毎日夜遅く五分か十分の面会、休日は殆ど一日中病院詰めという生活が四か月後の退院まで

一日も欠かさず続きました。七十三キロもあった体重は五十
三キロまで激ヤセ。点滴の針をさす場所がなくなり両腕は黒
ずんでコチコチに固くなり、看護婦さん泣かせの針との格闘。
神経性円型脱毛症になって苦笑いしたり、色々なことがあつ
て本当に筆舌に尽せない戦いの連日でした。

愈々退院の日、この日が来るのを指折りかぞえて待ち焦が
れていた主人は、少し前から体力作りと称して病院の階段を
歩いて下りたり上ったり（病室は五階）して自信たっぷり
の筈でしたのに、靴をはいた途端「靴が重い」。（練習はスリッ
パ）エレベーターまで行く間に何度も、「この靴本当に俺の
靴か」と聞く仕末です。表に出てタクシーに乗るまでは太陽
の光がまぶしいとか、人の歩いている流れが早すぎてこわい
等、何かと戸惑いがあつたようです。

退院後は本人の努力が実を結んで日に日に元気になり、俗
にいう三年、五年、七年の奇数年最長期を間もなく迎えよう
としています。体重も殆ど元通りまで増え、主治医からも
「もう大丈夫でしょう」と太鼓判を頂き、感謝感謝の日々を
送りながら命ある限り共に頑張つて行きたいと願つておりま
す。

年齢四つ論と

サミュエル・ウルマンの詩

足立和巳（青垣町）

最近年齢を聞かれることが、多くなったような気がする。
六十半ばを過ぎると、つい少しでも年寄りと思われたくない、
という気持からモグモグと誤魔化そうとする。それでもしつ
こく聞かれると、必ず「どの年齢ですか」と聞き直すことに
なる。聞いた相手は殆どがキョトンとして、どういう意味の
質問なのだろうと、一瞬戸惑いを見せた上、改めて「お歳で
すよ」とか、中には「精神年齢ではなく、お歳の方ですよ」
と返ってくる。

そこで「私は年齢四つ論者ですから、どの年齢で答えよう
かと思つてね」と言つと、「えつ、歳に四つあるんですか」
と考え込むことになる。暫く考え込んだ上で、殆どの人が暦
の上の年齢と、精神年齢にはいち早く気付き、次いで肉体年
齢に気付いて、三つまでは分かるが、あと一つが分からない。

実は、私があと一つの年齢があると気付いたのは、恐らく、
師範学校卒の最後の同期会になるのではないかと思われる約
十年前の、神戸三宮での会の時であった。同期生の大半が校

長・教頭になっており、教員をしながら大学を出て、僅かの教員生活で民間会社に向向したのが、四―五名いたが、出席者では私一人だった。

恩師が来られるとは聞いていたが、可成りのご年輩の筈だから、来られても一―二名の方だろうと思っていた。ところが、なんと六名の恩師で、ご夫人に手を取られて来られた方はお一人のみで、あとの五人は鑿鑿として、足の乱れさえもなく入って来られたのである。どなたも八十歳代であつたが、夫々に挨拶もしつかり話され、短いながらも立派な内容であつた。一人のお方は神戸の某女子短大の講師をしておられ、も

青春

青春とは心の若さである
信念と希望にあふれ勇氣に
みちて日に新たな活動を
つづけるがぎり青春は永遠に
その人のものである

松下幸之助

青春

青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。優れた創造力逞しい意志、炎ゆる情熱、怯懦を抑える勇猛、安易を振り捨てる冒險心、こゝろ言う様相を青春と言うのだ。年を重ねたばかりの人は老けない、理想を失ふ時に初めて老いがかかる。歲月は皮膚のしわを増すが情熱を失ふ時は精神はしほむ。苦悶や狐疑や不安、恐怖、失望、こゝろ言うものを恰も長年月の如く人を老いさせ、精氣ある魂をも芥に帰せしめてしまふ。年は七十であつたと、十六であつたと、その胸中に抱き得るものは何か。白く驚異への愛慕心、空にまぎれく星辰、その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰、事に處する剛毅な挑戦、小児の如く求めて止まぬ探求心、人生への歡喜と興味。

人は信念と共に若く、疑念と共に老ゆく。
人は自信と共に若く、恐怖と共に老ゆく。
希望ある限り若く、失望と共に老い朽ちる。
大地より、神より、人より、美と喜悅、勇氣、壯大そして、偉力の靈感を受ける限り人の若さは失われぬ。
これらの靈感が絶え、悲憂の白雲が人心の奥までも蔽いつくし、皮肉の厚氷がこれを固くとすに至ればこの時にこそ人は全くに老いて神の憐みを乞ふ他はなくなる。

う一人の方は「僕が最近書いた本だよ」と言つて一冊下さつた。

その時、しみじみと年齢には暦年齢、精神年齢、肉体年齢の三つの他に、若さを保ち、老化を防ぐために欠かせないものに、知能年齢があると知つたのである。それ以来、私は年齢四つ論者となり、自分の努力でどうにもならないのは暦年齢のみで、あとの三つは日頃の努力次第で、いつまでも若く、七掛人生を送れるものと信じている。即ち、暦年齢八十歳でも、七を掛けると五十六歳であり、まだまだ若いとなる。

このような考えもあつて、私はサミュエル・ウルマン（一八四〇～一九二二年）の「青春（How to stay young）」の詩が大好きであり、一度年賀状に紹介をした。この詩は「リーダーズ・ダイジェスト」一九四五年十二月号の英語版に掲載され、マッカーサー元帥が座右の銘として愛誦し、執務室にワシントン、リンカーン像と並べて掲げてあると紹介され、のち岡田義夫氏（一八九一年生まれ、フェルト統制組合理事長をし羊毛技術者として斯界の第一人者であつた）によつて邦訳されたものである。

サミュエル・ウルマンはフランスから米国へ渡つた移民で、アラバマ州バーミンガムで荒物商を営み、後に学校、教会の運営にもかかわり、八十歳の誕生日に記念出版した詩集の中の一編が「青春」である。

また、この詩は一九八五年に当時関西経済連合会会長で東洋紡績の会長であつた宇野収氏が、作山宗久氏（千代田化工建設審議役）共著でサミュエル・ウルマンについての調査の結果と共に本を出しておられ、一九八七年には、トッパン・ムーアの会長であつた宮澤次郎氏も、サミュエル・ウルマンの詩と共に、翻訳者岡田義夫氏について詳しく調べられたものを出版されている。その中に当時松下電器の相談役であつた故松下幸之助氏と、サミュエル・ウルマンの詩との関わりと共に、松下幸之助氏の「青春」の色紙が載せられているので、サミュエル・ウルマンの詩に併せて載せさせて戴きました。

季節の移ろい

井田悦子（旧姓安田／市島町）

阪神大震災、夢にも思わなかつた兵庫を襲つた大地震、大阪に在住する弟や妹達も、家が倒れるかと思う程の揺れであつたとのこと。まさかというショックを受けて、やっと気持ちが落ち着いたと思つたら、人の命を何とも思わない、いやな事件が続く中、今度は主人が思わぬ足の怪我で入院。この五月

六月の美しい青葉の季節に目を移す暇もなく、暗い気持ちで今年の前半が過ぎてしまいました。

我が家もやっと落ち着いて、『山ざる』の原稿をと思い、しばらく活字と縁遠くなって、少しもうろくの始まっている頭のネジを巻き直して、机に向かいました。

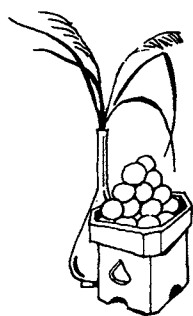
すっかり青葉になった裏の森を眺めて、時々鳴くうぐいすの声を聞きながら、山奥の代名詞のような所だった丹波を思い浮かべています。今は丹波の黒豆で全国的に有名で、その丹波から上京して四十二年、東京から千葉の流山に住むようになってもう七年になります。月日の流れは早いもので、オリンピック並に四年に一度位しか帰らなくなった故郷を思い浮かべて、戦時中の学生時代、亡き父母のこと、主人は代々江戸っ子で夏休みに他の子供達が田舎へ帰るが自分は田舎がないので行く所がなく淋しい思いをしたと今もよく話します。息子達が小学生の頃、夏休みになると少々遠いけれど、丹波という田舎があつてよかったなどと言いながらよく帰りました。昔は一晚かかって汽車に乗り、今思うと親の元へ帰りたい一心で小さな子供を連れてよく帰ったものだと思います。今は新幹線で短時間で帰れるようになり、若い人達は気軽にジーンズ姿で出かけていきます。

小学三年生の孫娘に大阪から宅急便が届き、お礼のハガキを出しなさいと言ったら、我が家に最近取り付けたファッ

クスで手紙を送るとこちらの思い付かないことを言われ、負けたと苦笑している次第です。

時代も移り変わり、それと共に帰る度に丹波も驚く程発展しています。便利になつていながらもかわらず、毎年父母のお墓参りに行きたい気持ちで一杯ながらなかなか思うように行かないので申し訳なく思っています。

東京に大勢の同級生がいっぱいいます。時々集まつておしゃべりするのが何よりの楽しみです。いつまでも元気で過ごさせていただくことを念じています。まだ自然の多く残っている流山が気に入る、リタイアした主人と、丹波でもしたことのない野菜づくりをしたり、暇を見て足腰の丈夫なうちにと旅行に出かけたり、又それぞれの趣味に出かけています。水上郷友会は今年で百周年。皆様のご努力により今日に至つたと存じます。毎年水上の皆様のおめじを楽しみに郷友会の発展を祈念申し上げます。
(平成七年六月二十一日記)



柏原高校の応援歌について

木呂子 恵美子（旧姓河内^{かわち}／春日町）

今、私の手元に深緑色のビロード張りのアルバムがあり、私の専用アルバム第一号で、この裏表紙に父の毛筆で、

「柏原高等学校応援歌

第一位入選を記念して 昭和三十年十一月二日」

と書いてあります。

ちょうど四十年前、高校三年生、十七歳の秋、たしか生徒会募集で、会長から賞状と薄謝「金三百円也」を頂き、それにお小遣いをプラスして、このアルバムを柏原で求めました。

私は運動神経ゼロじゃないかと思う位、スポーツだめ人間でしたが、小中学校や村の運動会、また郡の陸上競技会等の応援の熱気は何かわくわくする程好きだったのです。第二次大戦後、京都市内、府下の奥上林村を経て、父は春日部診療所の医師でした。（現在九十一歳立川でまだ診療をしております）戦争をはさんで、小学校から何度も転校をよぎなくされていた私が、高校は入学から卒業まで通って通うことのできた初めての学校だったので、ひととき思い入れが深かった

のでしょう。

あの頃、源氏鶏太^{げんじけいた}という人気作家が居て、私はその中の「ホープさん」という題名から最後のホープという言葉を感じ、^{「ホープさん」という題名から最後のホープという言葉を感じ}「フレ－フレ－我等のホープ」としたような気がします。「はだえも焼くる」という所は「熱血たぎる」とかも少し軽っぽい感じだったかも知れません。山鳥先生が監修して下さったということなので、きっと文法の違い等もあり、直してきちんとした形になったので、四十年も残って今に歌い続けて下さっているのでしょう。

昭和三十六年、甲子園での柏高の活躍と応援風景がテレビに写り、晴れがましく嬉しく思いました。昨年夏、八十歳で亡くなった母もとても喜んでくれ、その後一家が、東京に移った時は「誉れも高き伝統のー」という見出しの、記事が載った柏高新聞を引越し荷物と共に持って来て、先に東京に出ていた私に届けてくれ、私も大切にしていたのですが、残念ながら今はありません。七十周年に当たる昭和四十一年に、担任でお世話になった荒木先生が校歌と並んで応援歌が印刷された歌詞と赤いレコードを送って下さいました。プラスチックの立派な演奏で私は嬉しく何度も聞きました。賑やかな応援合戦の様子も解りました。

今は亡き松尾先生、吉見先生、また歴代の校長先生方とも東京の同窓会に来られた時に、親しく声をかけて頂き、引ッ

張り出されてお隣で一緒に歌ったり（これはいささか氣恥しく困りましたが）、また今年の同窓会では私よりずっと若い、応援歌を歌ってきた年代の方たちと懇談する機会があり、いろいろな方面で活躍中の方の興味深いお話を聞き、心豊かなひとときでした。今思えば、この応援歌は、一生懸命生きてきた弱虫の私自身に対しても大きな応援の役目を果たしていただくようです。

私のこと。

今は週一回、国分寺の妹の主人の病院で受付を手伝い、趣味の洋裁・カラオケ・読書、もう少し体調がよくなれば旅行に行きます。

平成元年の春、主人が亡くなり、昨年は独り息子が三十一歳で結婚し、私も念願の心優しい娘にめぐまれました。車で一時間位の杉並に住んで居るので、私は清瀬で一人暮らしですが、庭の自然の木々や草花が日々心をなごませてくれます。

清瀬はもう三十年以上になります。その間、昭和四十八年から四十年程、主人の会社の関係で香港に住みました。昨年からは喘息や何かと悩まされ、郷友会のお手伝いも出来ず申し訳なく思います。何事も健康第一、しっかりと自立した生活をするためにも、これからの生かされる日々を大切に過ごしていこうと自分に号令をかけております。

兵庫県立柏原高等学校応援歌

作詞 河内恵美子
作曲 玉沢脩三郎

一、^{はま}誉れも高き伝統の

学びの園に年をへて
今立ち上る代表の

見よこの腕^{かひな}この意気を

おお柏高^{はっこう} 柏高選手団

ふるえふるえ 我等がホープ

二、吐く息凍る冬の日や

はだえも焼くる炎天に

きたえし体この技ぞ

敵せんものはよもあらじ

おお柏高 柏高選手団

ふるえふるえ 我等がホープ

三、入舟山にこだまして

とどろき渡る勝どきは

二千の友の祝う声

勝利の栄^{さかえ}永遠に

おお柏高 柏高選手団

ふるえふるえ 我等がホープ

私の「旅」人生

田 敏 夫（柏原町）

私が今日在るのは「旅」によって育てられ成長してきたと言いつても過言ではないと思う。

祖父田健治郎は一時期、西日本鉄道の経営（明治時代の後期）を任されていたと聞いている。又、父田誠は大正六年鉄道省に入り（今の運輸省）終戦までは鉄道事業、戦後はホテルの経営と交通・観光両面でわが国の発展に寄与したと信じている。

このような家庭に育ったお陰で、私も幼少の頃から「旅」に興味を持ち、小学生の頃から一人で東京から京阪神、天の橋立などを訪れる周遊の旅を計画し旅行を楽しんだ思い出がある。又高校生（旧制）の時（昭和十五年）、父が中国の上海―南京間を走る鉄道の経営で上海に居り、私は学校の夏休みを利用して東京から長崎、上海へと汽車と船を利用して父に会いに行き、暫く上海に滞在し、更に上海から南京・北京・奉天（瀋陽）、ハルビン・満洲里・京城・下関・東京と約三週間をかけて一人旅を試みた経験もある。そして戦争に入り、学業半ばに学徒動員となり、海軍経理学校を経て舞鶴鎮守府

運輸部に勤務した。

これ又鉄道と縁のある仕事で、当時の福知山管理部（現在のJR西日本）の人々と一緒に軍隊輸送の仕事を担当終戦となったが、大学生の身分ですぐ復員しなくてもよいだろうということ、終戦後の引揚者輸送の仕事まで担当、昭和二十一年春に軍務から解放された。

そして大学卒業と共に迷わず旅行に一番関係の深い日本交通公社（現在のJTB）へ就職、以来三十六年間、趣味と仕事と同じの充実した毎日を通し、その間国内は勿論、世界各地を訪問して見聞を広め、これを吸収して旅行経験者としてその自身の充実を図ることが出来た。特に昭和三十九年東京オリンピックの時は遠くブラジルに駐在し、日本への観光客誘致のため南米十一ヶ国を精力的に訪れ仕事をこなしてきた。

日本に戻ってからは主に青少年を対象とした海外旅行の仕事に関係し、ユースホステル協会主催のヨーロッパ旅行で日独、日英青少年の交流など若者の国際交歓のプロデューサー役も勤めた。

青少年旅行の促進に努力したことが認められたのか、昭和五十三年から八年間と、続いてその後四年間、文部省、運輸省の共管財団である「日本修学旅行協会」、「日中青少年旅行財団」の理事長、専務理事を任された。これ又旅行を伴う内容なので、日本国内は勿論、中国もしばしば訪問し交流を深

め、特に中国には多くの知人を得ることが出来た。

現在も、この両財団の顧問の立場でいろいろアドバイスをしているが、これからの時代を担う青少年のために「旅行を通じて何かを得て欲しい」という気持がいつも頭の中にある。

今日の若い人々は受験のために大部分の時間を費やし、大学は出たけれど信念を持って世間に対処する力に欠けているやに見受けられる。勿論優秀な人材は各処に居るが、以前と比べ「人生哲学」を持つ人々が少なくなっているのではないだろうか。「政」「財」「官」の三界に加えてマスコミの影響が強いと言われている。情報過多の影響で自分自身で「考える」「判断する」力が弱くなっているやにも見受けられる。オウムに走る若者もいれば、軽薄な一刻を過す青少年、彼等には正しい目標を与える教育的立場に居る人々が弱く又少ないための結果の暴走としか考えられない。

しかし一方、いろいろな種類の旅を通じ自己研鑽に努める青少年も近頃増加の傾向にある。

「モンゴルの乗馬」「ヒマラヤのトレッキング」など若い力を発揮しての旅行は今までのヨーロッパショッピングの旅を凌ぐ傾向にある。

「可愛い子には旅をさせ」という諺通り若いうちに旅行を通じて知識を詰め、国際感覚を身につけた青少年が次代の担い手に成長することを期待する。

私の教育考

上 田 吉 明 (柏原町)

郷友会創立一〇〇周年おめでとうございます。会誌『山ざる』ふるさとのことが懐かしく、楽しく読ませていただいております。

私は昭和十年柏原町に生まれ、柏原中学校から福知山商業高校を卒業して上京しました。大学を卒業してから一度は神戸の県立長田高校へ奉職、三年後に神奈川県に移りました。県立高校を五校ほど転勤して現在は県立川崎北高校の校長をしております。この間、横浜緑区にある県立川和高校では、同じ柏原町出身の舞踊家・西崎祥さん(出町さん)の娘さんとは知らずに二年間担任をしておりました。いよいよ進学相談ということで親子面談の時出会いました。それはそれは奇遇と言いますか、互いにびっくりした次第です。出町さんとは幼なじみ、私の弟と同級生、幼少の頃から踊りが上手で、スター的存在でしたから、お会いした時は直にわかりました。世間は広いようで狭いものです。

私の趣味は、高校の恩師の影響を受けて剣道と居合道、そしてスキーと花園芸です。全日本スキー指導員会では参議院

議員の田英夫氏とも親しくお話しをしたことがあります。

今年は還暦の年、来春は定年を迎えますが、現代の教育界は難問が山積しております。何か事あるごとにその責任と批判が学校と教師に集中します。学校教育は家庭や社会のニーズに應えるべく教育することが求められます。反論することなど毛頭ありませんが、全て学校任せの感があり、換言すれば、あまりにも荷が重過ぎると思うことでしょうか！ 「文武不岐」は私の目指す教育です。

現代の子供達は、全てとは言わないまでも客観性にとらわれ易く、落ち着きに欠ける。社会の新しい事象には鋭い反応を示します。しかしそこには感動がない。また、自主性とか主体性という言葉を使えば、利己的と解す。学校教育は学問を中心に、家庭教育は人間としての基本を育てる。そして社会（地域社会）はそれらの協力関係をつくりだす。その合いで子供が育つ。非行、いじめ問題、知的野獣を生み出す現代の悩み等々、根は深過ぎます。「智」「徳」「仁」の教育を真剣に考えることが急務ではないでしょうか。加えて、現代社会は、科学技術が進歩したとはいえ明治維新にも似た「カオスの時代」ともい言われています。福沢諭吉は「独立自尊の精神」を唱えています。

ともあれ、家庭教育が取りざたされている今日です。家庭教育の「親父」の教育力の重要性について考えて見ました。

私のおやじ論——青年期のかかわり方——

「父性」とは何か。『広辞苑』によれば「男性が父として持つ特質。父たるもの」とあります。現代の父親像傾向というものは「優しい、友達感覚、決して怒らない」だそうです。「子供は親の背中を見て育つ」ということわざがあります。

作家の曾野綾子氏が、ある雑誌の父性論対談の中で、「父親は、子供にとって最大の教師である」と述べていました。父親は子供に何を教えるべきか、それは「勇氣」ということだと言っています。損をしてでも何かをする、「勇氣」自分が正しいと思つたことは恐れず実行できる「勇氣」である、と。

ギリシャ語でアレテーという言葉があります。一男らしさ、卓越、勇氣、徳、奉仕等々の広い意味があり、男らしさとは「勇氣」があるということ、また「勇氣は徳と不可分の関係にあるから、父親は、そういう勇氣を教えるべきだと考えます。児童期がお父さんとしての出番であるのに対して、青年はおやじの存在感が極めて大きいのです。おやじの出番である。この時期は、論理的思考、判断力、決断力を求めてくる年頃です。父親の社会的経験を生かし、現実の厳しさから逃避することなく、自己の立場を自覚し、人生を切り拓く英知の大切さを説き、将来への展望と指針を提示することです。これらに真正面から取り組む姿勢が大切で、人生の先達

者として生き方を援助し、納得できる相談相手として前面に出るべきです。

古臭いようですが、戦前の父親には父たるものの信念、いわば「男の真情」といったようなものがあつた気がします。例えば家族のためには、生命を懸ける心意気、自己犠牲、受難の覚悟、責任倫理、そして課せられた秩序の維持への献身等々『父たるもの』の本質がありました。そのように考えてみると、吾がおやじ、明治生まれのガンコ者で、怖いけれども威風と優しさで安心感のある存在でした。家庭教育は「父性」と「母性」のバランスをとることは大切な前提条件ではあるのですが、何かとむづかしい当世のこと、世の風潮に惑わされるな親父殿！

トルコ・アンカラにて

上野重喜（氷上町）

郷友会百周年おめでとうございます。記念の大会にぜひ参加させていただきたかったです、この七月からトルコの首都アンカラ在勤となりましたため残念ながら出席できません。このたびの私の仕事は、日本政府の国際協力の一環で、

トルコ共和国の保健省にある「人口教育促進プロジェクト」の推進です。仕事の本身は、平たく言えば、家族計画の考え方を広く普及させることです。そのためには、テレビ・ラジオをはじめ視聴覚メディアを利用することが大切だということと放送（NHK）出身の私も参加することになり、国際協力事業団から派遣されました。国際協力事業団というのは、海外ではJICA（ジャイカ）として知られている日本の公的な国際協力機関です。

トルコはヨーロッパとアジアの接点にありまして、古くはコンスタンチノープル、今はイスタンブールと呼ばれる町はヨーロッパ側に、首都アンカラはアジア側にあり、まさにここは東西文明の十字路です。有名なトロイをはじめトルコは古代遺蹟の宝庫です。絨毯金工細工など手工芸も盛んです。かつてはオスマントルコ帝国の栄華を誇った国として、歴史的・文化的にきわめて興味深いトルコです。大先輩芦田均氏も外交官としてトルコで活躍されたそうです。私も新たな刺激をこの国から得たいと思います。

遙かアジアの西の端から皆様のますますのご健勝とご発展を祈り上げます。

（一九九五年七月二三日　トルコ・アンカラにて）

氷上郡と福知山線

梶原 清（篠山町）

福知山線の新三田―篠山口間二・五キロの複線化工事が平成九年四月供用開始を目前に着手と進められている。

この複線化工事に対応して、篠山口駅及びその周辺の大規模な改造も行われる。駅は現在のホーム以外はすべて取り壊し、駅舎は丹波の森のイメージに合った橋上駅（きょうじょう）とし、東・西ターミナルを自由通路で連絡する）とし、電車の増回に備えるため線路一本と引き込み線三本が増設される。

こうして複線化が実現すると、対向列車を待ち合わせる必要がなくなるため、同区間の所要時間が相当短縮される。電車の運転回数も増回しやすくなって、現在、大阪発篠山口行の普通電車（快速を含む）が二十一回、新三田行が六十四回走っているが、この新三田行が逐次篠山口行にきりかえられる。



次に篠山口以北の複線化については、ご存じのようにＪＲ福知山線新三田―福知山間複線化促進期成同盟会（会長・新

家茂夫篠山町長、副会長・平岩慎吾青垣町長）を中心に着実な努力が積み重ねられている。

篠山口以北は、大阪発福知山行の普通電車が十九回（ほかには大阪―福知山―城崎の特急、急行が十二回）で、大阪から篠山口までは普通電車が四十回も走っているのに比べて回数がずっと少ない。さらに篠山口―福知山間（四十八・一キロ）は駅間距離が長く、無人駅もあって、対向列車を待ち合わせる時間が長い。ぜひ早く複線化して便利にしてほしい、というのが地域の切なる願いである。

他方、ＪＲ西日本の立場からすると、複線化には莫大な資金を必要とし、しかも投資効率が極めて低い。従って「まず利用客をもっともつと増やしてもらわなければ……」という話になる。

ところで、ＪＲ西日本の経営環境であるが、本島三ＪＲのうち、膨大な人口と企業をかかえる首都圏を管内にもつＪＲ東日本が非常に経営成績が良く、次がドル箱の東海道新幹線を運営しているＪＲ東海で、ＪＲ西日本の経営環境が一番悪い。あの大阪圏をかかえているのにも思われがちであるが、関西は「私鉄王国」と言われているように、私鉄が非常に発達し、大阪を中心に神戸、京都、奈良、和歌山各方面とも私鉄がＪＲ線と併行して走っている。ＪＲ西日本が他社にさきがけて本社機構の刷新を行ったりしているのも、このような

事情からだと思う。



私の独断かも知れないが、昭和四十五、六年ごろ、国鉄の大阪駐在常務理事であった一條幸夫氏には数少ない国鉄単独線区である福知山線に対する熱い思いがあったのではないか。単線で、気動車で、東海道本線の大阪―尼崎間を間借りする格好で発着している国鉄単独線区の福知山線を一体どうしたらよいか、との思いである。

丁度そのころ、運輸大臣から都市交通審議会に対し「大阪圏における高速鉄道を中心とする交通網の整備増強に関する基本的計画」について諮問があった。一條常務は、その機会をとらえ、①片町線と福知山線を結び、大阪の中心部を東西に縦貫する片福連絡線を建設したい。②これとの関連で、福知山線の複線電化を実施したいと考え、国鉄本社と熱心に掛け合われた。「国鉄財政がこんなに窮迫しているのに何を言っているのだ」と全役員が絶対反対であったが、一條常務が懸命に説き伏せ、これらを実施するとの決定を見、その趣旨のことが都市交通審議会の答申にもられた。

この答申の趣旨に沿って、宝塚までの複線電化、新三田までの複線化と城崎までの電化が逐次実現し、今や福知山線は見違えるような本格的な都市鉄道に衣替えした。運転回数もふえ、沿線開発も進み、利用者も著しく増加したが、この情

況を昭和四十五、六年当時の国鉄本社の方々が果たして予想されていただろうか。

目下進められつつある新三田―篠山口間の複線化工事にしても、赤字ローカル線であった篠山線（篠山口―福住間、一七・六キロ）の廃止問題とのからみがあるにはあったが、「この区間は複線化するには利用者が少な過ぎるが、広域行政を担当する兵庫県が沿線開発に協力する」との一札を入れた格好で事が進んできている。これは兵庫県の一谷定之蒸副知事（当時）と国鉄の一條幸夫大阪駐在常務理事との合作であるが、さすがに大したものだ、と私は思う。

「利用者をもっと増やしてもらわなければ……」「そのための精一杯の努力はするが、現状のままではどうも……」という「鶏が先か玉子が先か」のような話ではなくて、福知山線とその沿線地域とは共に生き、共に栄えるのだとの気概が大切ではないだろうか。幸い丹波は大阪圏に近い。近々篠山口まで複線になり、片福連絡線ができて大阪の中心部へも乗り入れられるようになる。鉄道は何といっても基幹交通施設。その福知山線を一日も早く便利にしてもらい、大阪圏との結び付きを強くすることによって氷上郡のいっそうの発展を図っていくべきではないかと思う。

福知山線の複線電化の歴史をふりかえって、広域行政を担当する兵庫県の強力な支援、後ろ楯がなければ、複線化の話

は絶対に進むものではないので、このことを老婆心ながら付け加えておきたい。



最後に付け加えて置きたいことは、篠山口以北の複線化問題で最初におつかるのは篠山口―谷川間が篠山川の溪谷沿いであること。新三田―篠山口間のように腹付線増（在来線の線路にびったり引つ付けて、もう一線線路をつくる）ができないことは誰の目にもはっきりしている。生瀬―道場間のように、別のルートを選び、トンネルをはってやるしかなく、大事になる。さらに谷川―柏原間も難工事が予想される。それならば、下滝・谷川と大きく迂回（二十一キロ余）しているのを篠山口から直接柏原へ結びつけてはどうかとの意見がでてこよう。

そうなると、下滝、谷川の両駅、町でいえば山南町が福知山線から見放されてしまう。実は私の母（故人）も私の妻も旧・上久下村、現・山南町出身なので、私もいても立ってもおられない気持ちになる。加古川線を電化してもらい、加古川線から谷川、下滝を通って篠山口へ乗り入れするようにすればよいではないかと言われても、それで八方うまくおさまるかどうか。

それなら、篠山口―谷川―柏原間は単線のままにしておき、柏原以北を複線にしてもらってはどうか。これは私のような

素人のいうことで、ＪＲ西日本がどうおっしゃるか、本当にむずかしい。

このようなことは既に促進期成同盟会でご検討いただいていることと思うが、複線化早期実現のために円満な結論を出して頂きたい。

カルト教団と マインドコントロールについて

池田 達人（氷上町）

昨今、カルトやマインドコントロールといったテーマが新聞やラジオで毎日のように話題になっております。日本人も最近ようやくその恐ろしさがわかってきたようです。

私も長い間、カルトやマインドコントロールに悩まされたひとりとして、これは許せないものと思っております。アメリカマチーブ・ハツサンの本によると、日本の有名なカルトは、オーム真理教、統一教会、創価学会で、これを三大カルトというそうです。

私達は一年半程前から御茶ノ水のビルを借りて、あるカルトについて学び、討論し、脱会者の意見を聞きながら、約百

名のものが集まります。その運動は日本全国に展開し、また、ネットワーク作りをしている A W T C という団体です。

*ではカルトという言葉の定義を。

「カルトとは何らかの欺きをともなった手段によつて、あるリーダー、または組織のもとに人を集め、マインドコントロールの技法を用いてその教義およびリーダーを無批判に受容させ、その集団以外の情報はすべて操作されている（あるいは偏見に基づいている）」として遮断し、その集団がすべての世界であるかのような生活を求める宗教集団である」。

この定義によると、カルト集団とは欺きをともなった勧誘、権威主義的リーダーの存在、マインドコントロールの利用、盲目的服従の要請、情報の遮断、同質群の人による共同体の形成を特性としている。ある教団が、これらの特徴のいくつを示すなら、そのグループはカルト教団と呼ぶべきだろう。なおカルトとは、占いや神秘的体験等をいうのです。

私もかつて、友人からある教団をやめたいとの相談を受け、知人のキリスト教会の女性牧師と協力して脱会させることに成功しましたが、その後、いろいろなやがらせを受けたものでした。あの彼らの大切にするイタマンダラ（ひげ文字）のコピーをはさみで切つて川に捨てた時に、友人は目がさめたようでした。先日も私の友人の所へ、韓国に本部をもつある

宗教団体に入信している高校生が、「三十万円持ってソウルへ行つてほしい」と何度もたずねてきたそうです。が、親御さんから後で電話があり、息子が申し訳ないことですと何度何度も繰り返して言われておりました。

私の所にも毎週土曜になると、ものみの塔（エホバの証人）の青年が伝道にやってきました。完全にはまっている状態ですが、私と一時間話すと少し自信を失くして帰るのですが、一週間後にはまたもとのもくあみでやってきました。組織に戻ると自信を回復するのでしょうか。もう一年近くになります、なかなか効果は薄いものです。家族からの要請があり、一週間ほど人里離れた所でゆっくり話す機会を持てば何とかなるのですが、やはり悪い臭いは根元から断たないといけないようです。

*カルト教団の特徴について。

- 1 権威主義のリーダーがいる。
- 2 教義は絶対で真理はその組織にあると主張する。
- 3 閉鎖的、かつ秘密主義である。
- 4 生活への細かな規制を設ける。
- 5 迫害されているという意識をもたせる。
- 6 恐怖心を植えつける。
- 7 脱会がむずかしい

普通、宗教というものは人々に救いを約束する。キリスト教であれば、愛、平安、希望、喜び、信頼、祝福、解放、達観、等々。しかしオカルト教団によって信者に植えつけられるものは、恐怖心。ここを離れると地獄に落ちる、交通事故に遇う、等々。

*カルトの種類について。

カルトは大きく分けて、

1 宗教カルト

2 事業カルト

3 教育カルト

これはねずみ講、マルチ商法など、虚偽の夢とお金と、人々の為になる、などという嘘をマッチングしてゆくカルトです。私はこれにひかかりました。

自己開発セミナー、自己啓発セミナーなどと称する教育セミナーに多い。私の親戚がこれにはまっております。茨木に本部があるタンポポという集団もそのひとつです。

総じて1、2、3に共通しているのは、知らず知らずに被害者が加害者になっていくという点でしょう。

*マインドコントロールという言葉の定義。

個人の人格（信念、行動、思考、感情）を破壊して、それ

を新しい人格と置き換えてしまうような影響力の体系のこと。多くの場合、もしその新しい人格とはどんなものかが事前にわかつていたら、本人自身が強く反発したであろうと思われるような人格である。

1 正体を隠して近づく。

2 思考停止に導く。

3 外からの情報を遮断する。

4 判断基準が狂ってしまう。

5 社会から分離する。

私はそれを信じている信徒に恨みがあるのではなく、教祖またはそれをおさめる組織体に対しての愛ある攻撃であることを理解して下さいは幸いです。

これらの事でこまっておられる方は、ご連絡ください。

池田 達人 埼玉県志木市幸町三二〇一八

TEL 〇四八—四七三—二五六四

いつも自由に発表させて下さる「山ざる」誌には、本当に感謝しています。

「いつの時代にも、にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをしてみせます」（マタイ24：24聖書）

「かわしろ共和国」立国活動

— 活力ある村おこしを目指して —

上久下悠遊塾クラブ 塾長 村上 彰

平成五年九月十六日の各新聞朝刊（丹波関係版）は、かわしろ共和国立国のニュースが大きく報道され、賑やかな話題となりました。各紙がこぞつて丹波初の「パロディ国家誕生」とか、「仕掛人はお年寄り」といった見出しが躍っています。人口千八百人の農村地域に桃源郷を作ろうとする民間組織として、前日十五日（敬老の日）に山南町上久下地域に「かわしろ共和国」を立国したことは、内外に少なからず話題を与え、関心を呼びました。

立国祭は、先ず「かわしろ共和国女王」さんの入場に始まり、立国宣言、大統領の任命（不肖私が初代大統領に任命されました）が行われ、次いで大統領より閣僚を任命し、官房長官（KYC事務局長酒井恭佑さん）より共和国の国章旗と制服（法被）を披露しました。任命された閣僚は十六名で、JR篠山口鉄道部長をはじめ、地元の小中学校長、郵便局長、自治総代会代表など各団体の代表の方が各長官として入閣されました。

かわしろ共和国の政策大綱については、その後十一月に開かれた閣僚会議において、次の二つの柱をたてて推進して行くことを決定しました。

その一つの柱は「手をつなぐふれあいの広場づくり活動」であります。地域の人々と連帯し、協調しながら、村おこしを進めるためには、まず気軽に参加できるふれあいの広場を提供することが大切と考え、新年には賀詞交歓会、春には川代さくらまつり、夏はスポーツの集い、秋には観月文化の集いや芸能玉手箱と言ったふれあい行事等を主催、又は後援して、地域住民の理解と参加を得ながら推進を図ります。

また学校が休校となる第二・四土曜日には小学校児童とのふれあい行事も考え、また特別国民制度を作って、都市と農村の交流や共和国サミットも開く計画を進めて行きます。

もう一つの柱は「地域の歴史文化伝承活動」であります。

上久下地域には、桧皮屋根葺業という全国に誇る伝統産業があり、従前には多くの技術職人が全国の神社・寺院の屋根葺きに出回っていたのでありますが、時代の移り変わりと共に減少しております。この桧皮葺技術を顕彰し後世に伝えるため、いわゆる「桧皮の里」づくりをはじめ、すたれゆく年中行事の記録保存（ビデオづくり）、旧歴史古道の探査、道しるべ・辻地蔵等の調査、地域の年表づくり、史跡・名勝三十カ所選定などの文化活動にも取り組むこととしております。



この政策大綱に基づいて、単年度における活動計画を立てて実施しているであります。言うまでもなくこれらの活動をフルに推進して行くためには、かなりの資金が必要ですが、幸い県ねりんピック記念基金事業指定による助成金を導入することができたため、活発な活動を展開することができました。

立国した年（平成五年）の十一月には、特別列車「かわしろ号」で伊勢神宮参拝の旅を実施し、参加者百六十人が楽しい交歓をしました。

平年度の活動は地道に取り組み、大きなイベントは五年ごとに実施したいと思っていますが、さて生命がどこまで続くか知れたものではありません。上久下地域に大きな恩恵をもたらしているJRR下

滝駅開業百周年が目の前に迫っておりますので、この祝賀行事は行政ほか各方面のご協力を得て、華やかに実施したいと考えております。

このような構想を具体化することになった発端は……と申しますと、二年前（平成三年）の九月のこと、有志が集まって地域の活性化のために何か役立つことがないかと相談した結果、悠遊塾クラブという組織をつくることにし、二十人の賛同者を得て地域に呼びかけ、共感を得ながら更に幅広い住民参加の「活力ある村おこし運動」を進めていこうと言うことになったのであります。このような経過からして、かわしろ共和国の推進についてはKYC（上久下悠遊塾クラブ）が中核となることは申すまでもありません。

上久下地域は、人口減少、高齢化比率が年と共に高くなって来ておりますが、現象は過疎であっても、心の過疎に陥らないようにと「かみくげ」の四文字をとりいれて「感謝の心で」〈みんな手を取り〉〈苦楽をともに〉〈元気でゆこう〉のスローガンのもと、ふるさと文化活動をさらに大きく強く活発にしてゆき、そしてかわしろ共和国の発展こそが大きな後世への心意気を示すことになり、文化遺産ともなるような大きな夢を持ちたいと思っております。

◆ 関東氷上郷友会 ◆ 人名 録

〔物故者／生年月日順〕

織田 信親のぶちか（柏原）

嘉永三年生。柏原藩最後の藩主。明治維新に際しては官軍側につき、明治二年の版籍奉還によって、二万石の土地と民を新政府に返還、藩知事に任命される。明治四年には廃藩置県によって柏原県が誕生すると、県令となるが九月柏原県を廃し豊岡県となり、東京に移る。九年華族部長局弁事。十五年宮内省華族局。三十三年狩猟官に任ぜられる。関東氷上郷友会の初代会長である。昭和二年七十九歳で没。

田 健治郎（柏原）

安政二年生。渡辺弗措や小島省斉に師事。和田山小学校創設後、熊谷・愛知県庁に勤務。高知県令・神奈川県警部長・通信次官・関西鉄道株社長を経て衆議院議員・貴族院議員となる。九州炭礦汽船株社長・東邦火災役員を歴任後、遞信大臣・台湾総督・氷上郷友会第二代会長となる。関東大震災時農商務大臣兼司法大臣。その後、電気協会会長・樞密顧問官となる。昭和五年七十六歳で没。関東氷上郷友会の生みの親。

安藤 広太郎（柏原）

明治四年生。帝大農科卒、農事試験場に入り勸業博覧会審査官や韓国米綿を指導。ビルマ・トンキン・タイの米作視察。農大講師となり欧米、南米の農業研究。農学博士。試験場長・小作制度調査委員・九州大学教授、帝国農会特別議員・東京帝大教授・農林省顧問・学士院会員・大日本農会副会頭・東亜研究所顧問・東洋拓殖会社顧問・日本農学会顧問を歴任。文化勲章を受け昭和三十三年八十八歳で没。主著「日本古代稲作要綱」

佐々井 信太郎（葛野）

明治七年生。高山寺の大僧正に師事。葛野小勤務の後、四谷の井上小学校長、小田原中学、神奈川県主事。東洋大学教授・神奈川県匡済会常務理事・大日本報徳社副社長・二宮尊徳全集編集。教育審議会委員・自治振興中央会理事・満州国嘱託・朝鮮総督顧問・内務省委員など歴任。公職追放後、報徳福運社理事長。文学博士で著作多数、特に二宮尊徳に関する研究は著名である。昭和四十六年九十七歳で没。

佐々井 一 晃 (葛野)

明治十六年生。神戸電信技術養成所卒業後、成松・佐治・古市・神戸郵便局勤務。その後、葛野・幸世小学校で教鞭をとる。成城中学中退後神戸雲中小学校に奉職。神戸の貿易商好本商店の総支配人となる。大正十五年毎日新聞懸賞論文「五十年後の大平洋」に当選し賞として満州・朝鮮など視察後内務省嘱託となり諸法令を起草。愛国運動家で衆議院議員に当選。昭和四十八年九十一歳で没。

芦 田 均 (天田郡)

明治二十年生。柏原中学・東大法科卒後外務省に入り、ロシア・フランス・トルコ・ベルギーの書記官・参事官を歴任。昭和七年衆議院議員となりジャパンタイムス社長・慶應大学講師となる。戦後日本自由党を結成、幣原内閣の厚相、憲法委員長で活躍。片山内閣の外相兼副総理となり二十三年首相となる。昭電事件で辞職したがが無罪。憲法改正、再軍備の急先鋒となる。法学博士。柏原高校でただ一人の総理大臣である。昭和三十四年七十二歳で没。

織 田 信 大 (柏原)

明治二十一年生。織田信親の嫡男。学習院、慶応大学を経て、東京美術学校(東京芸術大学)を卒業。白木屋百貨店宣

伝部などを経て、画家となる。大正九年、氷上郡公会堂の竣工を記念し「武蔵野」なる百余号の油絵の大作を寄贈。その絵画は現存し、柏原町史料館にて保管している。関東氷上郷友会第三代会長を歴任。昭和三十九年七十六歳で没。

深 尾 須磨子 (大路)

明治二十一年生。大正七年東京日日の詩作で首席。天の鍵・真紅の溜息・斑猫・呪詛・焦躁を出版。昭和に入り候爵の服・牝鶏の視野・葡萄の葉と科学・マダムXと快走艇・丹波の牧歌・イヴの笛・ホルモン夫人と虚無僧・旅情記・ローマの泉・赤道祭・新女性詩集・波まぬ船・永遠の郷愁・神話の娘・哀しき愛・君死にたまふことなかれ・少女の窓・洋燈と花・詩は魔術である・パリ横丁・むらさきの旅情・列島おんなのうた……など著書翻訳多数。詩人でありフルートの名手そして平和運動家としての多彩な生涯で昭和四十九年八十五歳で永眠。

渡 辺 泰 造 (沼貫)

明治二十一年生。明治四十二年本庄家から渡辺家の養子となり岡山・伊勢等へ呉服の行商。大正十二年渡辺製袋所に改組し大阪・東京・名古屋・福岡・朝鮮・台湾・満洲・中国にも工場進出し日本一般製紙品工業組合連合会の理事長に就任。

米穀用紙袋委員長で我国製袋業界に貢献。昭和十五年(勅)氷上育英会や氷上文化顕彰会を創設し文化・民生に貢献した。また氷上愛郷会を組織し理想の氷上郡づくりに献身。関東氷上郷友会顧問。昭和五十二年九十一歳で没。

大槻 喬 (柏原)

明治二十六年生。四十三年柏原中学卒業東京工大卒。宮城県立工業高校、東京高等工業、熊本高等工業、東京工業大学、明治大学を経て東海大学教授となり、その発展に大きな足跡を残した。電気学会会長、工学博士、東工大名誉教授、昭和三十九年氷上郷友会副会長に就任。昭和四十四年七十六歳で没。

常岡 文亀 (柏原)

明治三十一年生。崇廣小、県立柏原中学、東京美術学校(現東京芸術大学)を卒業。結城素明に師事し、昭和三年芸術大学助教授、後教授となる。昭和四年第十回帝展で「鶏頭花」が特選。パリ・ベルリン・ニューヨーク各美術展にも作品を出品。第十四回帝展で棕櫚特選、大日美術院同人。日本各地で個展を開くと共に、シンガポール領事館等各公館用作品を制作。「山ざる」表紙画十数点描く。昭和五十四年八十一歳で没。

西川 政一 (竹田)

明治三十二年生。旧姓須原。大正三年鈴木商店入社、神港商業卒、日商(株)社長、日商岩井(株)社長・会長・相談役。日米友好のシンボル、ポトマック河畔の桜の贈呈主。アジアバレーボール連盟会長、国際バレーボール連盟副会長、(社)日本貿易会常任理事、日本バキスタン協会理事、日印協会副会長、日本インドネシア協会理事、関西スエーデン協会理事、フィリピン協会理事、日本メキシコ協会会長、(社)経済団体連合会常任理事、(財)関西経済連合会常任理事。ブラジル文化勲章、メキシコ文化勲章等受章。昭和六十一年八十六歳で没。

松山 幸逸 (春日)

明治三十三年生。鳳鳴義塾、日大を卒業後報知新聞に入社。その後論説委員、政治部長、編集局次長を歴任。大産鉱業(株)、三恵鉱業(株)へ転属。戦後報知新聞を再興し取締役就任。また東京放送を創立し事業部長となる。(株)タイヘイ、(株)キヨーエー、TBS会館事業所長を最後に悠々自適。明治の気骨を貫いたマスコミの帝王、昭和のドン・キホーテ、号は竹水。「山ざる誌」の生みの親、育ての親である。昭和五十八年八十二歳で没。

有田 喜一（沼貫）

明治三十四年生。柏原中学、東大経済学部卒後通信省に入省。以来、大阪通信局長、運輸省海運総局長、船舶公団総裁を経て芦田内閣の官房次長に就任。昭和二十四年の衆院選で初当選し当選九回。文部大臣、防衛庁長官、経済企画庁長官を歴任、勲一等旭日大綬章を受章。政界引退後は日本海運振興会会長、湊川学園名誉学長、関東水上郷友会名誉会長として会の発展に寄与。昭和六十一年八十四歳で没。

村上 大憲（氷上）

明治三十六年生。十歳で黒井・称名寺へ入門。十三歳のとき成松・宗蓮寺で得度。大正九年より五年間、永平寺で精進。次いで麻布・長谷寺内東京永平寺別院・不老閣待局詰。その後東京矢口禅宗教会を創設、川崎市清浄院、柏原名願寺の各住職を兼務。昭和十三年大乘山曹禅寺を建立したが二十年の空襲で全焼。昭和三十三年再建し地域住民、団体の参禅道場として開放。昭和六十年八十三歳で没。

伴 仲 信 次（春日）

明治三十九年生。関西商工学校建築科卒。山本組に入社し、浜口邸、近藤男爵邸など建築一筋に精励。その後、村上工務店、藤井組を経て昭和二十一年新興建築(株)を設立し専務に就

任。昭和二十四年春日建設(株)を創立し社長となる。建築代理士・一級建築士。昭和五十六年関東水上郷友会第七代会長となる。在任中、八十八周年記念大会を催すなど郷友会発展のため尽力した。また、LC役員、商工会議所役員も歴任。昭和六十二年八十歳で没。

小林 武 治（船城）

明治三十九年生。旧姓荻野。大正十四年柏原中卒後国学院大卒。国学院大学主事・常任理事を経て理事長・(財)私学研修福祉会理事長・(財)日本私立大学連盟理事を兼任。国学院大学では大学院・高校・中学・幼稚園・研究所・学部増設・女子短大・百周年記念会館等の諸施設の整備に多大の功績あり。短歌に造詣深く「眼つむれば無限の時空その上に我が身はあれどすべなかりけり」の人生観。昭和六十二年八十一歳で没。

小 谷 正 雄（柏原）

明治三十九年生。東大物理学科卒、理学博士、東大名誉教授、東京理科大学学長、日本学士院会員、日本学術会議委員、その他各種国際学会委員も兼務。昭和二十三年「電磁管及び立体回路の理論」で日本学士院賞を、四十二年東レ科学技術賞、四十九年「分子物理学及び生物物理学の基礎的研究」で藤原賞、五十五年文化勲章を受章。昭和十三年の「分子エネ

ルギー計算のための積分表」は世界的に高い評価を得ている。
関東氷上郷友会名誉会長。平成五年八十七歳で没。

西山 敬次郎（市島）

大正十一年生。柏原中学、第八高校、東大卒。昭和二十四年商工省入省。その後、経済企画庁、通産省に勤務。産業公害課長等諸課長を経て、昭和四十九年大阪通商産業局長となる。昭和五十一年中小企業庁次長、五十二年貿易局長などを歴任。五十八年衆議院議員に当選し、平和と福祉のため外務委員会と社会労働委員会などで活躍。二十一世紀は丹波の時代」を目指し奮闘。昭和六十三年六十五歳で没。

〈あとがき〉

「山ざる」編集会議で「人名録を作ることになり、今回は「山ざる」誌上に登場された方々を中心にその経歴を掲載いたしました。

もとより、今回掲載されていない方々で郷友会のために活躍された方や、その道で大成された多くの郷友の先輩方々がおられたことと思います。

それらの方々の経歴は、次号以降に順次掲載の予定です。

〈宮野 近〉

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。なお、編集上以下のように分類しております。

- ①ふるさと随想▶ふるさとの関するさまざまな思い出や感想など
- ②近況・エッセイ▶旅行や趣味／世相雑感／私の近況など
- ③インフォメーション▶展覧会／同好会／催し／同窓会など
- ④こんなテーマの原稿も募集しています。

▶ふるさとに残る民話や伝説

▶〈わが出立の時〉ふるさとを離れる時のことなどなど

▶ふるさとの古い写真

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

締切日：原稿はいつでも受け付けております。

次号の最終締切りは
平成8年8月20日です。

原稿枚数：400字詰4枚程度

送付先：〒104 東京都中央区

明石町2-16-501

（株）ホンゴ出版内

『山ざる』編集部

TEL 03-3248-6625

FAX 03-3248-6626

続・氷上政記

宮野

近 (柏原町)

〈はじめに〉

本誌21号(平成二年版)で前編集長の足立源治さんが「氷上政記」をお書きになってから相当の日時が経過した。読者の多くから、その続編を掲載して欲しいとの要望があったが、原本不明で対応できなかった。たまたま村上善英氏が「氷上郡政界物語」を持参してくれたので、ここに続編をご紹介します次第である。

〈降ってきた婦人参政権〉

昭和二十年八月十五日の敗戦を境として国情は一変した。物資欠乏、進駐軍管理、社会の混乱に国民は浮き足立っていた。

昭和二十一年一月一日、天皇の人間宣言、四日の公職追放令は政財界に深刻な衝撃を与えた。十二月十七日婦人参政権成立。大選挙区制限連記制の選挙が実施された。

兵庫第二区は丹波、但馬、西播を区域として定員七人のところへ十五人が立候補した。日本進歩党からは但馬の斉藤隆夫、播州の堀川恭平、八木佐太治、小池新太郎、小笹耕作、

多紀の住野丙馬らが立ち、日本自由党は但馬の小島徹三、山名義芳、氷上の畑七右衛門、多紀の倉垣幸雄。社会党からは氷上の前田力や但馬の田淵寿雄。その他吉田順一、長谷正夫といった顔ぶれ。ときに氷上郡の有権者は四八、八五〇人であった。婦人の立候補者はゼロであった。選挙の結果斉藤隆夫、小島徹三、木下栄、八木佐太治、小池新太郎、堀川恭平、小笹耕作が当選した。丹波勢は枕を並べて下位に甘んじた。

昭和二十二年四月、氷上郡二十五町村長は次の通り決定。
柏原・田村昌義、成松・田中弥三郎、佐治・土田忠治、黒井・大山常太郎、上久下・友井茂次、久下・田村新之助、小川・横山吉兵衛、和田・植野謙治郎、沼貫・塚口規矩治、葛野・安達実、幸世・井上新護、芦田・細見修三、神楽・森田正寛、遠阪・前田広治、竹田・西山謙三、前山・余田源三郎、吉見・能勢村次、鴨庄・丹生実憲、美和・和久忠蔵、春日部、山口貞治、大路・矢持貞三郎、国領・細見育一、船城・井上信、生郷・小森作治、新井・田口猪之助。

県知事は岸田幸雄。参議院議員には原口忠次郎、八木幸吉、藤森真治、赤木正雄、田口政五郎、小畑哲夫が当選。多紀の植村嘉三郎は次点で丹波人は落胆した。全国区では佐々井一晃の顔で奥むめおが上位当選した。

〈佐々木盛雄さつそうと登場〉

戦後二回目の衆議院選挙は中選挙区制に戻り丹波二郡と但

馬五郡が兵庫五区で定員は三名。斉藤隆夫、小島徹三、そして若冠四十歳の佐々木盛雄が当選。「今度こそ氷上郡から当選させよう」……のキャッチフレーズが効いた。

報知新聞の編集局長だった大路の佐々木盛雄が山名、住野、長谷、多田、田中、岩上を押さえて当選を果たした快挙に丹波人は拍手喝采した。丹波の保守戦線統一が佐々木に榮譽を飾らせたと言えよう。

〈県会初選挙〉

氷上郡の県議定員は二人。女性をまじえ九人が立候補。石生・徳田修二、上久下・友井茂次、幸世・芦田玉仙、吉見・芦田克巳、成松・正司玄丈、美和・木下顕太郎、幸世・豊島弥平治、大路・酒井あやの、佐治・中島祐吉である。結果、友井と木下が当選した。友井は上久下村長を兼務、木下も吉見中学校長を兼ねながら県政に参画した。公職兼務が自由だった時代である。

〈有田華々しく政界入り〉

柏原中学を卒業した芦田均（京都府天田郡六人部村生れ）が総理大臣になったのは昭和二十三年三月十日だった。芦田内閣の成立は丹波人をわがことのように喜ばせた。この時の内閣官房次長に起用されたのが海運総局長官だった沼貫出身の有田喜一だった。

兵庫五区は斉藤隆夫(80)、佐々木盛雄(42)、小島徹三(51)、有田

喜一(49)、斉藤秀雄(46)、住野丙馬()が立候補。定員三名。有田がトップ当選。斉藤、佐々木の三人が当選。氷上郡から二人当選という離れ業をやつてのけ世人をあつといわせた。その結果、「但馬人は但馬の候補に投票しよう」の合言葉を生んだ。この一戦は「丹波の有田強し」を印象づけた。

〈二回目の町村選挙〉

昭和二十五年四月、町村長の改選期となったのが十九町村。成松・田中弥三郎(49)、黒井・高槻文三郎(45)、上久下・村上英夫(58)、小川・横山吉兵衛(56)、芦田・細見修三(47)、遠阪・前田広治(56)、竹田・吉見嘉一(62)、吉見・吉見誠夫(60)、美和・芦田恵(45)、大路・山本多吉(59)、生郷・小森作治(61)、新井・田口猪之助(61)の十三町村長が無投票当選。そうした中で六町村は乱戦の結果次の人々が当選した。柏原・田村昌義、和田・植野謙治郎、葛野・植木長治郎、幸世・安田尚熙、神楽・森田正覚、前山・近藤健一。

〈氷上郡から四人乱立〉

昭和二十七年十月の衆院選の結果は有田喜一、小島徹三、甲斐中文治郎の三人が当選。僅かの差で佐々木盛雄は次点となった。この時、氷上からは佐々井一晁、中島祐吉の計四人が出馬。佐々井の票の半分も佐々木に廻っていれば三選の榮に浴していた筈である。乱立が致命傷となった選挙であった。

〈バカヤロ―解散〉

昭和二十八年四月の衆院選の結果は佐々木盛雄、有田喜一、小島徹三が当選。甲斐中、西浦、松岡、田崎、中島は落選。

佐々木は自身も驚く程の大量得点で三度目の栄冠をつかんだ。失意の時六カ月、早くもめぐり来た幸運は自己の得票新記録で飾られた。「たね夫人がこつこつと必勝を祈った千社参拝が神風を吹かせた」との評判であった。有田もみごとシンクスを破って三回連続当選を果たした。

〈昭和三十年衆院選〉

佐々木良作、有田喜一、小島徹三の三名が当選し、佐々木盛雄は次点の涙をのんだ。和田の元老・池田佐太郎が老軀をいとわず事務長となり、一族郎党の健闘もむなく誠に残念な結果となった。労働政務次官として政府の枢要な地位につき、議会人として外交、農村問題に一家をなし、カンどころを心得た言行両面の活躍が華々しかっただけに惜しまれる。

〈佐々木、有田五回目の先陣争い〉

有田、佐々木が顔を合わせて先陣争いの宿縁をくり返すこと五たび。「今度の選挙で当選すれば有田には大臣の椅子が待っている」と言われていた。

一方の佐々木には三年余の冷や飯暮らしへの同情や、本会議で示した実績を高く評価する人も多く、「これ程予想のむづかしい選挙はない」とのもっぱらの噂であった。

選挙の結果は佐々木良作、小島徹三、佐々木盛雄が当選。

有田はわずか三百五十五票の僅差で次点、有田支持者にとってはあきらめきれない少差であった。

〈佐々木盛雄長蛇を逸す〉

昭和三十五年七月第一次池田内閣で小島は法務大臣に、佐々木盛雄が内閣官房副長官になった。その年の十一月の衆院選の結果は有田喜一、小島徹三、佐々木良作が当選。佐々木盛雄は長蛇を逸した。入閣の機会を失った佐々木盛雄に丹波人は同情した。

〈有田待望の入閣〉

昭和四十一年七月有田は第二次佐藤内閣の文部大臣、科学技術庁長官、原子力委員長となった。丹波からは柏原出身の田健治郎、多紀の安藤紀三郎内務大臣に次いで三人目の大臣誕生である。四十二年一月の総選挙の結果有田喜一、佐々木良作、伊賀定盛が当選。

四十三年十一月、第四次佐藤内閣で有田は防衛庁長官で再入閣。四十四年十二月の選挙では小島徹三、有田喜一、佐々木良作が当選。

〈あとがき〉

このあと「水上郡政界物語」は「町自治の多難時代」を詳述しているが本誌での紹介は割愛させていただいた。いずれ、ポスト有田の政界物語の続編が執筆されるだろうが、その紹介は後日を期したい。

平成6年度「郷友の集い」の会

昨秋11月27日、九段会館で開催

平成六年度関東氷上郷友会総会・祝寿会・懇親会は、同年十一月二十七日、東京都千代田区の九段会館で開催された。参加者は総勢六十六名。ちなみに案内状の発送数は千二百二十七通であった。

総会の部では、村上会長あいさつに続き、議案審議に移り、いずれも全会一致の採択を得た。

議案及び採択事項は左記の通り

一、年会費値上げの件

現行千円を二千円に

一、会計年度変更の件

現行毎年四月一日より三月三十一日を七月

一日より六月三十日に（以上いずれも平成七

年より実施）

一、百周年記念事業の件

(1) 平成七年度「集いの会」を創立百周年記念大会とする。

(2) 創立一〇〇周年記念大会発起人承認（本誌25号記載）

(3) 創立百周年記念大会実行委員長に、吉住重造氏を選出。

つぎに、会計報告が足立和巳理事、会計監査

報告が荻野武監事、会務報告が坂上勝朗理事より行われ、滞りなく閉会した。

祝寿会の部では左記の郷友の方々の長寿をお祝いし、ご出席の近藤田治さん、須原逸郎さんに会長よりお祝いの言葉と花束を贈った。今回祝寿を申し上げた方々は大正三年のお生まれである。（五十音順・敬称略）

加藤信太郎（愛知県） 近藤 田治（春日町）

須原 逸郎（市島町） 土田 直吉（青垣町）

田 健一（柏原町）

右を代表して近藤田治さんから謝辞があり、益々盛んな郷友大先輩のなご一層のご健勝を祈って、ひとときわ熱い拍手が会場から湧いた。

懇親会の部は、足立三治さんの乾杯の音頭で始まり、いつもながらのにぎやかな語らいの輪が広がる。

恒例の「お楽しみ抽選会」は、今回も有志の方々のご好意で盛り沢山の景品が用意され、全員もれなくおみやげを手にして、午後三時三十分散会。

当日の出席者と、お楽しみ抽選会景品提供者氏名は左記の通り。

●「集い」出席者（順不同・敬称略）

○青垣町（六名） 足立和巳 足立勲平 足立三治 足立静雄
篠原よね子 平元富美子



○市島町（十名）足立敬子 大槻作治郎 荻野一雄 荻野武

木村つた江 近藤勇 高見秀史 鶴田ゆき子 室井利代

森下千壽子

○春日町（三名）木呂子恵美子 村上末吉 吉住重造

○柏原町（十二名）足立美都子 生田清弘 上村愛子

上山顕 小田晋作 志村勝郎 鈴木和栄 谷達雄

常岡幹彦 野村文子 村上善英 宮野近

○山南町（十一名）池田忍 梶原矢寸子 久保春雄

勢川武彦 田中寛 千葉淳子 中居篤子 仲一聴 東田実

渡辺貴美子 久保良雄

○氷上町（十八名）葦田冬子 足立謙悟 足立正喜

足立知佳子 足立操 足立吉雄 安達健一郎 岸本勲

久下梅次 坂上勝朗 祐安夏恵 高橋礼子 谷口明郎

新田浩迪 長谷川尚 葉山勝 山口和久 渡邊隆男

○多紀・多可郡（四名）梶原清 笹倉強 笹倉郁子

藤田正雄

◎お楽しみ抽選会景品寄贈者（敬称略・順不同）

足立 誠一 テレホンカード

常岡 幹彦 野沢菜

中居 篤子 モカロール

宮野 近 アロエの石けん

高見 秀史 スコッチウイスキー

一五本

一五本

一〇本

一〇本

四本

吉住 重造 紳士高級セーター
 木村つた江 わらびの里「京味楽」
 池田 忍 自分史年表
 岡田 一男 エスカイヤウイスキー
 岡 吉明 織田煮
 足立 和巳 日高昆布
 笹倉 強 演奏会チケット
 村上 末吉 黒大豆栗セット
 生田 清弘 ペン型タイマー
 ロールクリナー
 木呂子恵美子 ハンドバック
 明日香園 白折ゴールド(お茶)
 足立 勲平 テレホンカード
 渡邊 隆男 バスロープ
 大木 正徳 アラームクロック
 近藤 勇夫 せんべい
 沢田みさを 婦人ストッキング二足入
 足立かをる 婦人ストッキング五足入
 出町 京子 思慕里豆
 谷口 明郎 会津手工芸品
 堀井 川 カイロ
 足立 三治 紳士高級セーター

五本
 五本
 三本
 三本
 三本
 一〇本
 五本
 六本
 二本
 三本
 一本
 三〇本
 一〇本
 五本
 一〇本
 三本
 三本
 三本
 二〇本
 三本
 一〇本
 一本

梶原 清 絹大高級婦人ストッキング 一〇本
 野村 文子 紅茶 一本
 関東氷上郷友会 もち吉煎餅 参加者全員
 ●寄付者ご芳名
 ご芳志まことに有り難うございました。厚く御礼申し上げます。
 ます。広告協賛金とともに、会の運営費や「山ざる」誌の製作資金として活用させていただきます。
 高橋世志子殿 二〇、〇〇〇円
 足立 三治殿 一〇、〇〇〇円
 荻野 武殿 一〇、〇〇〇円
 平元富美子殿 一〇、〇〇〇円
 青木修・かよ子殿 五、〇〇〇円
 芦田あつ子殿 五、〇〇〇円
 久下 梅次殿 五、〇〇〇円
 土田 直吉殿 五、〇〇〇円
 塚口 智殿 五、〇〇〇円
 近藤 勇殿 三、〇〇〇円
 高見 秀史殿 三、〇〇〇円
 渡辺 和代殿 三、〇〇〇円
 上嶋 一晃殿 二、〇〇〇円
 村上 末吉殿 二、〇〇〇円
 久保 良雄殿 一、〇〇〇円

懇親会スナップ



商店街のあるべき姿を追求

村上末吉著『店と人と街』

昭和三十年代の初め、それまでの日本人の買物習慣にはなかったセルフサービスのスーパーマーケットがではじめた頃、「客の相手もしない店で買物なんかできるか」とか「食料を一週間分もまとめて買うようなことは日本人はしないね」などと酷評され、あぐくは「スーパー」と出て「バー」消えるから「スーパーだ」とヤツカミ半分にささやかれた。

あれから約四十年、スーパーは消えるどころか大資本の参入によってますます勢力を拡大し、いまや完全に商業地図を塗り替えてしまった。最近では終夜営業のコンビニエンスやファーストフードのチェーン店が若者向けに繁盛している。たしかに、値段も安くて便利ではあるが、こういう店が主役になりはじめてから、商店街に人間の匂いが薄れ、ゆったり買物を楽しむ雰囲気もなくなった。

かつての商店街の活気を支えていた中小小売商が、こういう新勢力の攻勢の前

に青息吐息の状態だ。店主もヤル気を失い、商店街も寂れる一方だ。その状況に危機感を抱いた著者が、住みよい楽しい街づくりのために、中小小売業者よガンバレと叱咤激励し、その繁栄のためのノウハウを伝授したのが、本書である。

著者の村上末吉氏は、言うまでもなく郷友会の会長であるが、本業は建築家。(株)桂建築計画工房を創業し、四十五年間のうちに企画・設計などを手掛けた店舗数は全国で千二百店に及ぶという。本業のかたわら、趣味とする絵画の腕前もプロ並みで個展も数回開いて評価も高い。こんどはこの本を出版されたわけだが、多才にして美意識の高いロマンチストである。

この本の中でも「良い店、良い人、良い街こそ楽しい社会をつくる基本だ」という理念のもとに、永年にわたって蓄積された「店と街づくり」のノウハウが披瀝される。歩いていても楽しくなるような商店街は、まずもって良い店によって構成されなければならぬ。その良い店の条件とは「商品の価格が、質相応に値ごろであって、その商品は感覚的で、住民

のライフスタイルにマッチしていて、店はその品物に自信と責任をもっており、サービスも行き届いている状態」と著者は言う。

商店も農家と同じで、後継者難である。経営に希望が持てないから店を継がない。その結果サラリーマンだけが増え、いまや就業人口の八割近くにも達して、その異常さに危惧がもたれている。われわれ消費者としても、目先の値段だけにとらわれず、自分たちが住んでいる商店街が寂れて殺風景にならぬよう配慮していく必要がある——この本を読んでそんなことも考えさせられた。

〈池田〉

(商店建築社発行 A5判一六八頁
定価一五〇〇円)

■本欄への投稿歓迎

会員に關係する本、

故郷に關係する本などを
紹介してください。

投稿をお待ちしています。

人間は何をしているのか

青木慧著『自然に学ぶ丹波山猿塾』

日本広しと言えどもヤマザルは丹波の山奥にしか棲息しない（そんなことはないか）、そのヤマザルが棲む自然と共生する「塾」が、丹波は市島町中竹田に出現した。「山猿塾」。塾長は、この本の著者、青木慧氏である。この春まで三十五年間東京暮らしをしていたが、自宅も売り払い、東京生まれの奥さんを伴っての覚悟の帰郷である。

著者は、私と高校時代の同窓、したがって来年は還暦の六十だ。さては都会砂漠に嫌気がさして早々にイントンをきめこんだか、と思いきや、さにあらずさにあらず。拠点は丹波の山中に移したが、「農」と「脳」の作業を兼業して地歩を固めつつパソコンを駆使した著作活動を通して人間社会に情報発信を続けようという構えなのだ。

彼はフリージャーナリストとして、この三十五年間に二十五冊もの著作を出版してきた。その本の多くで、トヨタ、ニッ

サンと日本を代表する自動車企業の非人間的な経営に鋭い批判の矢を向けてきた。また世界の巨人企業IBMを相手どって「IBM欠陥パソコン」という過激？な本も書いてきた。最近では「いつまでも食えると思うな」を出し、農村と農業を荒廃に追いやる経済システムと農政に警告を発している。

そして、この本の冒頭に言う。「人間はいったいなにをしているのか」と。

「現代の科学技術は、いつからか企業利潤を追求する道具に成り下がっている。

（中略）自然の原理に逆らって地球資源を食い尽くしつつ、自滅の道を歩んでいる」。その自滅から人類が生き残る道は「ただ一つ、あらためて自然の原理、法則を学び直し、自然の摂理に従っていくことである。科学の原点に立ち返ることである。私はこのことに気づき、まず自ら自然に学び直し自然の原理に即して生きていこうと考えた。私たち夫婦だけでなく、やがてはより広く自然から学べる場として山猿塾もつくろうと構想していた」と、その意図を述べている。

「山猿塾」の建設は、著者の出身地・

市島町で耕作放棄になっていた棚田を手し、夫婦だけの実験的なテント生活から始まった。一年前の孤独な第一歩であったが、その体験を著者愛用のパソコン通信に乗せると、あちこちから賛同者が現れた。会社員やら公務員やらがパソコン通信で、それぞれの夢とメッセージを交換しながら、やがて現地でキャンプ生活を楽しむようになり、共同で丸太小屋が建設されていく。

本書は、その過程のつぶさな報告であるが、その大部分を占めるパソコン通信なるものが、こんなにはほのほのと、しかもリアルタイムでそれぞれの思いを交信できるものと、はじめて知ることができた。「山猿塾」は、これから本格的な建設が始まる。「人間はいったいなにをしているのか」著者の問いかけに感銘しつつ何もできない自分に代わって、どんな理想郷を実現していくか、次の報告が待たれる。

〈池田〉

（青木書店発行、四六判二五四頁、定価一五〇〇円）

展覧会

●可部美智子陶彫展

子供のあどけない表情を造形化して人気のある可部美智子さんの陶彫展が去る七月二十一日から一週間にわたり伊勢丹新宿店のファインアートサロンで開かれた。「いつもいつも微笑を忘れずにいてくれる子供たち。その周辺に愛はきらめきあたたかい」と可部さんのメッセージが添えられ、会場もほのほとした雰囲気包まれていた。



初秋名月(あね・おとうと) 姉(高さ35cm、巾36cm、奥行26cm)
弟(高さ27cm、巾30cm、奥行20cm)

撮影・若上清一郎

同好会

●氷上ゴルフ同好会

〈成績表〉

- 第五十七回 多摩カントリークラブ
平成六年九月十三日 参加者十二名
優勝 大石佐代子、二位 渡辺圭造
三位 川畑明光、B B 細見次郎
- 第五十八回 東松山カントリークラブ
平成六年十二月二日 参加者十二名
優勝 渡辺喜美子、二位 川畑明光
三位 渡辺隆雄、B B 村上久美子
- 第五十九回 柴カントリークラブ
平成七年三月九日 参加者十一名
優勝 岡林逸男、二位 岡林京子
三位 川畑明光、B B 足立謙悟
- 第六十回 河口湖カントリークラブ
平成七年六月一日 参加者十一名
優勝 松下文雄、二位 岡 吉明
三位 岡林京子、B B 足立謙悟
- 第六十一回 日本カントリークラブ
平成七年十月六日予定

〈連絡は左記へ〉

横浜市西区岡野一丁目十三番十三号

ミワ電気工事株式会社 社気付

氷上ゴルフ同好会

TEL 〇四五—三二二—五二九一

FAX 〇四五—三二二—五四一八

この会も、早いもので六十一回目を迎えることになりました。

この間には何人かの会友が物故されましたが、その殆どの方がゴルフをした後でか、行く途中で倒れました。

まさにゴルフを好むものにとつて理想の死に様ではないかと、亡くなった方や周囲の方には大変失礼ではございますが、そんな思いが致します。

仕事を離れ、楽しみと健康のためのみにするゴルフは実にいいものです。

「死が汝らをひきさくまで」とかつて誓ったごとく、私とゴルフを引裂くまで、心行くまで楽しみたいものです。

多くの未だ参加されていない郷友の皆様のおいでを心よりお待ちしております。

お祝い

●足立さつきさん結婚

春日町出身のオペラ歌手、足立さつきさんと、株式会社ソニーの社員菊田靖氏との結婚式が平成七年二月十八日、市ヶ谷ルーテル教会で挙行された。

結婚式を祝うパーティーは赤坂プリ



ンスホテルで三百余名が参加し盛大に催された。官民の名士のあいさつ、オペラ歌手数名による友情出演、後援会員による合唱、新婦の感謝をこめた熱唱と続き感動と興奮の集いであった。新婚旅行は七月にウイーンフィルと公演の打合せを兼ねてウイーン、イタリアへ。

同窓会

●柏高七回生関東支部同窓会

柏高七回生関東支部では、還暦前年の行事として、同窓会を盛大に実施しようとして話し合い、折から開催中の水郷・潮来(茨城県)の「あやめ祭り」の最もにぎやかな六月十六日・十七日の中日に、あやめ祭の主会場たる前川あやめ園前の「潮来ホテル」で開催し、浜松在住の鈴木智丈氏(旧姓井谷)をはじめ会員の約三分の一が参加して、盛況裡に終了いたしました。

第一日は、朝から付近でゴルフを楽

しむグループ、近くの鹿島神宮に御参りした後、五百種百万株の咲きみだれる「あやめ園」をじっくり見学するグループ、あるいは水戸黄門ゆかりの「あやめの碑」等、名所旧蹟を回りながら地元の名産に舌鼓む者、夕方東京の会社から直行する者等集合時間までに三三五会場の潮来ホテルに到着しました。

同窓会(懇親会)は、一八・三〇から同ホテルで新鮮な地元水郷の旬の味覚を堪能しながら、お互いに過ぎ去った青春時代の思い出や友人、そして現在の状況を語り合い、時の過ぎるのを忘れてしまいました。ホテルの案内書に「人集い、語り合いて和生ず。人和み、笑顔輝きて、粋を語る。身を尽くし、心尽くして真心を知る。華やかに、雅やかに、今宵の同窓会は心ゆくまで」とありましたが、ほんとうにその通りとなりました。

宴の後は、二次会そして各室で、空が明るむ頃まで話し合う同窓生もみら

れました。

第二日は、早朝から名花が競い合っている「あやめ園」を再度見学した後、遊覧船に乗り、女船頭の案内で十二橋めぐりを行い、対岸に咲くあやめやあじさいを見て、初夏の潮来を満喫いた



しました。天候も昨日と異り快晴で実にはすがすがしい遊覧でした。

「快晴の常陸利根川の川面に浮かぶ一艘の小船、そこには暖かい柏高七回生の出会いと、語らずとも自ずから理解できる友の心」がありました。

その後、参加者の車に分乗し、佐原市立水生植物園に行き、今を盛りと咲き誇る一五〇万株のあやめ（花菖蒲）や咲き始めた睡蓮等の水生植物を全国から見学に来ている人達に押されながら園内を見学し、他では味わえない初夏の水郷をたのしみました。「水郷には、潮来花嫁とあやめが、よく似合う」とか……。

水生植物園で楽しんだ後、佐原駅で次回の同窓会での再開を約し、還暦前年の一泊旅行の幕を閉じました。

「同窓会それは忘れかけている自分の青春に出会うことです。当たり前のことでも、会場では特別なものに変わって行きます。だからすばらしいのです。」

【同窓会余話】

水郷筑波国定公園・潮来の「あやめ祭り」は同地の年間最大の行事で、この期間（六月一日～三十日）は、全国から見学者が集まり、ホテルは前年から予約者が多く、飛び入りはむずかしいと言われておりますが、今回潮来で一・二を競う立派なホテルで同窓会が開催できたのは計画担当の野村豊氏（春日町出身）の献身的な御努力とともに、地元潮来に嫁がれて地元の人になりきっておられる柏原町出身の陶山笑子（旧姓村上）さんの御高配・御支援の賜です。参加者一同感謝いたしております。

「同級生とは、利害を超越し同級生のために何かしようと献身的に行動し得る者」と定義づけられるとすれば、私などまだまだ未熟だと痛感いたしました。

〈森田 宏・記〉



井本 義一さん

昨年十一月に初孫が誕生しまして、人生順送りの喜びにひたっている昨今です。

(7・5・12)

飯田 光雄さん

新しい『山ざる』をいただくたびに、

もう一年経ってしまったのかと、月日の経つの早いことに驚いてしまいます。

今年も立派な『山ざる』ありがとうございました。

(6・11・11)

上田 譲さん

私事、十一月三日に勲五等旭日章を受章いたしました。

(6・11・21)

植木 一夫さん

今回は出席と楽しみにしておりましたが、当日町内会の行事で、残念ながら欠席と相成り、誠に申し訳ございません。次回はと、楽しみに致しております。

(6・11・17)

内田 泰代さん

丹波からの便りに、いつもうれしく思いつつ、年経るごとに関西にもどりたい気持ちの強いこの頃です。

(6・11・16)

久米 裕さん

小生の名簿、出身地「柏原」となっていますが、父の勤務の都合で、佐治(七



年)、黒井(二年)、柏原(二年)の居住でした。なつかしい想い出は、やはり佐治が一番強いです。足立勲平君と同窓です。出身地「柏原」を「佐治」に変更してください。

(6・11・7)

国村 きぬゑさん

郷土誌なつかしく拝見しております。先日お送りいただきました二十五号、柏原に帰ったようで、なんべん読んでも「ニヤリ」としたのは、編集後記の一番おしまい。

「ほんまに、なつかしかったでつせ」

たまには丹波弁会話ページもお願いしたいです。

「さむなりまっさかい、からだに気をつけて、元気でくらしとくんはれ！」

(6・11・15)

河野 征美さん

『山ざる』をお送りくださって、ありがとうございました。今回も読ませていただいて、私の知っている人物が、あるいは出身地の同じ人が投稿されている記事

を非常になつかしく思い、その方の顔を、またどこに住んでおられる人かな、どんなところかなと思ひながら、故郷を想いました。

(6・11・11)

近藤 田治さん

このたび、傘寿の祝寿会にお招きいただき、ありがたく存じます。折角の機会でございますので、遠慮なく参上させていただきます。

(6・11・3)

莊 正衛さん

亡父益衛は青年時代に、田健次郎、松本剛吉両先輩のお世話になり、現在の郵政省に入り、『青雲の志』を抱いて海外を志望。日露戦争時代、日本北京郵便局長在職中に客死しました。彼は在京中、関東水上郷友会に入会した記録が残っています。父子二代百年お世話になっています。深謝感無量です。(6・11・30)

青木 修さん、かよ子さん

拙稿掲載ありがとうございます。

『山ざる』誌を、ふるさと出身の証として励みと自戒の糧にしたいと思います。

田舎で待っている母にも一冊送ってやりたいと思いますので、もし余分がありましたら譲ってください。

(6・11・9)

須原 逸郎さん

傘寿とてお誘いをうけ、誠にありがとうございます。一時は欠席の通知を差しあげたと存じますが、折角ですから出席させていただきます。

(6・11・9)

瀬々 妙子さん

ご案内ありがとうございます。前日二十六日に娘の結婚式があり、おそらく当日はやれやれと一休みすることになると思いますので、今回も出席できません。あしからず。

(6・11・18)

田中 正博さん

一度出席し、だれかなつかしい人達に逢えるといいな思っているのですが、仕事とのタイミングがあわず残念です。

今回もモザンビークへTVDキュメンタリーの仕事で、十八日間ほどのロケです。

(6・11・8)

谷垣 尚さん、富子さん

『山ざる』二十五号ありがとうございます。写真をはじめ、なつかしい消息が一杯で、たいへん楽しませていただき、また名簿はとても助かります。

(6・11・14)

常岡 昭さん

去る九月、長男寛の執刀にて白内障の手術を受けました。経過はすこぶるよく、治療を再開できるようになりました。

(6・11・11)

能勢 徹さん

『山ざる』二十五号ありがとうございます。掲載されている故郷の写真、毎度のことが胸にジーンときます。会員名簿を見て、私の知っている友がたくさん関東に住んでいることを知り、嬉しく思うと同時に、心強く感じました。『山ざる』よ永遠に。

(6・11・21)

葉山 勝さん

家内(たづ子)が水上町朝坂の出身ですが、今回出席できないので、私が参加

させていただきます。亡き母も柏原町上小倉の出身で、私は子供の頃、約一年崇広小学校でお世話になりました。今でも丹波が大好きで、年に数回帰ります。

(6・11・3)

林田 孝子さん

御一同様のご健康をお祈り申しあげます。私は九十四歳の老人になりました。無事に日を送っております。

(6・11・3)

藤原 智徳さん

『山ざる』なつかしく拝見しました。近ごろ年齢のせいかなにかにつけ丹波が恋しくなってきました。集いの会の開かれる九段のあたりは、私には戦後の神田須田町へかけて、青春の一ページです。名簿に磯畑脩ちゃんの名前をみつけて、なつかしく思います。奥さんはたしか市島の方だったと記憶しています。

(6・11・5)

若森 敏郎さん

ODA出資額が世界第一位の日本です

が、出資すれども口出さずの建前から、日本のプラント輸出はこのところ伸び悩み状況にあります。ODA出資はみなさんの税金ですから、日本企業のプラント受注につながる方策があつてしかるべきと考えます。なにはともあれODA関係最前線で働けることを感謝しております。

(6・11・7)

渡辺ひろ子さん

来年郷友会が創立百周年を迎えることは、よくもここまで皆様のご努力のあればこそと、感謝のほかございません。その道程には忘れることのできない、戦争の痛手を思い、この平安な時代に生きていられることを、ただただ感謝いたしているしだいです。

(6・11・11)

〈訃報〉

平成七年八月三十一日までに事務局に届いたものです。

謹んでご冥福をお祈り申しあげます。

足立 俊亮殿	平成六年二月十六日
稲次 悌二殿	平成五年
大岡 弘殿	平成六年二月
奥原 隆殿	平成六年一月二十三日
須田十史子殿	平成七年
東後 一美殿	平成五年一月
畑中 慶次殿	平成六年六月二十日
淵上 綱蔵殿	平成六年九月八日
望月はる子殿	平成七年五月十五日

丹波の動き

('94・8・'95・6) — 丹波新聞の見出しから —

■ 94年8月

4日○春日町で異常温水対策本部を設置

家畜や農作物に大被害

○水不足もなんのその 水上町で水

の川いかに下り大会

7日○一か月以上続く真夏日 八月二日

には最高気温三十六・五度の過去

タイ記録

○農家用水確保に懸命 青垣町中佐

治で新しい井戸掘り工事

○丹波少年自然の家は阪神と丹波を

結ぶ、ふるさと菜園交流事業で三

十区画募る

11日○柏原町長に谷口氏当選 安心して

もらえる町づくりへ渾身の努力

○納涼求め大にぎわいの日ヶ奥キヤ

ンプ地周辺(春日町多利)

○水上郡昨年の人口動態 出生六九

六人、死亡七九四人 三大死因

(心疾患、がん、脳血管障害)は

変わらず

14日○早生のフクヒカリ稲刈り始まる

例年より十日早い(春日町棚原)

○柏原町でステ女の命日に句会を開

く 各地から俳句愛好家が出席

21日○四町(柏原町、山南町、市島町、

春日町)の広域斎場建設で借地契

約の仮調印 柏原町下小倉地区に

平成十年春の完成めざす

○評判呼ぶ青垣町稲土の「銚子ヶ水」

猛暑の今夏も涸れずこんこんと湧

き出る

○市島町の大杉ダム底をつき、開拓

田七・五ヘクタールが全滅

○猛暑忘れて総踊り 篠山町のデカ

ンショ祭りに十五万人の出入

25日○柏原町は生活ゴミの焼却灰残渣処

理の件で上野市(三重県)に謝罪

し覚書を交わす 年内に灰処理を

確認

○春日町の七日市遺跡で平安後期の

屋敷跡出土「春日郷」の中心地?

○青垣町の養殖アマゴが水温上昇で

三トン死ぬ

○水上町成松の愛宕祭り 伝統の迫

力の造り物

○柏陵同窓会百周年記念誌の資料提

供の呼びかけに応え女流俳人の細

身綾子さんが句集を母校の同窓会

に贈る

28日○水上郡内の品種別作付面積は「コ

シヒカリ」が七〇%超す 豊作型

の本年産米(兵庫食糧事務所柏原

支所まとめ)

○篠山の「花の木」が特産品をつかって郷土色豊かなフルコースのオリジナル料理を考案

■9月

1日○来春の高卒予定者に対する丹波地方の事務業の求人状況が二年前の求人数の半分程度に悪化

○篠山ABCマラソンの申し込み者増加で抽選により一万三千人選ぶ
4日○丹波地区の百歳以上老人は八人、八十八歳以上高齢者は、千百九十八人に

○柏原町議会原案修正で一般会計予算可決

○異常高温で農作物など二億九千万円の大被害（柏原農協まとめ）

8日○衆院小選挙区の区割りについて丹波地方の関係者は、人口優先主義に不満

○青垣町民センターで「もめんと暮らし考えるフォーラム：in丹波」開催 全国各地から二百人参加

11日○新兵庫五区の有権者三十二万九千七三八人

○柏原の農業グループが無添加イチジクジャムを悠遊の森で販売

15日○水上町議会は足立議員を証言内容の虚偽陳述として柏原署に告発町長問責決議案も可決

○山南に丹波最大規模の特養ホーム「山路園」が完成し入所開始

18日○水上町議会は町長給与を六か月間助役、収入役は二か月間20%の減額処分を決議

○市島町の梶原遺跡で奈良時代の木棺墓が出土 埋めてから火葬をした形跡あり墓制研究にとって貴重な資料

22日○水上町絹山地区総会で町営斎場受入れ合意 平成八年春のオープンめざす

○青垣町議会の議員定数調査特別委員会では二人減で報告 議長発言めぐり空転し会期を三十一日まで延

長

○秋の霽囲気いっばいの今田町の「四秀彩々展・秋」を二十五日まで開く

で開く

25日○青垣町婦人会が会員数や班が減少し休会 組織の存在ピンチ

○市島町上垣で年末の渇水期に対処して井戸工事

29日○山南町和田地区総代が、ゴルフ場開発推進を町、町議会に要望 県は一年半の着工延伸を許可

○青垣町社会福祉協議会が岩滝町（京都府）から温泉の湯を運びお年寄りに入浴サービスをする念願の事業が十月からスタート

■10月

2日○柏原町の三役が半年ぶりに揃う

○八日から十日まで「丹波篠山味まつり」名物はサバずし、篠山ビーフの丸焼き

6日○青垣町議会の議員定数二減決まる

来春の選挙から適用

○氷上町氷上の加古川沿いに災害時

の緊急活動用に河川防災ステーションを整備

○春日町国際交流会が日韓交流団を

歓迎 両国の農業問題で懇談

9日○柏原町のゴミ焼却灰問題が十一か

月ぶりに円満解決し今月中に全量

搬出

○柏原町北中の三原遺跡で横穴式石

室(古墳時代後期)が出土 珍し

いヒスイの勾玉も見つかる 近く

には同時代の群集墳

○山南町梶の八坂神社氏子らの寄進

でお社再造営

16日○東小改築工事入札で謝礼受取り収

賄で小森氷上町長逮捕 前議長や

業者ら三人贈賄

○柏原町鴨野地区の文書 四百年前

(慶長五年)から連綿と年ごとの

出来事示す 天保大飢饉の記述も

ある

20日○春日町栢野の一の宮神社の本殿改

修祝って六十年ぶり「伊勢神楽」
を奉納

23日○小森町長が辞表提出

○バスで行く「秋の丹波紅葉三山」

神戸三宮から十一月に七回運行

石龜寺―円通寺―高源寺をルート

化へ

○十一月二日から花と生きる常岡文

亀展を丹波文化会館で開催

○柏原町歴史資料館では柏原藩「維

新群像」企画展

27日○炭焼きツアーだよ お昼は「松茸

弁当」(西紀町シャクナゲ村)

30日○氷上町立植野記念美術館完成 石

造りの建物が注目

○待望の和田橋(山南町)完成

■11月

3日○JR篠山口駅「森の駅」をテーマ

に設計着手

○春日町三井庄の小規模生活ダム

(三玉ダム) 湛水

○貝原知事大差で三選 丹波の得票

率は八十五%

6日○「丹波紅葉三山めぐり」阪神から

の第一便は四十二人

10日○氷上町営斎場計画で議会が土地取

得議決 周辺整備で音楽堂なども

○西紀町が二か所で定住促進を期待

し、初の分譲宅地に着工

○高源寺の名僧弘厳和尚の遺墨展

氷上町の骨董店「長久堂」で「塞

山拾得」十五点を一般公開

13日○十五日に狩猟開禁 柏原署は事故

防止呼びかけ

青垣町の岩屋山は狩猟禁止

○氷上町北田井の不動尊の籠り堂が

十三日に大護摩供養

17日○大物イノシシ続々と篠山町乾新町

の「お、みや」へ持ち込まれ丹波

の味が全国へ

○市島町の民俗資料館の特別展で白

毫寺の宝物を公開

○春日文化ホールで第六回全国公募

「春日水墨画展」に百五十六人が

二百三点を出品

20日○兵庫食糧事務所の柏原支所まとめ

豊作だった本年産米 出荷量が大幅に増える

○柏原町石田の「太鼓やぐら」そば

に雨情の歌碑（柏原小唄）建立

24日○平成七年度の公立高校募集定員は

柏原高で一級減、篠山鳳鳴高は一級増

○市島町上田の三ツ塚史跡近くで白

鳳時代の遺物出土（氷上郡教委の調査）

○兵庫・青垣もみじの里健康マラソ

ンで二十四府県から一、八六九人

が力走 来年は国際大会に発展を

27日○不景気のあおりでゴルフ場利用者が減

○来年は「イノシシだ」今田町下立

杭でエトの置物づくり急ピッチ

12月

1日○氷上町長選町を二分 十倉昭三氏

と篠崎一郎氏が激突

○氷上町議補欠選は無投票で井上義昭氏当选

○ふるさと菜園交流事業で丹波少年自然の家のダイコン祭りの集いで

秋野菜の収穫に大喜び

4日○山南、柏原を結ぶ幹線道 奥野々トンネル着工へ

○柏原町下水道浄化センター事業推進

北山地区で起工式

○柏原八幡神社の一の鳥居の笠木取

替えにより棟札から寛永二年（一六二五年）柏原藩主二代目信則の

寄進によるものと判明

8日○氷上町長に十倉氏初当选

○初登庁の十倉町長「金権体質除去に努力」と訓示

11日○柏原町の町民が焼却残さ資源化施設や斎場用地に対する公金支出が

ずさんであると指摘し監査請求

○春日町で公共下水道工事の黒井浄化センター十五日に起工式

15日○氷上町助役、収入役が辞職願

い

十倉町長は「慎重に対応したい」

○山南町谷川八区の子供会の「米づくり体験」をしめ縄づくりでしめ

くくる

18日○市島町の大杉ダム貯水量回復せず

異常渴水続く 来年の稲作が心配

○丹波路に初雪（十二月十六日）昨

年より一週間早い

○JAひかみ市島支店でみそ作り作

業が始まる

22日○青垣町大名草でウスとキネづくり

に大忙し

25日○今田町に県立陶芸館 陶の郷北側

山麓で整備

○柏原町議会議員提案の定数減で紛

叫

○大路の猪肉専門店「やまひで猪肉

店」が春日町栢野のバイパス沿い

に開店

29日○山南町はJR谷川駅前開発整備工

事に着工

○氷上町森林組合が山林作業員確保

に対応して宿舍を建て就労促進

○早朝の「ベルマート柏原店」へ二人組強盗 店長縛り八百万円奪う

■95年1月

○新春座談会（氷上・多紀郡の県議と丹波県民局長）

(一)丹波の森
森構想を軸に地域づくり

(二)交通網整備

篠山口以北の複線化運動にはJRに地元の熱意をみせること

(三)下水道

予定以上の下水道普及 維持管理が今後の大きな問題

(四)一郡一市

将来的には広域行政を 合併はもの刃のやいば 判断は住民がする

(五)高校問題

氷上西校の存続には移転が必要な時期が来ている。一月に地推協と県教委が話し合う。

(六)丹波の明日に向って

県下各ブロックの中で丹波は所得

水準が一番低い。とに角所得水準を上げること

8日○不況吹き飛ばせノ市島初えびす

○柏原町の歴史を楽しむ会が新入会員募集 ことしのテーマは「八幡神社を知ろう」

12日○多紀広域行政し尿処理施設あざざり苑完成

○和田中が頭髮自由化 氷上郡内では最後

15日○村上旭県議が引退表明 後継者の選考は未定

○丹波地区の新成人は千八百六十六人（男九〇〇人、女九六六人）

○柏高制服を今春の新人生から順次男女ともブレザーに

19日○一月十七日早朝「グッラッ」に恐怖 丹波でも道路に亀裂など

○高値呼ぶ大納言小豆は京都の和菓子に必需品 百トンを選別出荷

22日○兵庫県南部地震に丹波各町が救援

活動 握り飯飲料水など

○現代美術の登龍門 エンバ美術コンクールを氷上町立植野記念美術館で二月八日から開く

26日○兵庫県南部地震で被災地の小、中学生約百五十人が丹波へ仮転校

○市島町三輪小で屋内運動棟が完成
○流感猛威ふるい学年や学級閉鎖相次ぐ

29日○兵庫県南部地震による在来線の不通で加古川線乗客であふれかえる

JRでは、車両増や駅員増で対応
○町制四十周年で町誌発行 予約注文の募集始める（春日町）

■2月

2日○柏原、山南、市島、春日の四町が平成十年春の完成をめどに広域斎場準備会が発足

○氷上郡の木材業者が被災者に安心して住んで働ける環境をと職・住を提供

○氷上郡内の今春入学の児童生徒数

が二十人以下の小学校が十四校

5日○鴨庄の農業集落排水が完成 供用開始は平成八年一月一日から

9日○丹南町長選 杉本氏が新人の田中氏に大差で三選果たす

○平成六年分の農業所得 水稻の豊作で大幅上昇(柏原税務署管内)

12日○県の合同就職面接会に氷上郡から十四社が参加し、被災者の再就職を支援

○氷上郡内のボランティア登録は、三四五人 炊き出しや電話応対、事務など神戸の避難所へ連日派遣
○丹文協と丹波文化会館は丹波の民俗芸能の資料収集で古老らからの聞き取り調査を行う

19日○はたして大丈夫なのか? 大地震と丹波の地盤 平野部は軟弱な沖積層、警戒必要な三峠断層(京都府亀岡市から福知山市)

○今田町が阪神への通勤圏内で注目を集め世帯数が「一千」を突破

26日○丹波のゴルフ場どこも利用者激減 回復の兆し見られず

28日○丹南町が篠山口駅西の町有地を仮設住宅用地に提供を県に申し出

○柏原厄除大祭の人出十万三千人 義援金三六三万円集まる

■3月

2日○県の新年度予算案 丹波の森公苑や福知山線複線化(新三田―篠山口間)、柏原病院に「MRI」導入

○「兵庫県南部地震と丹波の断層」を演題に日本なまずの会の荻野さんが山南町で講演「阿草断層」(全長二〇キロ)に触れ注意を呼びかけた

○丹波五高校で卒業式 一四三二人が巣立つ

5日○丹波各町で新予算案相つぎ発表 財源難で苦しい内容

山南町〓総額八億八千万円
コミセンや駅前開発、和田小体育

館改築など

市島町〓総額八三億九千九百万円

身障者に福祉タクシー

青垣町〓総額五八億四千万円

インター周辺に道の駅

春日町〓一一七億八千万円

黒井小屋内体育館を改築へ

○篠山町の梶原康弘氏が新進党候補者コンテストに合格し総選挙への出馬資格得る

9日○三町が新予算案発表

柏原町〓総額七二億三千万円

柏原中プール全面改修など

氷上町〓総額一四〇億四千万円

「学びの森」整備で図書館建設など

西紀町〓総額四七億九千万円

下水道整備を全力で推進

○丹波の天台宗七寺院が丹波七福神

霊場開設

一番〓神池寺(市島町多利) 恵比寿

二番〓済納寺(市島町上田) 毘沙門

天

三番〓白毫寺（市島町白毫寺）布袋
四番〓桂谷寺（春日町野上野）福縁

寿

五番〓常勝寺（山南町谷川）寿老人
六番〓高蔵寺（丹南町高倉）弁財天
七番〓大國寺（丹南町味間）大黒天
〇高校入試の志願者数 氷上西で五人の定員割れ、氷上高、産高でも

12日〇丹南町の新予算案 総額九五億三千六百万円 複線化関連に十五億

円南矢代、草野両駅前整備も

〇春日町の進修小学校は卒業記念行事で錦鯉の稚魚三百匹を放流

16日〇氷上郡新年度方針で各校で児童用

コンピュータの導入図る

〇山南町岡本の薬師堂の薬師如来像

（国の重要文化財）を四月二日に

三十年に一度の開帳

19日〇氷上・多可郡の共同し尿処理場南

桃苑の改築工事完成 運転管理も

コンピュータで一括制御

〇篠山町は姉妹都市アメリカワシン

トン州ワラワラ市へ「丹波篠山太鼓」を中心に親善使節団を派遣

23日〇氷上町森林組合は山林作業員養成

のため応募十五名の中から三名を選考 就労者宿泊施設「木こりの家」二棟も完成

〇和田橋下流に「校回廊」牧山川の

堤防にソメイヨシノ五十一本を地元役員が植え込む

26日〇柏原町南多田の国道一七六号線石

生バイパスでケヤキなど植樹帯整備

〇丹波年輪の里にあるハバロフク地方からの贈り物の木製遊具「子供

娯楽園」腐食ひどく建て直し、今年の秋にも完成

30日〇丹波地方の高齢化率一段と進行

西紀町をトップに篠山、青垣、春日、市島、山南、氷上町の七町が

二〇％台

〇市島町上垣の大勝寺で三十三年ぶ

りにご開帳 護摩堂や鐘堂の落慶も

■4月

2日〇氷上、多紀郡の小中学校校長の異動

小学校〓安達凱夫新井小学校長、佐野忠義東小学校長、足立剛中央小学校長 一色初代南小学校長、西垣正佐治小学校長、大概忠司黒井小学校長、細見潤之介吉見小学校長、酒井美智代八上小学校長、奥山普茂村雲小学校長、

西山浩今田小学校長、後藤泰子西紀

小学校長、小山敏日置小学校長、小嶋

毅篠山養護学校校長、吉住貴代人大

芋小学校長、津田善光後川小学校長、

渡辺榮司本庄小学校長

中学校〓大西克彦多紀中学校長、山田

義一郎西紀中学校長

6日〇青垣町総合運動公園オープン 四

月中は無料で開放

〇春日町新庁舎で業務スタート

13日〇市島町市島・藤野地区に排水ポン

プ設置で冠水の心配無用に

○春日町黒井駅をロータリーにし、「お福」の像も建立

○氷上町清住のカタクリの花まつりにぎわう

16日○田ステ女を町おこしにとステ女末えいの田季晴氏が記念館建設や千日寺跡整備資金として、柏原町に八千万円贈る

○おかしいぞ今年の桜、枝先に花がつかない 専門家も首かしげる

20日○市島町長選は無投票で吉田町長の再選なる

○柏原高校の進学状況 国立に四十八人合格、関関同立に六十一人

23日○氷上郡建築協会連合会は、宝塚市の高齢者の被災住宅で修繕ボランティア

○春日町野上野でサクラランボの特産めざす

27日○柏陵同窓会館建設目標額三億円にダウン 今年度も募金活動

4日○大阪・茨木市で丹波産木材で家作り 第一号を棟上げ

11日○丹波林業の活路を求め柏原町下小倉に丹波林産振興センター建設予定 六月着工、十一月初市

○春日町多利の蓮華寺の本堂と庫裡が完成

14日○新緑の登山シーズン 十四日に多紀連山自然公園山開き

18日○柏原税務所管内の高額納税一千万円以上は四十人、二〇％減税で昨年比十人減

○市島町の大杉ダム貯水量七〇％超え

○青垣町婦人会が会員減で解散

21日○俳人細見綾子さんの米寿を祝って母校の柏原女学校跡に丹波柏原原会が句碑建立

○春日町の三宝ダムで「試験湛水」満水に

○氷上郡教委は鎌倉時代の仮面など五件を柏原町指定文化財に

25日○山南町谷川駅前駐車場がオープン 四十一台の車が収容可能

○県議選氷上郡選挙区に藤原三郎氏（現職）が所得や地域格差の解消めざし出馬表明

28日○村上旭氏（山南町）が三十年の県議生活に終止符 六月十日に退任

○柏原町の「ステ女をたたえる会」は木の根橋や藩邸などに投句箱を設置

■6月

1日○市島・氷上両町が盛大に五大山まつり開催 五百人が新緑満喫

○丹波にも強い酸性雨 柏高の化学実習助手の村上さんが四年前から測定 これまでの最高は平成五年三月の月間平均値でPH三・七四

4日○県議選の氷上郡選挙区で藤原三郎氏が無投票で連続四期当選

多紀郡選挙区は藤井（現職）、酒井（新人）氏が出馬

8日○春日町野上野で「サクラランボ」出

荷へ 新しい産地形成に期待

○篠山町曾地川沿いのホタルの里に木のベンチ設置 捕護せずゆっくり鑑賞を

○細見綾子さんの米寿記念句碑を除

幕 「雉子鳴けり 少年の朝 少女の朝」

○市島町梶原に住友ゴムがゴルフボールの生産拠点の新工場を建設

15日○県議選多紀郡選挙区で酒井氏が初

当選

○柏原町下小倉で奈良時代(八世紀)の古代瓦が出土 近くに瓦を焼いた窯跡がある可能性も

18日○氷上町議会が議長不信任案を可決 大西議長は留任の構え

○篠山城の大書院復元へ募金をノ平成十一年完成をめざす

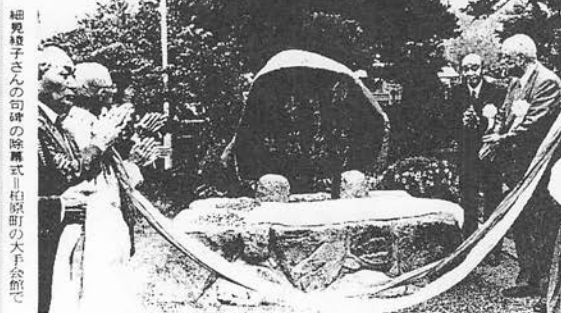
22日○大西氷上町議長が辞職

25日○氷上町議会の百条委員会が公園用地取得、農集排事業などの真相究明に向けて調査へ

○市島二千会が地元の稲荷神社へ毎年一つずつ鳥居を寄進 今年で十基目を設置

○氷上町議会の議員定数削減案は否決

○野外活動シーズン本番へ エルムいちじまで夏休みの予約いっぱい



細見綾子さんの句碑の除幕式(柏原町の大手会館で)



母校跡に句碑が立った細見綾子さん。

俳句結社「風」の傘下にある丹波柏原句会(世話人

細見綾子さんの米寿に

丹波柏原句会

母校跡に句碑建立

代表・牧元甫生(きん)は四日、柏原町柏原の大手会館で、細見綾子(あやこ)さん(八九)の句碑の除幕式を行った。細見さんは青垣町東吉田出身で、芸術選奨文部大臣賞などを受けた俳句界の第一人者。大手会館は、細見さんの母校、柏原高等女学校(現柏原高校)の建物跡で、同句会が細見さんの米寿を記念して母校跡に句碑を建立した。

(「風」は、細見さんの夫で俳人の沢木欣一さんが主宰している。同句会は「風」に所属し、三年前に結成。句碑に刻んだ句は、昭和二十四年作の「雉子鳴けり 少年の朝少女の朝」山あいのあちこちからうもたちが集まり、やかと列をなして学校に行く。早春の農村の朝の情景を詠んだ名句という。句碑を建てた大手会館は、従来小学校や

平成7年6月30日

会 計 報 告 書 (案) 関東氷上郷友会

(平成6年10月1日～平成7年6月30日)

会計理事・足立和巳

単位：円

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	1,594,142	現 金 158,611- 普通預金 38,644- 振替預金 42,460- 郵便貯金 253,427- 定額貯金 1,101,000-	出 版 費	943,830	やまざる25号発行のため
年会費収入	335,000	延 172名	通信・印刷費	92,100	総会、役員会等案内他
総会費収入	384,000	6000円×64名	総 会 費	404,236	総会関係の支払
役員会費収入	48,000	4000円×12名	長 寿 祝 費	0	
編集会費収入	0		会 議 費	351,088	新春役員会、100周年実行委員会他
寄 付 金	62,000	足立三治氏 他10名	慶 弔 費	0	
広告料収入	835,000	延 57名	支払手数料	11,693	郵便振替料、送金料等
受 取 利 息	3,283	郵便貯金 1074円 定額 2017円 銀行 102円	消耗品費他	26,637	丹波新聞正月広報
雑 収 入	0		繰 越 金	1,446,841	現 金 65,185- 普通預金 220,102- 振替預金 58,420- 郵便貯金 303,134- 定額貯金 800,000-
HM 資 金	0				
100周年協賛金預り	15,000	1名			
合 計	3,276,425		合 計	3,276,425	

監査の結果、上記の通り相違ありません。平成7年8月1日 藤田正雄 荻野 武

関東氷上郷友会々則

(名称)

第1条 本会は関東氷上郷友会と称する。

(目的)

第2条 本会は会員相互の親睦を図り、併せて郷土の発展に資することを目的とする。

(事業)

第3条 本会の前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 毎年1回以上全会員の参加集会を催す。
- (2) 八十歳の会員を祝寿する。
- (3) 毎年1回機関誌『山ざる』を発行し会員に頒布する。
- (4) 会員有志によるサークル活動を奨励する。
- (5) その他本会の目的を達成するために適当と認められる事業。

(会員)

第4条 本会は兵庫県氷上郡の出身者及び氷上郡に縁故のある者を会員とする。

(会費)

第5条 本会は会費として会員より年額二〇〇〇円を申し受ける。別に必要あるときは理事会の決定による額を申し受

けることができる。

(寄付金)

第6条 寄付金は随時受納できる。

(役員)

第7条 本会に次の役員をおく。

理事

若干名

会長

1名

副会長

若干名

常任理事

若干名

会計担当理事

2名

監事

2名

(役員の任務)

第8条 会長は本会を代表し会務を統轄する。副会長は会長を補佐し会長事故あるときは副会長のうち1名が会長職を代行する。理事は会務を執行し、常任理事は理事会から付託された事項または緊急事項の処理に当たる。監事は会務及び会計を監査する。

(役員の選任)

第9条 役員は総会において選任する。

(役員の任期)

第10条 役員の任期は2年とし重任を妨げない。

(役員の報酬)

第11条 本会の役員は総て無報酬とする。

(名誉会長・顧問)

第12条 本会に名誉会長及び顧問をおくことができる。

2 名誉会長及び顧問は理事会の議を経て会長が委嘱する。

3 名誉会長及び顧問の任期は役員の任期に準ずる。

(会議)

第13条 会議は総会と理事会とし、総会は通常総会と臨時總會とする。

2 通常総会は毎年11月に開き、必要に応じ臨時總會を開催することができる。

3 理事会は理事をもつて構成し必要に応じ開催する。

4 会議は会長が招集し、会議の議事は出席者の過半数により決する。

(委員会)

第14条 会長は本会の事業を分掌するため理事会の議を経て委員会を設け、委員を委嘱することができる。

(会計報告)

第15条 本会の会計年度は毎年7月1日に始まり翌年6月30日に終わるものとし、会計報告は通常総会において行うことを原則とする。

(会則の改訂)

第16条 本会則の改正は総会の議を経て決定する。

役員氏名 (平成七年十月現在、敬称略)

会 長	村上末吉				
副 会 長	吉住重造	渡邊隆男			
顧 問	足立三治	上山 顯	岡田一男	佐々木盛雄	
	谷垣正雄	田 英夫	波多洋三	細見綾子	
監 事	荻野 武	藤田正雄			
常任理事	足立かをる	足立和巳	足立謙悟	小田富士夫	
	坂上勝朗	田中篤郎	常岡幹彦	鶴田ゆき子	
	出町京子	宮野 近			
理 事	足立勲平	足立静雄	足立誠一	安達陽一	
	秋元多美子	芦田重秋	池田 忍	小川晴通	
	大木正徳	大野善三	岡 吉明	粕谷 進	
	木村つた江	木呂子恵美子	小山年博		
	田中 寛	高見嘉都司	千種倫幸	堀井隆川	
	前田和市	村上 昇	村上善英	安原三智子	
	若林敏郎				

会誌『山ざる』総目次

第1号(昭41年) 第25号(平6年)

■第1号(昭41年6月)

会誌の発刊に寄せて	石橋治郎八
関東水上郷友会々則	編 集 部
会務報告	編 集 部
丹波の近況	有田 喜一
郷土の産業開発促進	大槻 喬
発刊を祝して	松山 幸逸
あ、青春	堀川 萬次
関東水上郷友会発展のために	村上 末吉
会員名簿	編 集 部

■第2号(昭45年11月)

第二号の刊行に当って	石橋治郎八
関東水上郷友会の沿革	編 集 部
愛称「丹波の黒牛」	有田 喜一
「山ざる」に寄せて	芦田 三次
はかない夢	伴仲 信次
ご自慢ばなし	安達 恭二
山猿と有権者	佐々木盛雄

生きがいある仕事を！

航空安全祈願祭

丹波の開発へ

郷友会とわたし

セックス礼讃

精一杯、働く

お互いの知恵を持ち寄ろう

郷土便りーかわるふるさと

■第3号(昭47年1月)

丹波路の未来

“ニュー丹波”への夢

郷土と企業に奉仕

古里の風物

ふるさとの味

近 詠

銀の笛

怪我と酒

育くまれたふるさと

平安な日々

気楽な夫婦生活

老人問題を考える

いま一つの“ふるさと”

私の丹波

石橋さんの丹波構想

故石橋会長を憶いて

兄佐々井信太郎の生涯

■第4号(昭48年3月)

丹波開発の新構想ー新学園都市

新しい展望と活気ー丹波の近況

丹波の文化遺産

丹波の心ー魅力ある郷友会に

ニューヨークの桜

ミュンヘン再訪

ふるさとの想い出

長寿のふるさと

思い出の中ふるさと

自然の中で

欲ばりな私の近況

今年も祝福を



特攻の思想

—大西滝治郎伝を読んで……………足立 正

短歌Ⅱ母を偲んで……………秋元多美子

短歌Ⅲお盆の墓詣り……………野村 千里

俳句Ⅲ古稀自祝……………植村 章子

■第5号(昭49年4月)

友愛の精神……………足立 三治

丹波開発を目指して……………有田 喜一

新幹線は必要か……………小田 晋作

襟を正せ……………池田 種生

南米の旅……………西川 政一

イスラエルへ舞踊の旅……………西崎 祥

ニューギニアの旅……………上嶋 一晃

冬の旅・ヨーロッパ……………渡辺 隆男

茨城の思い出……………林田 孝子

秋の中房温泉と安曇野……………萩野定一郎

由良川の鮎の味……………植村 章子

いま思うこと……………常岡 幹彦

末娘嫁いで……………音無太美子

老後の生きがい……………木村つた江

身辺雑詠……………須原 松柏

和歌……………足立かをる

和歌……………上月知一郎

商店経営初歩必須要項〔1〕……………村上 末吉

はり一すじに四十年

(小川晴通氏)……………編集部

刻苦経営の六十年

(近藤林蔵氏)……………編集部

佐々井一晃氏逝く……………編集部

矢本平蔵翁の想い出……………編集部

■第6号(昭50年4月)

すべて腹七分目で……………有田 喜一

手を携えて進もう……………足立 三治

小谷正雄博士の業績……………茅 誠司

イランからメキシコへ……………西川 政一

アメリカでの印象……………藤原 三郎

インドとパキスタンの珍客……………藤原 岩市

イギリスで踊って……………西崎 祥

タイ国の王様ゴルフ……………伴仲 信次

乗馬のたのしみ……………小林 剛

ふるさとからご挨拶……………地元 町長

アマゴ養殖の近況……………平岩 慎吾

春日町の近況……………山田 茂

地縁三代ばなし……………江間 時彦

松茸が生えなくても……………渡辺 金三

我が「ふるさと」随想……………谷垣 正雄

故郷に心のふるさとを……………前田 和市

神池寺縁起……………畑 正義

座頭市のもてるわけ……………須原 清

私の発病を経験に……………萩野定一郎

丹波栗……………植村 章子

わが手で喰ううまさ……………音無太美子

心田耕録……………藤本 久一

信濃路にて……………渡辺 久子

望郷之賦……………松山 竹水

商店経営初歩必須要項(2)……………村上 末吉

深尾女史逝く……………須磨子さんを偲ぶ

フルートとの出会い……………森田淳二郎

郷友の長老・田誠さん……………松山 幸逸

■第7号(昭51年4月)

柏原町高見出土の宋代青磁碗……………上山 顕

黒井城落城の秘密……………畑 正義

社会は連帯である……………有田 喜一

丹波人の誇りと感謝……………足立 三治

山南町の近況報告……………前田 朝一

お知らせ 長寿者を祝う会……………編集部

ローマの休日……………西川 政一

アメリカ建国記念行事に舞って……………西崎 祥

常岡画伯・故宮誘拐記……………渡辺 隆男

「旅」……………常岡 幹彦

ペンシルカットの話……………伴仲 信次

畜産を太平洋に追う……………小林 剛

鯨を追った夫を憶う……………荻野 経子

幸せの余生……………藤尾ちえ子

白子の里の山莊清談……………編 集 部

影の魔力……………坂上 勝郎

私の碁と同好会……………足立 正

芸術選奨に輝く細見綾子さん……………植村 章子

和歌……………渡辺 久子

俳句……………由良洋太郎

俳句……………足立あつ子

本の紹介……………

『回想と覚書』『東中風土記』……………編 集 部
商店経営初歩必須要項(3)……………村上 末吉

■第8号(昭52年4月)

特集・長寿を祝う

祝辞／謝辞／その他……………編 集 部

二度も行われた丹波御巡幸の

請願運動……………芦田 確次

オリンピックは改造すべし……………西川 政一

オリンピックの施設に驚嘆……………伴 仲 信次

痛恨! 有田先生……………畑 正義

私も頑張ります……………田 英夫

波高い水産業界……………

先覚者植木翁、何と見る?……………編 集 部

四庫全書
四庫全書
四庫全書



果断の見識……………植木 伍鹿

心筋梗塞を病みて……………下中 昭男

自然を友として……………木村つたゑ

幼い日の丹波……………和 田 菊江

詩・歳末寓感……………須 原 松柏

短歌・高原の朝……………藤 本 久一

■第9号(昭53年4月)

おめでとー!

文化功労者・叙勲・祝寿……………編 集 部

空想の『郷土博物館』……………上山 顕

少年のころの思い出……………奥 谷 松治

ふるさとの山やまよ……………関 正治

会長の教訓……………上田鉄太郎

独白―陽だまり―……………須 原 松柏

NHKで放映

三浦画伯の東大版画展……………編 集 部

旅に出て思う……………西川 政一

アメリカの旅……………秋元多美子

丹波の二つの顔……………松 山 竹水

コレヒドール島……………伴 仲 信次

丹波総合開発に努力……………石 井 敏秋

菊江・川柳帖より……………和 田 菊江

製袋業界の長老 渡辺泰造翁逝く

泰造翁を偲んで……………芦 田 確次

野村利吉さん逝く……………編 集 部

■第10号(昭54年5月)

「山ざる」10号の年輪……………足立 三治

「山ざる」発刊のころ……………足立 正

織田信憑と二人の文人……………莊 正衛

「ふる里村」に青春還る……………伴 仲 信次

「幸せ」な人生……………有 田 喜一

ゴルフ随筆……………足立 誠一

私のふる里……………吉 住 重造

十年という歳月の重み……………村 上 末吉

私にとってこの十年……………西山敬次郎

これからの十年……………音無太美子

丹波の人と心……………坂 本 重雄

懸命に躍進へ努力……………谷 口 務

西欧雑詠……………大 野 渥子

■第11号(昭55年4月)

会員への御挨拶	足立 三治
心に通うふるさと作り	石井 敏秋
ご高配を感謝	大田 勝
なぜ、代議士が出ない	藤原 三郎
丹波に残る「いの字」の地名	莊 正衛
教育現場の近況と所感	坂本 重雄
坊主と弁護士	小杉 武生
余暇	吉住 重造
ひとり残されて	藤尾ちゑ子
日中鍼灸術くらべ	小川 晴通
夢追い猿奮闘記	渡辺 隆男
科学技術についての思い出	有田 喜一
建築と歴史	伴仲 信次
『ふるさと村』開村記	須原 清
東北にて	大野 善三
懐かしいクラス会	足立 治
ふるさとの松茸狩り	木村つた江
日本舞踊ひと筋(上)	西崎 祥
短歌	藤本 久一
ヨーロッパに旅して	秋元多美子
関東水上郷友会の沿革	編集部
常岡文亀画伯逝く	
父、文亀のこと	常岡 幹彦

■第12号(昭56年4月)

“81”御挨拶	足立 三治
小谷正雄博士に文化勲章	
受賞・祝寿会華やかに開く	編集部
小谷正雄は天才だ	田辺輝一郎
ふる里の埋蔵文化財	芦田 確次
丹波の思い出(芸能を含めて)	小林 武治
丹波の生んだ名工	莊 正衛
狛犬は祖先の寄進	上山 顕
自叙伝出版と胸像の建立	有田 喜一
永井さんのこと	西川 政一
祖父のお墓詣り	田 英夫
はるかなる青春の日々	坂本 重雄
『山ざる』と石橋社長	永井 勇
『山ざる』退治作戦	畑 正義
日本舞踊ひと筋(中)	西崎 祥



■第13号(昭57年4月)

スイス「グランボー村」訪問記	伴仲 信次
懸命に生きています	林田 孝子
私のふるさと今昔	木村つたゑ
今の幸せを感謝	音無太美子
これからのエネルギー問題	若森 敏郎
南アジア視察記	西山敬次郎
俳句・丹波	細見 綾子
会長辞任に際して	足立 三治
足立さんありがとう	編集部
新正副会長挨拶	
氷上郷友会と私	伴仲 信次
ご挨拶	村上 末吉
『裏方』就任のいきさつ	渡辺 隆男
有田さん八十年の歩み	畑 光
細見さんの叙勲	植村 章子
感想―丹波の恩恵	細見 綾子
西川政一さん	
メキシコ政府から受賞	編集部
ふるさと・あれ・これ	
―出土した銅鐸など	芦田 確次
「こもせ」と「さるとり」	細見 末雄
私の住宅問題	坂本 重雄
日本舞踊ひと筋(下)	西崎 祥

アヒルが家族に!!.....村上 末吉

おやじへの手紙.....足立 治

柏原藩の神道無念流.....古倉 克実

ふるさととは遠きにありて.....梶原 清

スーダン民主共和国の

現状と将来性.....若森 敏郎

句集「水上郡」.....沢木 欣一

■第14号(昭58年4月)

このごろ思うこと.....伴仲 信次

フィラデルフィア印象記.....坂本 重雄

水上への郷愁.....足立 順治

「オラトリオ合唱団」を

指揮して.....笹倉 強

「竜虎八天狗」の旅.....常岡 幹彦

私の闘病記録.....谷垣 正雄

健康のよろこび.....足立 正

常岡さん・西崎さんのこと.....宮野 近

尾瀬に学ぶ.....吉住 重造

■第15号(昭59年4月)

ご挨拶をかねて.....伴仲 信次

五十八年度祝寿会

おすこやかにご長寿を.....音無太美子

西山新衆議院議員誕生

丹波人の意地を貫いた選挙戦.....足立 和巳
村上末吉氏、黄綬褒章受賞.....編集部
特集・さようなら松山さん

『山ざる』誌育ての親 松山幸逸氏逝く

弔詞.....伴仲 信次

松山幸逸と私.....足立 順治

竹水さんを偲びて.....須原 清

松山さん.....常岡 幹彦

しのびぐさ.....西崎 祥

松山幸逸さんと丹波.....畑 光

松山さんと水上囲碁会.....足立 正

別れ.....木村つた江

風雪に想う.....足立かをる

山ざる誌 丹波 香港

そして清瀬のこと.....木呂子恵美子

病中雑記.....植村 章子

座禅.....吉住 重造

信を人の腹中に置く.....小杉 武生

首振り二〇年.....若森 敏郎

めぐり逢い.....上山 顕

高齢化社会と21世紀の年金.....坂本 重雄

卵黄油で人生が変わったと

いう人もいる.....村上 末吉

柏原が舞台の短篇小説

井上靖の『佐治与九郎覚書』.....小林 武生

ザとダの発音区別の苦労.....田中 寛
対談・曹禅寺を訪ねて.....(文)宮野 近
現代人における密教の世界

―映画『空海』鑑賞のすすめ―堀井 隆川

松喰虫に荒らされた郷土の山.....田辺輝一郎

旅情.....秋元多美子

■第16号(昭60年4月)

ごあいさつ.....伴仲 信次

郷友会の皆さんに.....有田 喜一

二一世紀は丹波の時代.....西山敬次郎

丹波と交通問題.....梶原 清

ふるさとは.....谷口 務

郷土の名譽を.....田中 玲三

二一世紀をめざして.....荒木 真次

若さあふれる春日.....杉本喜八郎

関東水上郷友会の皆さんへ.....内橋 昭

水上農高、水上高校と改名.....森田 信三

。米寿。大会に二五〇余人

ふるさと一色の九段会館.....編集部

記念大会のバックグラウンド

ミュージックについて.....大岡 照子

大任を果たして.....若森 敏郎

八八周年大会の裏方たち.....渡辺 隆男

水上郷友会創立のころ.....編集部

関東水上郷友会の沿革……………編集 集 部

ふるさと紀行……………常岡 幹彦

上田三四二氏に文部大臣賞……………編 集 部

日本女性の鑑「田捨女」……………宮野 近

百歳青春……………堀川 萬次

幸世のルーツを……………足立 順治

今と昔 たえば通信簿……………吉住 重造

私の食卓……………田中 篤郎

ゴルフと健康……………谷垣 正雄

食は命なり……………足立かをる

駿河湾の初日の出に思う……………坂本 重雄

人生これ「初体験」……………池田 忍

アジア瞥見……………谷 達雄

中国残留孤児に思う……………常岡 昭

寒の朝……………井本 義一

近況を和歌にのせて……………音無太美子

カナダに旅して……………秋元多美子

■第17号（昭和61年5月）

ごあいさつ……………伴仲 信次

丹波の巨星・有田喜一氏逝く

故有田喜一先生の想い出……………畑 光

去住自由……………吉住自由造

座談会「丹波を語る」……………（司）宮野 近

特集「わが青春のふるさと」

わが青春の歌……………波多 洋三

年月を語るにつれて……………生田 正輝

一炊の夢……………須原 清

修羅場の青春……………藤田 正雄

青春虚実……………田中 篤郎

修行の日々……………植村 章子

山ほと、ぎす……………夢田ふみ子

つかのまの春……………木呂子恵美子

山鳥鋭男先生のこと……………大野 善三

子供のころ(1)……………足立 源治

水上のルーツ……………編 集 部

大西瀧治郎さんの思い出……………谷垣 正雄

のらくろ会……………西山敬次郎

人民中国に載った二玄社……………足立 和巳

放屁論……………梶原 清

私の健康法……………伴仲 信次

布施のころ……………堀井 隆川

卒業三十年同窓会に出席……………足立 敬子

イッキに消えた三十年……………村上 善英

■第18号（昭和62年5月）

ごあいさつ……………伴仲 信次

財界の雄・西川政一氏逝く

ふるさとと兄……………須原 松柏

愛郷の士・渡辺金三氏逝く

渡辺金三さんと……………須原 清

村上大憲老和尚をしのぶ……………堀井 隆川

学友故小西保君をしのぶ……………莊 正衛

前会計理事 小谷正己氏逝去……………足立 正

立身と奉仕（足立三治さん）……………池田 忍

北摂丹波の祭典ホロンビア88……………編 集 部

バレーボールにかける……………森田 信三

夢と青春……………森田 信三

特集「わが青春のふるさと」

徒歩通学の思い出……………片山 日幹

ふるさとと青春……………林田 孝子

若き日の周辺……………谷 達雄

思い出のふる里……………上山 顕

「ツチノコ」を見た……………佐々木盛雄

解き放された青春……………足立 徹

思い出すこと……………東田 實



ふるさと遠く四十五年……………田中 芳子
私と氷上郡……………神田 敏博

わが青春に悔いなし……………上村 愛子

「暗い谷間」の時代と故郷……………坂本 重雄

桜のさくふるさと……………岡本庄太郎

ある朝の思い出……………山内 隆行

青春虚実……………田中 篤郎

子供のころ(2)……………足立 源治

故郷丹波の国讃歌……………莊 正衛

氷上の「足立」姓について……………足立 順治

「足立」姓のルーツ……………足立 和巳

丹波の風土と文化……………岡本 丈夫

「レクイエム」演奏会と……………

「日中親善の旅」を終えて……………笹倉 強

フランス刺しゅうと私……………篠原よね子

描ききれないもの……………常岡 幹彦

陶芸雑感……………可部美智子

いつか花咲く……………西崎 祥

卒業三十周年記念……………

同窓会に出席して……………木呂子恵美子

■第19号(昭63年4月)

会長をお受けして……………

伴仲会長を悼む……………村上 末吉

年には勝てぬ……………小田 知尊

郷土の生んだ教育界の偉才……………

故小林武治氏を悼む……………谷垣 正雄

西山敬次郎君の急逝を悼む……………足立 源治

軽くなった副会長の座……………足立 源治

中国人とふるさと……………渡辺 隆男

ふるさとの言葉……………足立 源治

北摂 丹波の祭典……………

悔なき我が人生に教えられる……………足立 三治

思い出……………大西 俊治

小学生のころ……………萩野 一雄

八十年の人生をふりかえる……………藤田 かね

丹波への思い……………小寺 確郎

むかしの柏原音頭……………志村 勝郎

宇垣大将参内の車をとめた兄……………志村 勝郎

六〇歳代半ばの手習い……………志村 勝郎

「ふみよ会」について……………池上 亘泰

ブラックジャックの思い出……………岡 吉明

思い出すこと……………安原三智子

青春虚実―思い出すこと……………田中 篤郎

可部美智子さんに……………

文部大臣奨励賞……………編集部

私の刺繍作品展……………篠原よね子

心の故郷をなくする日本人……………村上 末吉

歌人・上田三四二さん死去……………

上田三四二君をしのぶ……………中井 良平

上田三四二君を悼む……………藤田 正雄

丹波の現況と展望……………

ホロンピアから森づくりへ……………日原 昶

春日局とわが故郷……………村上 久夫

方言一言……………足立 源治

特集「わが青春のふるさと」……………

たんたんと生きる人生八合目……………足立 治

昭和 あのころ……………生田 清弘

柏原中学の思い出……………中井 良平

私の昭和史……………若森 敏郎

私の青春と母校……………高田美佐子

青春虚実 流れ去った日々……………田中 篤郎

帰ろうかな懐しの山川へ……………田中 憲雄

ふるさとに寄せて……………上野 重喜

ふるさとで歌う喜び……………足立さつき

台北故宮博物院を見学して……………藤田 正雄

健康歳時記……………坂本 重雄

仁王さんから学ぶ……………堀井 隆川

■第21号(平2年6月)

会員の交友を求めて……………村上 末吉

副会長に就任して……………吉住 重造

日本民謡舞踊大貫に

黒井踊が努力賞 奨励賞

編集部

総論賛成・各論反対

小田 知尊

水上政記

編集部

心のふるさと

足立 誠一

幼き頃の思い出

大地富美子

わが故郷

荻野 武

青春虚実

田中 篤郎

家移りさんげ

足立 順治

故郷大新屋と高見城

谷垣 正雄

還暦雑感

前田 和市

土漠ゴルフ

岡林 逸男

ポルトガル スペインを旅して

秋元多美子

原子力開発と私

水船 隆昌

クラス会のはなし

木村つた江

■第22号(平3年6月)

『山ざる』誌こそ会のかなめ

村上 末吉

副会長に就任して

吉住 重造

ふるさと市島未来塾・活動開始

芦田 善也

村営発電所に再び命を

村上 彰

柏原町歴史民族資料館

へのいざない

藤本 正也

大阪空港物語

梶原 清

統一地方選挙めざして

足立 良平

美しき老桜

須原 清・須原初江

思い出すまに

森下千寿子

ふるさととは遠きにありて

野村 節三

ふるさととは人生の友

伊田 光男

『花傳』を訪ねて

宮野 近

石生の思い出

勢 正彦

橋本先生と柏原

菊池 洋子

柏中・柏女・柏高・今昔

植田 憲雄

私のリクエスト

吉田 素子

細見綾子さんの

宮野 近

『風』慶祝五〇〇号

田中 篤郎

青春虚実

斎藤美寿子

ある転校生の思い出

小杉 仙生

帰去来辞

志村 慶子

いけばなと私

田原 敏男

故郷に帰って一年

坂上 五朗

ふるさと講演記

足立 静雄

哲学と私

井本 義一

私の健康法

綾木 健

人生いつまでも青春

上野 重喜

インドネシアの古都から

足立さつき

『時間の花』

吉見 文憲

羽ばたけノ足立さつき

きこ美術館の夢

ふるさと

荻野美穂子

きこみ人形に魅せられて

足立美矢子

『太平記』に登場する石龜寺

堀井 隆川

ヤミノイモ談

奥田 康夫

丹波の足立氏・芦田氏について

足立 晴治

方言調査(水上郡)

編集部

■第23号(平4年6月)

生きたる楽しさ美しさ

村上 末吉

ふるさとだより

藤原 三郎

福知山線複線化と丹波と私と

梶原 清

父祖の地の歴史民俗資料館

織田 信孝

柏原藩と篠山藩の江戸屋敷

志村 勝郎

山南町の『青田神楽』

小谷 敏雄

二十一世紀は文化の

平岩 慎悟

花咲くまち・青垣

庄 正衛

城崎温泉・西村屋印象記

田 健一

柏原と私

田 敏夫

ふるさと

波多 洋三

郷愁

谷垣 富子

郷里に思う

足立 順治

幼少の記

国村きぬゑ

柏原をたずねて

谷 達雄

柏原讃歌

大野すゞ子

今様浦島

池上 亘泰

故郷探訪『水分かれ』周辺

池上 亘泰

私の故郷……………足立美都子

帰郷雑感……………木内実喜夫

丹波柏原へのこだわり……………加賀山次郎

父の三回忌を前に……………岡本庄太郎

我が家より眺めた鎌倉の空……………足立 誠一

大自然に溶け込んだ三陸の日々……………野村 節三

ジャワの日々から……………上野 重喜

故郷の恩師と友達……………村上 善英

嗚呼、青垣の山に向かいて……………足立 正美

牛の喉……………村上 久夫

青春虚実―遊蕩事始め……………田中 篤郎

焼きもの雑感……………生田 清弘

スメタナ先生との出会い……………池畑豪四郎

足立源治さん逝く……………編 集 部

足立源治さんの逝去を悲しむ……………田中 篤郎

■第24号(平5年10月)

郷友会の一〇〇周年について……………村上 末吉

小谷正雄氏逝く……………編 集 部

柏原八幡神社・三重塔修復……………編 集 部

上田三四二さんの歌碑……………編 集 部

旅の石工・丹波左吉……………編 集 部

▲ふるさと随想▼

丹波・氷上の地名とその歴史……………西畑 健一

ふるさとへの想い出……………井上 陽一

故郷とは……………小田 知尊

思いつくまゝ人生雑感……………足立 勲平

丹波に帰省して……………谷口 捷

中尊寺と丹波の山寺……………高見 秀史

感性を求めて……………足立 明子

丹波への熱き思い……………廣瀬 安伸

私の半生を振り返って……………山田 貞子

終戦記念日に思う……………大坪 真子

“ふるさと”創り……………仲 一聰

柏高卒業三十年……………上田 脩

還暦からの再出発……………北村 貞子

▲近況・エッセイ▼

古稀に思う……………生田 正輝

南米滞在十七年……………前田 武彦

上山顕著『様々な出会い』を
読んで……………坂本 重雄

真理を求める旅人……………池田 達人

中高年とダンス……………大垣 忠男

情緒不安を克服して……………岡原 裕泰

父と私と就職と……………本城 英明

転勤に思う……………増井 攻

私の経歴……………久安 敏夫

社会主義国の崩壊について私見……………余田 士郎

郷友会総会に出席して……………鈴木 大助

山ざる兄弟、カラコルムを行く……………吉川 誠司

病床にて……………渡辺 久子

福知山線複線電化物語……………梶原 清

■第25号(平6年10月)

ごあいさつ……………村上 末吉

▲ふるさと随想▼

懐郷の弁……………久下 梅次

幸せ帰郷……………澤田みさを

よみがえった故郷……………小笠 勝啓

父と丹波柏原教会……………宮野 近

田健治郎略伝……………宮野 近

丹寿荘の母を想いて……………青木 修

二十年ぶりの再会……………広内 康邦

ふるさと青垣……………飯田 光雄

旧友と出会える日……………山岸 幸子

▲近況・エッセイ▼

スウェーデン・ガラスの思い出……………生田 清弘

柏陵同窓会館建設にご理解を……………植田 憲雄

田舎と都会の「山ざる」……………小田 晋作

奈良学園都市のこと……………酒井 重男

老い……………下中 昭男

“十四の瞳”同窓の旅……………足立 正美

やまざる信州に住む……………上村 邦子

この頃思うことども……………矢尾鐵太郎

関西国際空港物語……………梶原 清

建築材料販売工事
建設大臣許可第1834号

中央建材工業株式会社

専務取締役
東京支店長

荻 野 武

(市島町出身)

- 本 社 名古屋市千種区高見 1-6-1
電話 052 (761) 6181 (代表)
- 東京支店 東京都大田区西蒲田 8 丁目 9 番 5 号
電話 03 (3730) 1281 (代表)
- 大阪営業所 大阪市西区江戸堀 1-8-15
電話 06 (443) 6665
- 豊田営業所 愛知県西加茂郡三好町大字三始西田 3-4
電話 05613 (4) 3121
- 仙台出張所 仙台市青葉区高松 2-11-15
電話 022 (273) 5724
- 札幌出張所 札幌市中央区南一条西 7-12
電話 011 (271) 3961
- 新潟出張所 新潟市米山 5-1-25
電話 0252 (45) 1705
- 松本出張所 松本市野溝木工 1-6-58
電話 0263 (25) 0351
- 広島出張所 広島市西区中広町 1-4-16
電話 082 (291) 3780

二玄社の定期雑誌

OP

オブ

グッドライフのための専門誌

- A4判変型
- 季刊(2、5、8、11月)発売
- 定価850円(税込)

CG

自動車評論のオピニオン誌

- A4判変型
- 月刊 毎月1日発売
- 定価1010円(税込)

ひと・くるま・社会をソフト面で考える

NAVI

- A4判変型
- 月刊 毎月26日発売
- 定価680円(税込)

古今の名車を美しい写真で紹介する

SUPER CG

- A4判変型
- 隔月刊 奇数月発売
- 定価1800円(税込)

本格的腕時計の専門誌

[インターナショナル・リスト・ウォッチ]

INTERNATIONAL
WATCH

- A4判変型
- 季刊(3、6、9、12月)発売
- 定価1300円(税込)

二玄社 〒101東京都千代田区神田神保町2-2
電話03-5210-4700 Fax.03-5210-4720

代表取締役社長 渡邊隆男

株式会社 三 葉 水 道

代表取締役 橋 爪 忠

(氷上町黒田出身)

〒276 千葉県八千代市八千代台西 7-5-29

電 話 0474-84-7121 FAX 0474-82-9626

門と塀と庭 ブロック 門扉 車庫
プレハブ サンルーム ベランダ 温室

株式会社 大_{ダイ} 樹_キ

代表取締役 岡 吉 明

(柏原町出身)

〒351 和光市南 1-11-40 電話 (048) 463-4420 (代表)

調布市中央図書館
文芸誌「たきおん」同人

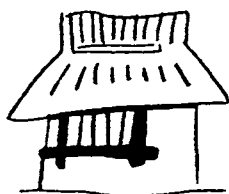
木村 江 江

東京都調布市東つつじヶ丘2-39-5
電話 (03) 3300-6895

大菱印刷有限会社

田 中 寛 (山南町出身)

〒110 東京都台東区台東1-27-5 大塚ビル
☎ 03-3833-1595



PHP 文化フォーラム 埴生の宿

代表 吉 住 自 由 造

(春日町中山出身)

事務所 〒216 川崎市宮前区宮崎 5-5-35

TEL 044-866-3621

東京連絡所

TEL 03-3875-3326

オペラ界の名花

足立さつき後援会

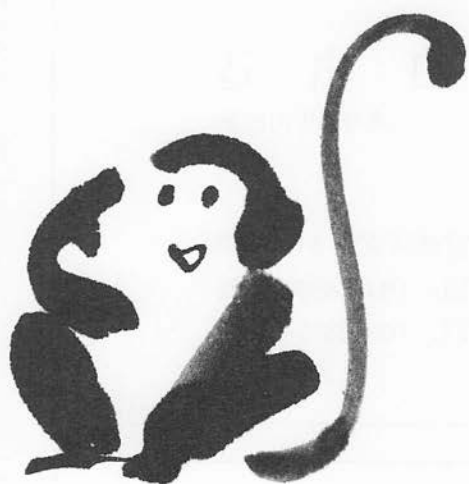
名誉会長 吉 住 自 由 造

事務局 市 場 暉 子

事務局 〒121 東京都足立区竹の塚 2-29-16

TEL 03-3858-1219

猿友会



井田悦子

大石佐代子

小田明子

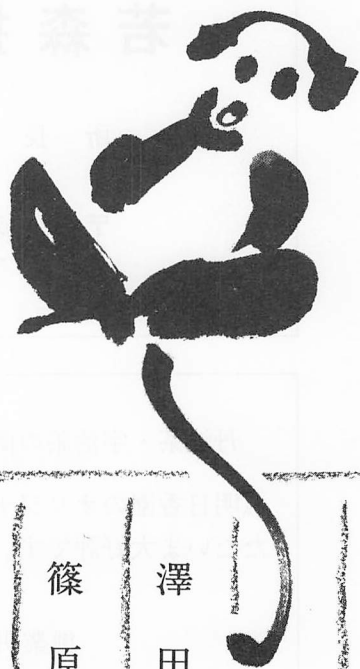
可部美智子

岸本昌子

喜田綾子

小糸イキ

笹倉郁子



澤田みさを

篠原よね子

千葉淳子

長尾貴美代

安原三智子

大和季代子

渡邊貴美子

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状	第2-319号
技術士（電気部門）登録証	第15810号
エネルギー管理士（電気）免状	第2857号
エネルギー管理士（熱）免状	第5191号

若 森 技 術 士 事 務 所

所 長 若 森 敏 郎

〒302 茨城県取手市白山 5-4-13

TEL 0297 (72) 0907

丹波茶・宇治茶の御進物 御贈答に 明日香園の健康銘茶を！

《明日香園のオリジナルブランド》ウーロン茶の缶ドリンクが
ただいま大好評です。各種御注文は本社工場にて直接承ります

創業明治四年 **伝 統 銘 茶**

株式会社 **明日香園**

代表取締役社長 池畑 豪士郎

本社：東京都千代田区九段北 2-3-2 電話 (03) 3265-2579

本社工場（御注文承り先）兵庫県氷上郡柏原町南多田 3146

電話 (0795) 72-3588 フリーダイヤル 0120-163588

直販店：西武百貨店池袋本店 B 1 電話 5952-5076（直通）

セゾングループ
株式会社 **チェポ**

和風ファーストフードの
トレンドをリードする

〔一口茶屋〕

■主な取扱商品

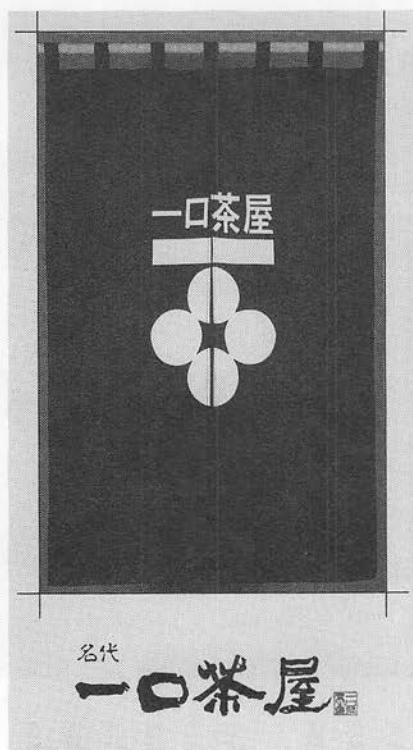
タコ焼、タイ焼、お好焼

■店舗数 204 店舗

(1995年7月31日現在)

- ・フランチャイズ店 30店
- ・直 営 店 71店
- ・社員オーナー店 103店

フランチャイジー募集



本 社 〒160 東京都新宿区新宿2丁目3番10号
☎03 (3226) 2891 (代)

代表取締役 池 畑 豪士郎 (柏原町出身)

北海道事業部 〒005 札幌市南区澄川4条2丁目4-12
☎011 (812) 3933

関西事業部 〒532 大阪市淀川区西中島5-10-15
☎06 (304) 8184

柏原高校 第7回卒業・関東同期会



初回の集い（銀座にて）昭和五十六年



第六回の集い（あやめ咲く・水の里水郷）

平成七年六月十七日

足立元美・岡部奨順・川見智恵子

高橋節子・宮 和子（青垣町出身）

足立敬子・伊藤まち子・押田啓子

鶴田ゆき子・丸川健三郎・室井利代

森田 宏・余田 進（市島町出身）

久保田元子・陶山笑子・出町京子

宮野 近・村上善英・村田年弥

（柏原町出身）

石橋正康・井本 馨・荻野公三

近藤哲夫・近藤輝雄・野口律子

野村 豊・森本益夫・守屋賢策

義積 保・由良 均（春日町出身）

大野 均・久保春雄・鈴木智文

中居篤子・山内弥生・和田 昌

（山南町出身）

蘆田二郎・植田啓介・小原知都子

川勝美代子・長沢淳子・新田浩道

善積敏夫（氷上町出身）

隣郡の **多紀郷友会**
会誌 [郷友]

- * 明治24年10月、創立・創刊の全国組織です。
- * 本年は共に104周年、[郷友] は通算513号。
- * 会員相互の親睦交流促進と、郷土の発展に寄与するため、[郷友] は総合誌として年間3回、鋭意定期刊行中です。
- * 運営は多紀郷友委員会です。

〒151 東京都渋谷区代々木5-50-11
尚志館内 ☎03-3466-1992

多紀郷友会 委員代表 森田淳二郎

消費税・法人税・所得税・相続税・贈与税
の相談・代理申告

船越税理士事務所

税理士 船越 祥郎

(春日町多田出身)

〒196 東京都昭島市郷地町2-17-9 電話 (0425) 44-5997

■近刊予告

六十からの〈充実人生〉に

還暦記念の本 昭和11年版

A 5 判・280頁／上製本・ケース入り／予価 3,500円（送料・消費税込み）
平成 8 年 1 月 1 日発行／昭和12年版は平成 9 年 1 月発行予定

〈主な内容〉■各界著名人による還暦からの体験的人生論■昭和11年生まれ「還暦宣言」■昭和11年生まれ同輩座談会■これからに備える本と情報■巻末に記入式〈自分史年表〉のページがあり、60年間の歩みが記録できます。

〈予約受付中〉お申込みはハガキで下記へ（代金は本をお送りした後）

株式会社 **ホンゴ出版**

代表取締役 池田 忍

東京都中央区明石町 2-16-501

〒104 ☎ 03 (3248) 6625

郵便振替 00130-5-144071

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみと呼びおこします。そんな仲間のひろがりを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東水郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千元、半頁広告一万五千元、全頁広告三万円です。何卒ご協力をお願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとウラやましがられるたびに、「丹波のきずな」の強さを思っています。

（山ざる編集部）

足 立 和 巳

自宅 府中市栄町一―一五―二七
電話 (〇四二三) 六四―七三二七
FAX (〇四三三) 三六―〇五七六

足 立 かをる

足 立 勲 平

〒251 藤沢市鶴沼藤ヶ谷一―七―四
電話 〇四六六 (二二) 六四六一

(株) ミワ システムズ コンサルティング

代表取締役 足 立 謙 悟

〒220 横浜市西区岡野一―十三―十三
TEL (〇四五) 三二―一五四一八
FAX (〇四五) 三二―一三八〇一

足 立 静 雄

足 立 誠 一

〒248 鎌倉市鎌倉山四―八―二五
電話 〇四六七―三一―三六〇〇

株式会社 ニュー東京フーズ

社長 足 立 卓 巳

〒284

千葉県四街道市美しが丘二丁目一九一
電話(〇四三四) 三二一四八七七番

参議院議員

足 立 良 平

電話(〇三) 三五〇八一八二三八

日本損害保険協会特級(一般)資格 第特一三五八六号

飯田保険事務所

飯 田 光 雄

〒285

千葉県佐倉市白銀四一十四一五
電話 〇四三(四八五) 〇五〇三
FAX 〇四三(四八五) 〇二九一

生 田 清 弘

〒157

東京都世田谷区成城一七七一七
電話(〇三) 三四一五一八九三

井 本 義 一

上 田 脩

〒112

東京都文京区小石川五一七一六

上山 顯

〒106 東京都港区元麻布二―一―三六―五〇三

日製産業株式会社

相談役 大木 正徳

大野 善三

自宅 〒228 相模原市相模台七―二五―八
電話 ○四二七―四六―八七九〇

小田 富士夫

梶原 清

〒152 目黒区東が丘二―三―二八アルカサノ東が丘302
電話 ○三一三四―一八一―二二一五

粕谷 進

〒276 八千代市八千代台南二―七―一一
電話 ○四七四―八二―〇七〇九

有限会社 アイ・ケイ・アイ

代表取締役 岸 田 勇

〒103 東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目三番六号
第二喜田村ビル

株式会社 アン

久 保 豊

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷三ー六一ー三
電話 〇三ー三四七八ー七四一一(代)

木 呂 子 惠 美 子

〒204 東京都清瀬市中清戸二ー七五〇ー八
電話 〇四二四ー九一ー三〇三三

栗 田 功

久 保 春 雄

〒300 土浦市東崎町十三ー二一六〇四
電話 〇二九八ー二一ー二九七八

社団法人 日本産業用ロボット工業会

理事 事務局長 小 森 康 宏

〒105 東京都港区芝公園三ー五ー八
機械振興会館213号
電話 〇三(三四三四)二九一九(代)

株式会社 近藤写真製版所

取締役社長 近藤 勇 夫

〒162

東京都新宿区下宮比町二番一七号
電話 〇三―三三六〇―六二八一(代)

坂 上 明

坂 上 五 朗

坂 上 勝 朗

坂 上 豊

静岡大学教授

坂 本 重 雄

〒422

静岡市小鹿三丁目四―五―八二六
電話 〇五四(二八二)八〇五八番

佐々木 盛雄

〒161 東京都新宿区中井二一十一十八

コア・ライター

笹倉 強

〒352 新座市栄四ノ五ノ二五
電話〇四八―四七七―五六四〇

正呂地 群治

〒105 東京都港区芝大門二一六―十二
(正呂地ビル)
電話(〇三)三四三―二六五三

エディトリアルデザインワーク
鈴木事務所

アート・
ディレクター

鈴木 大助

〒162 東京都新宿区天神町六三ライオンズ
マンション神楽坂第五・302
TEL・FAX〇三―五二八―三五七四

勢川 武彦

〒164 東京都中野区東中野二一七―二〇
電話(〇三)三三六―一八六七六

高見 嘉都司

〒173 東京都板橋区能野町四〇番十一号
電話〇三一―三九五六―〇六〇〇

常
岡
幹
彦

谷
垣
正
雄

田
中
篤
郎

日本舞踊
端 唄
根 岸
西 崎
妙 祥

〒224
横浜市都築区大鵬町五〇〇一八
電話(〇四五)五九一―六六五五

田
英
夫

〒100 東京都千代田区永田町二―一―一
参議院議員会館229号室
電話(三五八二)三二一一内線五三二九

鶴
田
宏

新 田 浩 迪

〒222 横浜市港北区師岡町四一八クリンヒル大倉山C106
電話 〇四五―五四一―三四二九

野 村 豊

〒156 東京都世田谷区船橋七四―一二
電話 〇三一三四八二―九九三〇

波 多 洋 三

〒112 文京区春日二―一七―二
電話 〇三三三八二―一八六〇番

畑 義 則

宗教法人 青葉山 真照寺
八王子 青葉霊苑 許可・管理
(都営八王子霊園となり)
墓地分譲案内中

住 職 堀 井 隆 川

〒193 東京都八王子市元八王子町三一―三九七
電話 (〇四二六) 六三一八四〇三

代表取締役
社長 水 船 隆 昌

瑞豊産業株式会社

〒102 東京都千代田区五番町六
グレイス五番ビル7F
電話 (〇三三三二二) 一七三五

国際行政書士協会会員
東京都行政書士会会員

行政書士
宮野近

〒192

八王子市打越町一〇二二一三
TEL 〇四二六(三五)四三八五

ウエディングドレス専門創作卸
株式会社 シヤルム商会

常務取締役
東京店長

村上昇

東京店

〒164

東京都中野区弥生三一五―三
電話(〇三)二三七四―〇二五(代)
京都市中京区間之町通竹屋町上ル大津町六四五
電話(〇七五)二二二一―〇二二五(代)

本社

〒604

村上久夫

〒168

東京都杉並区高井戸東三一四―一二
電話(〇三)三三三三―一七二三四番

コスモ海運株式会社

代表取締役
社長

義積保

〒110

東京都台東区東上野三丁目十八番七号
(上野駅前ビル)
電話 〇〇三一三八三一―〇七〇一
FAX 〇〇三一三八三一―一五二〇五

渡邊圭造

渡邊隆男

集	編
記	後

★ある友人の年賀状に「親孝行したいときに親がいる」という川柳があり、高齢化時代を言い得ていると思つた。

現在、丹波に母が健在で早く逝つた父には果たせなかつた分、機会ある度に訪ね話し相手をする。このところ丹波と東京を毎月一回往復する内、交通手段の発達もさりながら感覚的に丹波が非常に近くなった。毎月十日〜二週間も丹波で暮らしていると故里も現実の生活の場となり、「故里は遠きにありて思うもの」というロマンチックな気分は味わえない。

(鶴田)

★『山ざる』は三号から頂いたので、郷友会との御縁も四十七年の頃からです。編集の内側の様子を知るようになったのは、ここ数年ですが、ボランティアの先輩の皆様、忙しい中を大変な役目をこなしておられるのに頭が下がる思いです。私はほとんど何もできず、ワープロもファックスもなしなので、健康で若い方がどん

どん手伝つて下さつたら、先輩の方々少しは楽になるのではないかと思いますか、如何でしょうか。

(木呂子)

★今年は百周年、百年に一度の記念すべき年にめぐりあわせたことは光栄である。次の二百年にむけ郷友会は永遠であつてほしいと願う。八十八周年もそうであつたが百周年記念大会は更に盛り上がりをもせ素晴らしい会となるものと信じている。出席を予定しておられる会員は、知人・友人にも呼びかけ一人でも多くの人を誘つていただきたい。「氷上政記」と「人物誌」を執筆して感じたこと、それは発足以来幾多の人材が丹波から輩出し世のため人のために尽くしてこられたこと。私達も自分達なりに百周年の意義について深く考えたい。

(宮野)

★本誌編集長の渡邊さんが(社)日本書籍出版協合理事長という要職にあつて東奔西走の多忙の身となられているため、前号から編集代行を承つている。今号は一〇〇周年特別記念号と銘打つてスタッフ一

同意気込んで取り組み、多くの原稿が寄せられて分厚いものとなったが、編集的には不満な点が多い。よく言われるように、編集は頭よりも足の作業である。短信記事ひとつとっても、こまめに歩き回りアンテナを張つていないといひ情報が得られない。今回はほとんど机上の作業に終始して身近な話題を逃してしまつた。大方のご叱正を仰ぎたい。

(池田)

山ざる 第26号

平成七年十月一日発行

〈編集委員〉 足立静雄 池田 忍 木呂子恵美子
足立和巳 大野善三 小田富士夫
坂上勝郎 田中篤郎 常岡幹彦
鶴田ゆき子 宮野 近 村上善英
渡邊隆男

発行者 関東水上郷友会会長・村上末吉

〒102 東京都千代田区神田小川町一ノ二

DMSビル内・関東水上郷友会・事務局

☎〇三(三三九三)〇七〇七

振替〇〇一〇一三二一三三三〇

製 作 株式会社二玄社

編集協力 株式会社ホンゴ出版

くつろぎ多彩、いま1枚のカードから...



30年の歴史と80,000名のエグゼクティブ達。

1枚のカードで全国200店をご利用いただける。

比類なきスケールの会員性クラブとして、

おらかなクラブライフをおとけています。



●当クラブでは、品位と風格を守るため、入会金資格を30歳以上の
の自営または管理監督職以上の方とさせていただきます。

お問い合わせ・資料請求は

エスカイヤクラブ本部事務局/〒530 大阪市北区芝田2-1-18西阪急ビル10F TEL06・372・8571

フリーダイヤル 0120・10355

エスカイヤクラブ東京事務局/〒104 東京都中央区銀座7-2-22同和ビル9F TEL03・3574・7340

嗚呼青春讃歌。

ロマンあふる恋歌、胸躍る軍歌、情感こもる唱歌、
ヒット歌謡まで、魂を揺さぶり、心の琴線に触れる数々の
歌・唄・詩……。専属のコラスガールと
ご一緒に心ゆくまでお楽しみください。



すずきのビル店 札幌市中央区南四条西3-3 すずきのビル6F 011-512-5191
銀座店 東京都中央区銀座6-5-16 銀座みゆき館4F 03-3573-5885
名古屋店 名古屋市中区錦3-19-6 ワンダブルプラザビル4F 052-951-5122
北新地店 大阪市北区曽根崎新地1-2-28 古沢ビル4F 06-344-6316



浮世を彩る舞い扇。

旬の味を盛りこんだ日本料理の数々、宴をいどる美酒。
そして、舞妓・芸妓の艶舞のおもてなし。
都心の夜を華麗に演出するお座敷情緒——。
心ゆくまで演舞を楽しめるクラブです。



銀座店 東京都中央区銀座7-7-6 アスタールプラザ4F 03-3574-7745
北新地店 大阪市北区曽根崎新地1-5-18笠井ビルB2 06-344-2913
南店 大阪市中央区東心斎橋1-6-5 南・VOビル2F 06-253-0581



大和実業株式会社 代表取締役社長 岡田一男
本社：大阪市北区芝田町2丁目1-18西阪急ビル10F TEL06(372)8571



設計・施工 桂建築計画工房